

若草物語

ルイザ・メイ・オルコット L. M. Alcott

水谷まさる訳

作者について

この「若草物語」(原名リツル、ウイメン)は、米国の女流作家ルイザ・メイ・オルコット女史の三十七歳の時の作です。父を戦線におくり、慈愛ふかい聡明な母にまもられて、足らずがちの貧しい生活ながら、光りを目ざして成長していく四人の姉妹を描いています。が、それは、けっして坦々たる道ではなく、不平、憎悪、苦悶、嫉妬など、さまざまのものが、彼女たちの健気な歩みを妨げるのであります。そして、その多く

の試練にたちむかう、四人の姉妹の、それぞれちがった性格の描写は、まことに、明暗多彩、克明精細、しかも、この一篇にみなぎる愛と誠とは、いかなる読者の心をも魅了し、感激させずにはおきません。なお、この物語は、オルコット女史が、いつているように、ほとんどじぶんたちの姉妹をモデルにしたものであり、家で起った事件もとりにいれてあります。それがために、この物語の四人の姉妹は、ありふれた娘であるにかかわらず、心にせまる真実性があり、いつも生きています、長くも生きるのです。

それですから、この作は千八百六十八年に公にされ

て以来、全世界にむかえられ、もう何十万部発行されたかわかりません。そして、今もなおベスト・セラー中にかぞえられています。

オルコット女史について、簡単に御紹介しますと、出生日は、千八百三十二年十一月二十九日、出生場所は米国ペンシルバニア州のジャーマン・タウン、父は教育家でした。この父は個性を尊重する理想主義の教育を主唱し、私学校を建設しましたが、経営に失敗しましたが、がって、一家は物質的には恵まれませんでしたが、四人の娘たちは精神的にゆたかな生活をしました。

オルコット女史は、二女で、この「若草物語」のジョ

ウに作者の面影が出ていますが、文筆の才に恵まれ、教鞭をとるかたわら、作家志願の精進をつづけ、二十三才のとき「#「とき」は底本では「とき」、「花物語」という処女作を出しました。

千八百六十一年、女史の三十歳のときに、南北戦争が起り、女史は篤志看護婦となって献身的なはたらきをしました。その後、三十七歳に「若草物語」つづいて、「グッド・ワイブス」「リトル・メン」など大作を世に送りました。「若草物語」を公にしてからの女史は、物質的にもめぐまれ、父の負債をかえし、母を安楽にさせ、妹のメイには絵の修行をさせてやり、自分もあ

こがれのヨーロッパ旅行をして、イタリイに滞在しました。

けれど、母がなくなつてから、女史の肩にまた重荷がかかつてきました。妹のメイは結婚後しばらくして死に、残されたあかんぼを引きとらなければなりませんでした。女史はいよいよはたらきました。女史の知人は同情して補助をしようと思いましたが、女史は補助を受けるのがいやで、困難のなかにも忍耐して努力しました。そうして、女史は千八百八十八年三月六日、五十五歳で、父の死後わずか二日、最愛の父の後を追つて、ボストン市で永遠の旅路にのぼりました。女史の

一生は、愛と誠をもってする努力精進の一生でありました。

第一 巡礼あそび

「プレゼントのないクリスマスなんか、クリスマスじゃないわ。」と、ジヨウは、敷物の上にねそべって不平そうにいました。

「貧乏ってほんとにいやねえ。」と、メグはじぶんの着古した服を見ながらため息をつきました。

「ある少女が、いいものをたくさんもち、ある少女が、ちつとも、もたないなんて、不公平だと思わ。」と、小さいエミイは、鼻をならしながらいいました。

「でもね、あたしたちは、おとうさんもおかあさんもあるし、こうして姉妹があるんだもの、いいじゃないの。」と、ベスが、すみのほうから満足そうにいいました。

ストーブの火に照らしだされた四つのわかわかしい顔は、この快活な言葉でいきいきとかがやきましたが、ジヨウが悲しそうに、

「だって、おとうさんは従軍僧で戦争にいつておるすだし、これからも長いことお目にかかれないと思うわ。」と、いったとき、またもやくらい影におおわれ、だれもしばらく口をききませんでした。けれど、やが

てメグが調子をかえて、

「おかあさんが、今年のクリスマスは、プレゼントなしとおっしゃったのは、みんな暮しがつらくなるし、兵隊さんたちが戦争にいつているのに、たのしみのためにお金を使うのはいけないと、お考えになったからよ。あたしたち、たいしたことはできないけど、すこしの犠牲ははらえるし、よろこんではらうべきだわ。でも、あたしははらえるかしら？」

メグは、ほしいものを犠牲にするのがおいしいというように頭をふりました。

「だけど、あたしたちの1ドルを献金したって、たい

して兵隊さんの役にたつとは思えないわ。あたしはおかあさんやあなたがたから、プレゼントがもらえないのはいいとして、じぶんでアンデインとシントラム(本の名)を買いたいわ。前からほしかったんですものと、本の好きなジョウがそういうと、ベスはため息をつきながら、

「あたしはあたらしい譜本を買いたいわ。」

エミイも、きつぱりと、

「あたし、フエバアの上等の色鉛筆がほしいわ。ほんとにあたしいるんですもの。」と、いいました。ジョウは、

「おかあさんは、あたしたちのお金のこと、なんにもおっしやらなかつたわ。だから、めいめいほしいものを買ったのしみましようよ。これだけのお金をもうけるのに、みんなずいぶん苦労したんだもの。」と、紳士がやるように長靴のかかとをしらべながらいいました。

「そうよ、ほとんど一日中、あのやつかいな子供たちの勉強を見てやるのたまらないわ。」と、メグがまたも不平をいいますと、つづいてジョウが、

「そんなことあたしの半分の苦労じゃないわ。あたしは、神経痛で気むずかしいおばあさんに使われてさ。」

どんなにしてあげても気にいらなくて、いつそのこと窓からとびだそうか、それとも、おばあさんの横つ面をはりとぼしてやろうかと思うくらいよ。」

「不平、いつてもしょうがないけど、皿をあらったり、そこらを片づけたり、そんな家のなかの仕事は、ほんといいやな仕事だわ。手がこわばって、ピアノひけないわ。」

ベスは大きな「#「大きな」は底本では「大きな」ため息をついて、荒れたじぶんの手を見ました。すると、エミイも大声でいいました。

「あたしぐらい苦勞しているものないわ。だって、あ

なたたちは、勉強ができないといっていじめたり、服がおかしいといつて笑ったり、おとうさんが金持でないといったり、鼻のかけっこうがわるいといつてあざけったりする生意気な連中と、いっしょに学校にいかなくてもいいんですもの。」

こうして、みんなが不平をぶちまけたあげく、メグがいました。

「あたしたちの小さいとき、おとうさんのなくされたお金が、今でもあったらいいと思わない？ そうしたら、どんなに幸福でしょう。」

すると、バスが聞きとがめていいました。

「こないだ、ねえさんは、キングさんのところの子は、お金があつても、いつもけんかしたり怒ったりしてるから、あたしたちのほうがずっと幸福だっていったじゃないの？」

「ええ、いったわ。あたしたちは、はたらかなければならないけど、ジョウのいうように、たのしいあいぼうですもの。」

「ジョウねえさん、あいぼうだなんてぞんざいな言葉だわ。」と、エミイは、敷物の上にねそべっているジョウのほうを見ていました。ジョウは、すぐに起きなおって、エプロンのかくしに、りよう手をつつこんで、

口笛を吹きはじめました。

「ジヨウ、およしなさい。まるで男の子みたい。」

「だから、あたしするの。」

「あたし、下品な、女らしくない子は大きらい。」

「あたし、気どり屋のおすまし、大きらい。」

すると、仲裁者のベスがおどけ顔で、

「おなじ小さな巢にいる小鳥、いつもなかよしあらそわぬ。」と、うたいだしたので、二人のどがった声も笑い声となりましたが、メグがねえさんぶつてお説教をはじめました。「#「ました。」は底本では「しまた。」」

「二人ともいけないわ。それにジヨウは、もう男の子

みたいなおいたはやめて、しとやかになさいよ。せいも高いし髪もゆってるのですものもうわかい婦人だわ。」

「そんなら二十才まで、おさげにしとくわ。あたし、男の子のあそびごとや仕事や身なりが好きなのに、女に生れてつまらないわ。この頃は、おとうさんといっしよに、戦争がしたくてうずうずしてるのに、家にてよぼよぼあさんみたいに、編物をしてるだけなんだもの。」

「かわいそうなジョウねえさん、まあ名前でも男の子らしくして、あたしたちのいさんになって、がまん

しておくんだわねえ。」

ベスがなぐさめるようにいいました。メグは、またお説教をつづけました。

「「#」は底本では欠落」それから、エミイは、気むずかし屋で、かたくるしいわ。今はかわいいけど、気をつけないと大人になったら、がちようみたいに気どり屋さんになるわ。上品ぶらないときは、しとやかなのも、いい言葉も好きだけど、あんたのませた言葉は、ジョウの下品な言葉とおなじように、よくないわ。」

「ジョウがおてんばで、エミイが気どり屋さんなら、ねえさん、あたしはなあに？」と、ベスはじぶんもお

説教されたがつて口をはさみました。

「あなたは、かわいい子、ただそれだけよ。」

メグは、やさしくそういいましたが、これには、だれも反対しませんでした。

ところで、みなさんは、この四人の姉妹がどんな人
がらか、知りたいでしょう。おもてには十二月の雪が
ふり、家のなかには、たのしそうにストーブの火のも
えている夕暮のうすやみのなかで、編物をしている四
人姉妹をスケッチしてみましよう。その前に、部屋の
ようすをいえば、敷物の色はさめ家具類は質素ですが、
壁にはりっぱな絵が一つ二つかけられ、本棚にはぎつ

しりと本がならば、出窓には菊やばらが咲いています。古い部屋ですが、平和な家庭のなごやかさが、隅々にまで充ちわたっていました。

長女のマアガレット（メグ）は十六で、かわいい娘です。ふとつて、目が大きく、とび色の髪はふさふさとしており、口もとがかわいく、じぶんでもいくらか得意の白い手をしています。

十五になるジョウは、せいが高く、やせて、小麦色の肌をして、すらりと長い手足をもてあましているようすから、なんとなく仔馬を思わせます。きりつとした口もと、おどけた鼻、きつい灰色の目をもつ顔は、

ときにはするどくなり、ときにはおどけ、ときには思
い深げになります。その長いゆたかな髪は、すぐれて
美しいけれど、いつもむぞうさにネットのなかに束ね
ています。

みんながバスとよぶエリザベスは、ばら色の血色の、
くせのない髪のを、あかるい目をした十三の少女で内気
でおだやかですから、おとうさんが「ひっそり姫」と
いう名をつけたのは、たしかにうってつけでした。

エミイは、一ばん下ですが、じぶんでは一ばんだ
いな人物だと思っています。目は青く、ちぢれた金髪
を肩までたらし、あどけない少女で、青白く、やせ

て、いつも起居ふるまいに気をつける、わかい貴婦人
です。

時計が六時をうちました。ベスはストーブのまわり
を掃いて、スリツパをならべてあたためました。やが
て、おかあさんのお帰りです。四人の顔によるこびが
かがやき、メグはお説教をやめてランプをともしまし
た。

すると、その古いスリツパが問題になりました。み
んなが、じぶんが買っておかあさんにあげるといいは
り、また、一もめ、もめそうでしたが、ベスが、

「みんなで、おかあさんにクリスマスプレゼントをあげましょうよ。じぶんのは、買わないで。」と、いったので、それはいい思いつきだということになり、あれこれ考えたあげく、メグは上等の手袋、ジヨウは上等のスリツパ、エミイはへりのついたハンカチ、ベスは coron 水の小瓶にきめました。

ジヨウは、せなかに手を組み、天井をあおいで部屋を歩きながらいいました。

「おかあさんには、わたしたちが、じぶんのを買っていると思わせておいて、びつくりさせてあげましょうよ。メグ、明日の午後に買物にいかないと、クリスマス

マスのお芝居のことで、することがたくさんあるわ。」
すると、メグがいきました。

「あたし今度きりで、もうお芝居なんかしないつもりよ。あんなこと子供くさいもの。」

「だって、ねえさんは一ばんの役者ですもの、ねえさんがぬけたらおしまいよ。エミイ、さあ、いらっしやい。おけいこしましょう。気を失うところをなさい。あんたは火ばしみたいにかたくなるんだもの。」

「しかたがないわ。気を失うところなんか見たことないんですもの。」

「こうやるのよ。手を組み合せて、ロ德里ゴ！ 助け

て、助けて！ と「#」と「」は底本では「と」「」気狂い
みたいにさげびながらよろけて部屋を横ぎるの。」

ジョウは、ほんとに悲鳴をあげてやってみせました。
それにならってエミイもやりましたが、まるでぎこち
なく、おお！ という声だつて、絶望どころか、身体
にピンでもささった時のようでした、ジョウががつか
りしてうめくと、メグは笑いだすし、ベスもおかしがっ
て、パンをこがしてしまいました。

「おけいこしてもむだだわ、そのときになって、でき
るだけになさい、見物が笑つても、あたしのせいにし
てはいやよ、さあ、それでは、今度はねえさんよ。」

それから、すらすらと進行しました、ジヨウのド
ン・ペデロは長い科白をまくしたてて世をあざけり、
魔女のハーガーは、ひきがえるのいっばいはいった釜
をのぞいて呪文をとなえ、ロデリゴは、おおしくも鉄
のくさりをたちきり、ユーゴーは毒をあおいで苦しみ
ながら死んでいきました。

「今までのおけいこのうちで、一ばんうまかったわ、」
と、メグがいうと、ベスも「ジヨウねえさん、どうし
てこんなにっぱなものを書けるの？ それに、お芝居
もじょうずだわ、」

「それほどでもないけど、この『魔女の呪い』は、す

こしはいいかもしれないわ、それはそうと、シエークスピアの『マクベス』がやってみたいのよ。」と、いつて、

「目の前にちらつくは短剣か？」と、有名な悲劇役者のしぐさをまね、目の玉を光らし、虚空をつかんでいました。すると、メグがさげびました。

「あら、フォークにさしてやいてるのは、パンじやなくて、おかあさんのスリツパよ、」

なるほど、スリツパが火にかかっています。ベスは、おけいこを見て夢中だったので。みんなは大笑いしました。

「ずいぶん、たのしそうね。」と、戸口でおかあさんの声がしました。ねずみ色の外套を着て、流行おくれのボンネットをかぶったおかあさんも、娘たちの目には、この世でならびない、すばらしい人としてうつりました。

「今日はべつになんにもなかったの？　おかあさんは、明日送りだす慰問箱の仕度でいそがしくて、御飯までに帰れなかったの。バス、どなたかお見えになった？　メグ、かぜはどう？　ジヨウ、あなたはひどく疲れているのね、さあさあ、みんな来て、キツスしてちょうだい。」

マーチ夫人はぬれた外套をぬぎ、あたたかいスリッパをはき、ソファに腰をおろして、エミイ「#「エミイ」は底本では「アミイ」を膝にのせ、多忙な一日の一ばんの楽しいときを、たのしむのでした、メグとジョウとベスは、さつそくとびまわって、食事の支度をし、すべてととのうと、みんなテーブルのまわりにつきましました。

「晩御飯がすんだら、みんなにおみやげをあげますよ。」

さつと、あかるいほほえみ「#「ほほえみ」は底本では「ほえみ」が、みんなの顔をかがやかしました。ジョ

ウは、ナフキンをほうりあげてさげびました。

「手紙だ、手紙だ、おとうさん、ばんざい！」

「ええ、いいお便りです。おとうさんは、おたっしやで、案じていたほどでもなく、この寒い冬を元気で過ごすなされそうですつて。」

おかあさんは、そういつて、まるで宝物でもはいつているように、ポケットをたたいて見せました。さあ、もうゆるゆる食事なんかしていられません。パンを床に落したり、お茶にむせたりしてたいへんでした。

「さあ、それでは、お手紙を読んであげましょうね。」
みんなは、ストーブの前にあつまりました。おかあ

さんはソファにかけました。こういう非常のときの手紙は、つよい感動をあたえるものですが、この手紙もそうで、危険に身をさらしたとか、つらいとかということは、すこしも書いてなく、露営、進軍、戦況などがいきいきとした筆で書かれ、たのしく希望にみちていましたが、最後のところで、大きな感動をあたえませんでした。

「娘たちに、わたしの愛とキスをあたえて下さい。昼は娘たちのこと思い、夜は娘たちのために祈り日夜娘たちの愛情のうちに慰めを見出しています。娘たちとあうまでの一年は、長く思われるが、待ちわびるその

あいだに、たがいに仕事につとめ、日々をむだにしな
いようにとお告げ下さい。娘たちは、御身には愛すべ
き子供であり、忠実に義務をおこなない、「#」「」は底本
では「。」「心中の敵と勇ましく戦い、みごとのうち勝つ
て、わたしが凱旋のときには、以前にもまして愛らし
く、誇りうるように生長しているように、出発のとき
に申し聞かせたことを、すべてよく記憶していると思
います。」

ここまできると、みんな鼻をすすりはじめました。
涙をとめることはできません。

「あたしわがままだったわ、おとうさんが失望なさら

ないように、いい子になります。」と、エミイがいいま
すと、メグが、

「みんないい子になりましょう！ あたし見栄ばかり
気にして、はたらくこときらいだったわ、もうやめる
わ。」と、さげびました。

「あたしも、いい子になって、らんぼうなまねよすわ。
どこかへ、いきたいなんて思わずに、家でじぶんのつ
とめをするわ。」

ジョウは、家でおとなしくしてるのは、敵一人や二
人にたちむかうよりむずかしいと思いつながらいいまし
た。ベスは、だまっていますでしたが、青い軍用靴下でそつ

と涙をふき、身近の義務を果すための時間のむだにし
まいとして、せっせと編みました。

おかあさんは、ジョウの言葉につづいた沈黙を、快
活な声でやぶりました。

「あなたたちが小さかったとき、「巡礼ごっこ」の遊び
をしたことおぼえていますか？ みんなせなかに、あ
たしの小布のふくろをしょって、帽子をかぶり杖をつ
き、まいた紙をもって、破滅の市の地下室から、日の
照っている屋根の上までいき、そこで天国をつくるた
めに、いろいろな美しいものをいただくくらい、うれ
しいことはなかったでしょう。」

みんなは、そのときのいろんなできごとを思いだして話しましたが、エミイまでが、もうこんなに大きくなつては、あんなあそびできないというのがとがめて、おかあさんはいいました。

「いいえ、年をとりすぎてはいません。あたしたちは、まあお芝居をしているようなものです。荷物はここに、道は目の前にあります。よいことと、しあわせを求め、る心が、たくさんの苦労や、あやまちのなかを通りぬけて、ほんとの天国、いいかえれば平和に導いてくれるのです。さあ、小さい巡礼さんたち、今度はお芝居あそびではなく、本気でやって、おとうさんがお帰り

になるまでに、どのあたりまで巡礼ができるか、やってみてはどう？」

「おかあさん、それで、荷物ってどこにありますの！」と、エミイが尋ねました。

「ベスのほかは、みんながじぶんの荷物が、なにか、いいましたよ。ベスは、きつとなにもないのでしよう。」

「いいえ、ありますが、あたしのはお皿とはたきと、いいピアノをもってゐる娘をうらやむしがることですわ。」

「それでは、みんなでしましょう。巡礼ごっこという

のは、よい人になろうと努めることね。」

メグは、考えこむように、そういいました。

「あたしたちは、今夜は、絶望の沼にいたのね、すると、おかあさんが来て、あの本のなかで、救助がやったように、ひきあげて下すつたんです。だけど、掟の巻物を、どうしましょう？」

ジヨウが、そういうと、おかあさんが答えました。

「クリスマスの朝、枕の下をごらんさい。見つかるでしょうよ。」

ばあやのハンナが、テーブルを片づけているあいだに、四人の少女たちは、あたらしい計画について話し

合い、それからマーチおばさんの敷布をつくるために、
四つの小さな仕事かごがもちだされ、せつせと針をは
こぶ「#「はこぶ」は底本では「ばこぶ」のでしたが、今
夜はこのおもしろくない仕事に、だれも不平をいいま
せんでした。

九時に仕事をやめて、いつものとおり、おわる前に
歌を合唱しました。ベスはおんぼろピアノで、こころ
よい伴奏をしました。メグは笛のような声で、おかあ
さんと二人で、この合唱隊をリードしました。姉妹た
ちは、この歌を、

「きらりきらり、ちっちゃな、星さま」と、まわらぬ

舌でうたったところから、今だにつづけて「#「つづけて」は底本では「つづけて」います。おかあさんは生れつきうたがじょうずなので、これが行事の一つとなったわけでした。朝、まず聞えるのは、家のなかを、ひばりのようにうたうおかあさんの声で、晩に聞える最後の声も、おなじたのしいその声でした。姉妹たちはいくつになっても、そのなつかしい子守唄を、聞きあきるということはありませんでした。

第二 たのしいクリスマス

クリスマスの朝、まだほのぐらい明方に、ジヨウが一ばんさきに目をさました。ジヨウは、おかあさんとの約束を思いだして、枕の下へ手をさしこみ、小さい赤い表紙の本をひきだしました。それはこの世でもっともすぐれた生活をした人の美しい物語で、よい道案内だと思いました。ジヨウは、「クリスマス、おめでとう。」といって、メグを起し、枕の下を見てごらんささいといました。ありました。やはり、あかい絵のある緑の表紙の本で、おかあさんの手でみじかい言葉が

書かれていました。まもなく、バスとエミイが目をさまし、枕の下に本を見つけました。一冊は鳩羽色、一冊は空色の表紙でした。みんなは起きなおり、本をながめて話し合いました。「#「ました」は底本では「ましに」が、そのうちに東の空がばら色に染つてきました。

メグがいいいました。

「まい朝、目がさめたらすこしずつ読んで、その日一日、あたしを助けてもらいましょう。」

メグが読みはじめると、ジョウは片手をメグの身体にかけ、ほおをすりよせました。ほかの二人もしずかに頁をくりました。三十分ばかりして、メグはジョウ

といっしよに、おかあさんにプレゼントのお礼をいいに階下へかけおりていきました。

「#」「は底本では欠落」おくさまは、どこかの貧乏な人がおもらいに来たので、なにかいるものを見に、すぐお出かけになりました。おくさまみたいに、食物や着物や薪までおやりになる方はありませんよ。」と、ハンナが答えました。ハンナは、メグが生れてから、この家族といっしよに暮してきて、女中というよりは、友だちとしてあつかわれているのです。「#」「は底本では「。」」

「すぐにお帰りになると思うわ。だから、お菓子をや

いて、すっかり用意しておいてね。」と、メグはかごに
いれてソファの下にかくしておいたプレゼントを、い
ざというときに、とり出せるようにしてから、

「あら、エミイのコロン水の瓶は？」

「エミイが、リボンをかけるとかといつて、もっていつ
たわ。」と。ジヨウがいいました。

「ねえ、あたしのハンケチいいでしょう。ハンナが
洗ってアイロンをかけてくれたのよ。マークはあたし
がつけたの。」とベスは、ぬいどりの文字をほこらしげ
にながめました。

「まあ、この子は、エム・マーチでなく、マザアなん

てぬいとりして、おかしいね。」と、ジヨウがいうと、
ベスはこまったような顔をして、

「いけないの？、エム・マーチだと、姉さんもおなじ
だから。」

「いいのよ、それならまちがいつこないから。「#」か
ら。」は底本では「か。ら」きつとおかあさんの気にい
るわ。」と、メグは、ジヨウには顔をしかめ「#」「しか
め」は底本では「しかあ」、ベスには笑顔を見せていい
ました。そのとき、扉の音がしたので、ジヨウは、「#
「」は底本では欠落」そらおかあさんだ、かごを早くか
くしなさいよ。」

エミイが、いそいで入ってきました。

「どこへいつていたの？ うしろに、かくしているの
なあに？」

メグは、怠け者のエミイが、朝早く外出してきたの
を見てびつくりして尋ねました。

「笑っちゃいや。あたし小瓶を大瓶にかえてきたの。
これでお金はないわ。もうよくばりはやめにするの
よ。」

エミイのかわいい努力に感じて、メグはさっそく彼
女を抱きしめ、ジヨウは窓へいき、じぶんの一ばんい
いばらの花をとってきて、その瓶をかざりました。

また扉の音がしました。かごはソファの下にかくされ、姉妹たちはテーブルにつきました。おかあさんがくると、姉妹たちは口をそろえていいました。

「クリスマス おめでどう 本をありがとうございしました。もう読みはじめました。まい日読もうと思いません。」

「みなさん、クリスマス、おめでどう！ さつそく読みはじめてうれしく思いますよ。つづけて読むようになさいね、ところで、食事の前に一言いいたいことがあります。すぐ近くに、あかちゃんを生んだ貧乏な女の人があります。火の気がないので、六人の子供たちが、

こごえないように、一つのベッドにだき合ってねて
います。それに、なにも食物がないので、一ばん上の子
が寒くてひもじくて、とても苦しんでいるといいにき
ました。みなさん、あなた方の朝御飯を、クリスマス
のプレゼントにあげませんか？」

みんなは一時間近くも待つていたので、ひどくお腹
がすいていたので、ちよつとのあいだ、だまつていま
した。が、ジヨウが勇ましくさけびました。

「食べないうちに、おかあさんが帰っていらして、ほ
んによかった。」「#」は底本では欠落」ベスは御飯
を運ぶお手伝いをしたいといい、エミイは、クリーム

と軽焼を持って行ってあげるといいました。その二つともエミイの一ばん好きなものでした。メグは、早くもそばをつつみ、パンを大きな皿にもりました。おかあさんは、満足そうにほほえみながらいいました。

「きつと、みなさんは賛成すると思っていました。さあ、来て手伝って下さい。帰ったらパンとミルクで朝御飯をすませて、夕飯にそのうめ合せをしましょう。」

すぐ仕度をして、みんなで出かけました。いってみておどろきました。なんと、あわれな部屋でしょう。窓はやぶれ火の気はなく、蒲団はぼろぼろでした。おかあさんは病気で、あかんぼうは泣き、青い顔のひも

じい子供たちは、一枚の蒲団にくるまってかたまっていました。みんながはいつていくと、子供たちは目を大きく見はり、青ざめた唇にはほえみをうかべました。「ああ、神さま！ 天使たちがいらした！」と、そのあわれな女は、うれし泣きに泣きながらさげびました。ジヨウは、

「頭をかけ手袋をはめたおかしな天使でしょう。」と
いって、家中の者を笑わせました。

たちまち、この家にやさしい精霊がはたらきだしたように思われました。薪を運んできた。ハンナは火をおこし、古い帽子や、じぶんの肩かけで窓のやぶれを

ふさぎました。おかあさんは、母親にお茶やかゆをあ
たえ、あかんぼうをじぶんの子供みたいに着物を着せ、
これからもお世話をしますと約束してなぐさめました。
姉妹たちは、そのあいだにテーブルの支度をし、子供
たちを炉のまわりにすわらせ、お腹のすいている小鳥
たちを養うように食べさせました。

「ああ、おいしい、子供の天使！」と、子供たちは食
べながらいって、紫色にこごえた手をあたたかい火で
あたためました。

帰ってから、姉妹たちは、パンとミルクしか食べま
せんでしたが、それはたのしい朝御飯でした。おそら

くこの市で、この少女たちより、「#」「」は底本では「。」
幸福であった人はなかつたでしょう。

おかあさんが、すこしおくれて帰つて来たとき、プレゼントはもう用意され、ベスの陽気な行進曲とともに、メグがおかあさんを、ていねいに設けの席につけました。おかあさんは、ほほえみをたたえて、プレゼントについている札を読み、スリッパをすぐにはき、ハンケチにコロナ水をかけて、かくしにしまい、ばらの花を胸にさし、きれいな手袋をはめました。それから、たのしい談笑とくちづけがつづき、よい思い出としてみんなの心に残ることばかりでした。

やがて、めいめい仕事をはじめました。仕事は晩のお芝居の支度で、金をかけずにあり合せのもので、気のきいた小道具や衣装をつくるのでした。

その晩、招かれた十人あまりの少女たちが、上等席のベッドの上にならびました。まもなくベルがなり幕があがりました。「魔の森」です。鉢植や箆笥を利用して森と洞穴をあらわしました。魔女が、洞穴の炉にかかっている鍋をのぞきこんでいると、悪漢ユーゴーが腰の剣をがちやつかせて登場しました。ユーゴーは、ロデリゴへの憎しみと、ザラへの愛をうたい、「#」「」は底本では「。」ロデリゴを殺してザラを手にいれたい

決心をのべ、洞穴へしのびより、「おい、女、御用だぞ。」と、いつてハーガーに出てくるように命じました。

メグは、白い馬の毛を顔にたらし、赤と黒の衣をまとい、杖をもってあらわれます。ユーゴーが愛の魔薬と死の魔薬を求めると、ハーガーは、あたえることを約束し、愛の魔薬をもつてくるように歌で妖精をよびました。

すると、やわらかな音楽につれて、洞穴のかげから、きらきらした翼をつけ、金髪にばらの花冠のかわいい妖精があらわれ、愛の魔薬をいれた金色の瓶をおとして、すがたをけします。そこで、ハーガーがもう一度

うたうと、ものすごいひびきとともに、真黒な小鬼があらわれ、しゃがれ声で返事をしたかと思うと、黒色の瓶をユーゴーに投げつけてすがたをけしました。すると、ハーガーは、ユーゴーに、むかしじぶんの友人を二三人殺したことがあるから、じぶんは彼の計画のじやまをするつもりだといいます。かくて、幕はさがりました。

第二幕の舞台はりっぱでした。城の塔が高くそびえ、窓にランプがともっていました。青と白の衣をつけてザラがあらわれ、ロデリゴが来るのを待っていると、まもなく、羽かざりのある帽子をかぶり、赤い外套を

着て、ギターをもったロ德里ゴが来て、塔の下でやさしく小夜曲をうたいました。ザラは、城をぬけだすことを歌で答えます。そこで、ロ德里ゴは縄梯子をかけ、ザラはそれをつたっておりるのでした。

ところが、とんだことが起りました。それはザラが、衣の裾の長いことを忘れ、ロ德里ゴの肩に手をかけておりようとしたとき、裾がからまり塔はすごい音とともに倒れ、二人はその下敷になったのです。芝居はめちやめちやになりそうでしたが、気をきかしたドン・ペデロがとびこんできて「笑つちやだめ、知らん顔をしてやるのよ。」といいながら、じぶんの娘のザラをす

ばやくひきだし、ロ德里ゴにむかつて立てと命じ、怒りと嘲りを浴せながら王国から追放するぞと宣告しました。ロ德里ゴはなにをと、その老人をののしり、立ち退くことを拒みました。その勇ましい態度に、ザラもちからを得て、父である領主にたてついたので、彼は二人を城の牢屋にほうりこむことを命じますと、家来がだまつてひきたてていきました。

第三幕は、城の広間で、魔女ハーガーが、牢屋の二人を救い出し、ユーゴーを殺そうと思つてあらわれます。魔女はユーゴーの足音を聞いてかくれます。ユーゴーは二つのコップに魔薬をつぎ、小女に、「これを牢

屋にいる囚人にあたえ、わしがすぐに行くと言げよ。」
と、いいつけます。家来はそばへいつて、なにかを告
げる間に、ハーガーは二人のコップを害のないもの
にかえます。小女はそれを運んでいき、ユーゴーはう
たった後に魔薬のはいつたほうを飲み、もだえ死にま
す。そこで、ハーガーは、じぶんのしたことを告げま
すが、その歌は、一ばんすばらしいできばえでした。

第四幕、ロデリゴが、ザラにうらぎられたと知つて、
絶望して胸に短刀をつきさそうとします。そのとき部
屋の下で歌がうたわれザラの心はかわらないが、今あ
ぶない目にあつてゐるから、ロデリゴにもし真心があ

るなら、ザラを救いだせると告げます。ロデリゴはよろこび、投げあたえられたかぎで扉を開け、くさりをたち切つて愛人を救いに走ります。

第五幕は、ザラと父ドン・ベデロのはげしい争いからはじまります。父はザラを尼寺へやろうとしますが、ザラは聞き入れず、「#」「」は底本では「。」悲痛な訴えをつづけ、気絶しそうになったとき、ロデリゴがきて結婚を求め、つれていこうとします。父はロデリゴが金持でないのを理由にこばみます。そこへ、家来がハーガからの手紙と袋をもつてきますが、手紙にはハーガーは、わかい二人に遺言によつて莫大な財産を

あたえ、もしザラの父がわかい二人を幸福を妨げるならば、その身におそろしい呪いがかかると書いてありました。そして、袋を開けると、ブリキの金貨がきらめきました。これで、頑迷な領主の心もとけ、わかき二人の結婚を許したので、一同はたのしい合唱をして、感謝のいのりのうちに、愛する二人は、ザラの父の前にひざまずき、祝福をうけると幕がおりました。

嵐のような喝采がおこりましたが、上等席のベッドが、きゆうにたたまれ、大さわぎになりました。幸にけがもなく救いいただきましたが、そのさわぎのおさまらないうちに、女中のハンナがあらわれ、

「おくさまが、みなさんに、夕飯に階下へ来るようにとおっしゃってます。」と、いいました。

これは、ふいうちで、食卓を見たとき、息がとまるほどおどろきました。だって、アイスクリームが、赤と白と二皿、お菓子、果実、フランスボンボン、そして、食卓の上には、温室咲きの大きな花束がありました。

「妖精が下すつたの？」と、エミイ。すると、ベスは、
「サンタ・クロースよ、きつと。」

メグは、白いひげをはやし、白い眉毛をつけたまま、
「おかあさまだわ。」と、いいました。ジョウは、

「マーチおばさまが、すてきな思いつきで、とどけて下さったのよ。」と、いいました。

おかあさんは、にっこり笑いながら、

「みんなちがいます。ローレンスさまが、下すったのです。」

「ローレンスの、ぼっちゃんのおじいさまですって？ どうしてでしょう？ わたしたちを、ごぞんじないのに。」と、メグが、おどろいていいました。

「ハンナが、ローレンスさんの家の女中さんに、今朝のことを話したのです。ローレンスさんは、それを感心なさって、ていねいな手紙で、今日のお祝いにプレ

ゼントをしたいと言って、およこしになったのです。」
「ぼっちゃんが、思いついたんだわ。いいぼっちゃん
だわ。お友だちになりたいけど。」と、ジヨウがいいま
すと、それをきっかけに、ローレンス家のうわさに花
がさきました。

ローレンスさんは、お金持だが、ちよつとかわって
いて、あまりつきあいもしませんが、ぼっちゃんは、
いい子で遊びにきたいらしいけど、はにかみ屋だもの
で、遊びに来れないらしいというようことが話され
ました。すると、おかあさんは、

「ぼっちゃんは、りっぱな紳士のようです。いい折が

あつたらお友だちになるといいと思います。この花は、じぶんで持つていらつしやいました。二階のさわぎを耳にして、さびしそうに帰られたのです。」

「では、いつか、ぼつちやんが見てもいいお芝居をしましょう。」と、ジヨウがいました。

「あたし花束なんか、もらったことないわ。きれいねえ。」と、メグは花束に見入っていました。そのとき、おかあさんが、

「花束はかわいいけれど、ベスさんのぼらはなおかわいいい。」と、いって、胸にさしたベスのしほみかけたばらをかぎながらいますと、ベスはおかあさんに身を

すりよせて、

「あたし花束をおとうさんのところへお送りしたかったの、おとうさんは、あたしたちみたいに、たのしいクリスマスをしてはいらっしやらないでしょう。」と、小さい声でいいました。

第三 ローレンスのぼっちゃん

「ジヨウ、どこー！」と、メグが屋根部屋の梯子の下か

らよびました。

「ここよ。」

かけあがつていくと、ジヨウは日なたぼっこをして林檎をかじりながら本を読んでいた。

「とても、いいニュース。明日の晩、来てほしいという、ガーデイナアのおくさんの正式招待状よ。」と、メグはその手紙を嬉しそうに読みました。

「大晦日の晩に、小宅で舞踏会を催します。ミス・マーチ、ミス・ジヨセフィン、お二人とも御光栄下されたく存じます。ガーデイナア夫人——おかあさんはいつでもいいって。だけど、あたしなにを着ていこうかし

ら？」

「そんなこと、きいたつてだめよ。ポプリンの服しかないんだから、あれを着ていくほかないの知ってるくせに。」と、ジヨウは、林檎を口いっぱいほおぼっていました。

さあ、それから、メグは、絹の服があればいいとか、手袋のいいのがないとか、くよくよと、こだわつてばかりいましたが、ジヨウは服に焼けこがしがあるけど、平気が着ていくし、手袋なしですますつもりでした。ジヨウにとつては、そんなことたいして心わずらすことではありませんでした。

「あたしのことは心配しないでいいわ。できるだけ、おすましまして、しくじらないように気をつけるわ。それでは返事を出さないよ。」

そこで、メグは、服の用意にとりかかるために出ていき、ジヨウは、なおしばらく林檎を「#「林檎を」」は底本では「林檎をを」かじって本を読んでいきました。

大晦日の晩は、客間はからっぽでした。二人の妹は、着付役にまわり、二人の姉は、夜会のお仕度という、きわめて重要なお仕事に夢中でした。化粧はかんたんでも、二階へかけあがったり、かけおいたり、笑ったりしやべったり大さわぎで、メグが額の上にすこし捲

髪がほしかつたので、ジヨウがこてで焼いたら、つよい髪の焼けるにおいが家中にただよいました。その失敗に、メグは泣きだすしジヨウは心苦しそうでした。このほか、小さい失敗は、かず知れず、それでもやつと二人の仕度はできあがりました。メグは、銀褐色の服、空色ビロウドの、リボンに、レースのふち飾り、そして、真珠のピンをさしました。ジヨウは、海老茶色の服に、かたい、男のするようなカラア、それに白菊を飾りにしただけでしたが、ともかく、二人ともすつきりとしていました。二人とも、きれいな手袋を片方ずつはめ、よごれた方をもちました。苦心のお仕度で

ありました。

姉妹が、すまして歩道へ出ると、おかあさんは、

「いつてらつしやい、お夜食はたくさん食べちやいけませんよ。ハンナを十一時に、お迎えにあげるから、帰っていらつしやい。」と、いつて、窓をしめましたが、すぐに、また、

「もしもし、二人ともきれいなハンカチもっていますか？」と、念をおしました。

「ええ、まつ白よ、ねえさんはコロン水もかけました。」と、ジヨウは答えました。

二人は、カーデナア夫人の家に行く、その化粧室

で、かなり長いあいだ鏡をのぞいてから、すこしびくびくしながら、階下におりていきました。二人は、めつたに舞踏会などに招待されたことがないので、今晚の会は略式でも、二人にとっては大きな事件でした。

りっぱな老夫人カーデイナア夫人は、にこやかに二人を迎えてくれ、六人の娘のなかの長女に二人を渡しました。メグはサーリーさんを知っていたので、すぐに親しく話し出しましたが、女の子らしいおしゃべりに興味をもたないジョウは、服に焼けこがしがあるの
で、用心ぶかく壁をせにして立っていました。部屋の
むこうで、快活な五六人の男の子が、スケートの話を

していたので、ジヨウはそこへいってもいいかと、メグに合図をしましたが、メグの眉がおどろくほどあがったので、動くことができませんでした。しかたなしに、ジヨウは、ただ一人とりのこされ、ダンスがはじまるまで、人々をながめているばかりでした。

ダンスがはじまると、メグはすぐに相手ができて、にこにこして踊りましたが、きゆうくつな靴の痛さががまんしていることは、だれにも気がつかれませんでした。ジヨウは、髪の毛の赤い青年がやってくるのを見て、ダンスを申込まれては大へんだと思い、いそいでカーテンのかけに入ると、そこには、はにかみ屋さ

んの「ローレンスのぼっちゃん」がいました。ジヨウは、さっそく、クリスマスプレゼントのお礼をいいますと、

「あれは、おじいさんのプレゼントです。」

「でも、おじいさんにおっしゃったのは、あなたでしやう?」

ぼっちゃんは笑っていました。それから、いろいろ話しているうちに、ジヨウは、このぼっちゃんが、ローリイという名で、長いあいだ、外国にいたことを知りました。

「まあ、外国へ、あたしは旅行の話を聞くのは大好

き！」

ローリイは、どう話したらいいかわからないようでしたが、ジョウが熱心にいろいろ質問したのでエヴェの学校のことや、この前の冬、パリイにいた話をしました。ジョウは、めずらしい外国の話にたまらなくなつて、

「ああ、いつてみたい！」と、いいました。

それから、話はフランス語のことになり、ジョウが、じぶんは読めてもしやべれないだけれど、ちよつと話してみてもほしいといいますと、ローリイは、フランス語でいいました。

「あのかわいいスリッパはいた人はだれですか？」

ジョウは、わかつたので、すぐに答えました。

「あれは姉のマーガレットです。あなたは、わたしのねえさんをかわいいと思いますか？」

「ええ、おねえさんは、なんとなくドイツの少女を思わせます。いきいきして、それでしとやかで、りっぱな淑女みたいに踊りますね。」

ジョウは、姉をほめられてうれしく、ぜひメグに話してやろうと思いました。ローリイは、もうすっかりはにかみもせず、心を開いて話し、ジョウも、今は服のことなど忘れて、快活ないつものジョウになり、ロー

リイが好きになりました。それで、ローリイのことを、姉妹に話してやるために、顔かたちや身体つきなどをよく憶えておこうと思っていくども見なおしました。けれど、年はいくつでしょう？ ジョウは、おいくつというそうにしましたが、やつとこらえて、遠まわしに尋ねることにしました。

「もうじき大学へいらっしやるんでしょう？」

「まだ二三年はだめです。十七にならなくてはいけません。」

「では、まだ十五ですか？」

「来月、十六です。」

「あたしは大学へいきたいけれど、あなたはいきたそうではありませんのね。」

「ぼくはいやです。ぼくはイタリイに住んでじぶんの好きなように暮したい。」

ジョウは、ローリイのいう、その好きなように暮したいということを、くわしく聞きたいと思いましたが、眉をひそめてふきげんに見えたので、気をかえさせようと思って、足拍子をとりながら、

「ああ、いいポルカね。あなたなぜひってダンスなさらないの？」と、尋ねました。

「あなたもいけば。」

「あたしはだめ。あたし姉さんに踊らないといったの、なぜって、いうと……」

ジョウが、いおうか、笑ってすまそうかとしていると、ローリイは、しきりにわけを尋ねます。だれにもいわないならばと念をおして、

「服にやけこがしがあるんです。あたしわるいくせがあつて、よくやけこがしするの。」

ローリイは笑いませんでした。

「そんなこと平気ですよ。それじゃ、あっちの細長い広間で踊りましょう。だれにも見られないから。」

ジョウは感謝して、よろこんでついていき、だれも

いない、その広間で、ポルカを踊りました。ローリーイは、ダンスがじょうずで、ドイツ流を教えてくれたが、まわったりはねたりすることが多いのでおもしろく踊れました。音楽がやむと、二人は階段にやすんで話しましたが、つぎの部屋でメグが手まねきしたので、ジョウがしぶしぶいってみると、メグは足をかかえ、青い顔をしてソファにすわっていました。

「高いかかどがひっくりかえって、くるぶしをひどくいためたの。痛くて立てそうもないわ。どうやって家へ帰ろうかしら？」

ジョウは姉のくるぶしをそつとなでてやりながら、

「あんまりかかどが高いから、けがすると思ったわ。お気のどくね。だけど、どうしたらいいでしょう。馬車を頼むか、ここに夜通しいるか。」と、こまった顔をしました。

「馬車を頼めば高いし、頼みにいってもらう人もないし、ここへはとめてもらえないし、あたしハンナが来たら、なんとか考えるわ。あら、みんな夜食にいくわ。あなたもいって、あたしにコーヒーもらって来てよ。あたし疲れて動けないわ。」

ジョウは、いそいでいきましたが、あちこち部屋をまちがえて、やっと食堂にはいり、コーヒー茶わんに

手をかけたとたん、こぼして服の前をよごしてしまいました。それを、あわてて手袋でこすったので、手袋もよごしてしまいました。

「お手伝いしましょう。」

親しみのある声がしました。それは片手にコーヒー茶わん、片手にアイスクリームの皿をもったローリイでした。

「あたしねえさんのところへ、コーヒーをもつていこうとしましたら、また、やりそこないましたの。」

「ちようどいい。わたし「#「わたし」は底本では「たわし」がもって行ってあげましょう。」

ジョウがさきにいきました。ローリイは、なれたものごしで、コーヒーとアイスクリームを、メグにすすめ、ジョウのために、もう一度とりにいつてくれました。三人が、しばらく話しているうちにハンナが来ました。メグはびつこをひきひき帰り支度をしに二階へいきました。そのあいだに、ジョウは玄関へいつて、下男らしい人に、馬車をやとうことを頼みましたが、その人はその日だけやとわれた下男で、近所のこととは知りませんでした。すると、ローリイが聞きつけて来ていいました。

「どうか送らせて下さい。道はおなじですし、それに

雨もふっています。」

ローリイは、じぶんを迎えに来たおじいさんの馬車に、メグとジヨウとハンナをのせました。みんなは、ぜいだくな箱馬車にのって、たのしい、ゆたかな気持ちにひたりながら帰りました。ローリイは馭者台にのつたので、メグは痛い足を前に出すことができ、姉妹は気がねなしに話をすることができました。

「あたし、とてもおもしろかったわ。」と、ジヨウは髪をかきあげながらいいました。

「あたしもよ、けがするまでは、サーリイさんのお友だちの、マフオットさんという方と仲よしになったの

よ。サーリイさんと一週間とまりがけで来るようにと
いって下すったわ。サーリイさんは、春になってオペ
ラがはじまるといらっしやるんですって。あたしおか
あさんがいかして下さるといいけど。」

メグは元気づきながらいきました。

「おねえさんは、あたしがにげ出したあの赤い髪の人
と踊ったのね、あの人、いい人だった？」

「ええ、髪はとび色よ。ていねいな方で、あたし気持
よく踊ったわ。」

「あの人、足を出すとき、ひきつった、きりぎりすみ
たいだったわ。ローリイさんとあたし笑ってしまった

わ。あたしたちの笑うの聞えなかつた？」

「いいえ、それやぶしつけだわ。あなたたち、そこにかくれて、なにしてたの？」

ジョウは、そこでじぶんたちのやったことを話しました。その話がおわったとき、馬車は家へつきました。姉妹は、あつくお礼をのべて馬車をおり、そつと家へはいりましたが、扉の音で二つの小さな頭がうごき、ねむそうな、けれど熱心な「#「熱心な」は底本では「熱心が」声がありました。

「ねえ、会の話をしてよ？」

ジョウは、メグのいう、ひどいお作法をやって、妹

たちにボンボンをもつてきてやりました。妹たちはそれをもらい、その夜の胸のわくわくするような話を聞いて、まもなく寝入ってしまいました。メグは、ジョウは、薬をぬってほうたいをしてもらいながら、

「馬車で夜会から帰り、ねま着のまますわって、女中に世話してもらって、りっぱな貴婦人みたいだわ。」と、いいました。

「あたしたちは、髪の毛をやいたり、服が古かったり、手袋が片方だけだったり、きつい靴をはいてくるぶしをくじいたり、とんまのまぬけだけどね「#「だけどね」は底本では「だけねど」、たのしかったわねえ。」と、ジョ

ウがいました。がほんとにそのとおりだったのです。

第四 重い荷をかついで

「やれやれ、またお荷物かっいで仕事を始めるの、
なんてつらいんでしょう。」

会のある朝、メグはため息をつきました。一週間
たのしく遊んだあとで、いやな仕事はやすやすはじめ
られませんでした。

「いつまでも、クリスマスかお正月だといい。そうしたらおもしろいでしょうね。」と、ジョウは、あくびまじりに答えました。

「そしたら、今よりか半分もおもしろかないわ。けど、お夜食や花束をいただいたり、会へいたり、馬車で帰ったり、読書したり、休養したりして、こつこつはたらかない」「#「はたらかない」は底本では「はたかない」ですむような人、うらやましいわ。」と、メグがいました。

「でも、そんなことできないわ。だから、ぐちをこぼさないで、おかあさんみたいに、ほがらかに「#「みた

いに、ほがらかに」は底本では「みたいにほ、がらかに」歩
いていきましよう。」

けれど、メグの心は晴れません。髪をきれいにする
元氣すらありません。

「ああ、いやだ。せつせとはたらいで、年をとって、
きたない気むずかし屋になるんだわ。貧乏でおもしろ
く暮せないばかりに。」

こういつてメグは、ふくれた顔をして階下へいき朝
の食事のときもふきげんでした。みんなも気分がひき
たちませんでした。ベスは頭痛がするので、ソファの
上に横になり、親ねこと三びきの子ねこを相手に気を

まぎらそうとしました。エミイは勉強がはかどらないのに「#「はかどらないのに」は底本では「はがどらないのに」、ゴム靴が見つからないのでぷりぷりしました。ジヨウは口笛をふいて、さわぎをひきおこしかねないようすでした。おかあさんは、いそぎの手紙を書くのにいそがしく、ハンナも前の晩おそかったので、ふきげんでした。

「こないじわるの家ってありやしない！」

ジヨウは、インキのつぼをひっくり返し、靴のひもを二本とも切ったので、とうとうかんしゃくを起して、じぶんの帽子の上にどきりとすわり、大声でそうさけ

びました。

「なかで、あなたが一ばんいじわるよ。」と、エミイがやり返し、石盤の上にこぼした涙で、まちがいだらけの計算を消してしまいました。「#」は底本では「二」。「ベス、こんなうるさいねこ。あなぐらにほうりこんでおかないと。水でおぼれさせれしまわよ。」と、メグは、じぶんのせなかにかじりついたねこを、はなそうとしながらいきました。

ジョウは笑う。メグはしかる。ベスはあやまる。エミイは、十二の九倍がいくつになるか、わからなくて泣きました。

「さあ、しずかにしておくれ、今朝早く出さなければならぬのに、がやがやうるさくして、書けやしません。」と、おかあさんは手紙の書きそこないを消しながらいいました。

それで、ちよつと静まりました。ハンナが来て、熱いパイを二つおいて、出ていきました。姉妹たちのいく道は遠く寒く、三時前までに帰れないので、これはおべんとうでもあり、また、手をあたためることもできました。それでこのパイのこと「マフ」ともよんでいました。

「では、かあさんいつてまいります。今朝はあたした

ちだだっ子でした。でも、天使になって帰って来ます。」

ジヨウは、そういつて、メグといっしよに出かけました。町角でふりかえると、いつも窓でにっこり笑うおかあさんの顔があり、それが励ましになるのです。二人は今朝もふりかえり、おかあさんの笑顔を見ると、元気になろうとつとめ、しばらく歩いてから、べつべつの道をいきました。メグは保姆の仕事、ジヨウはマーチおばさんのところへはたらきにいくのでした。おとうさんが、不幸な友人を救おうとして財産を失くしたとき、二人はすこしでも家のためになりたくて

はたらき、それからずっとはたらいっているのです。メ
グの給料はわずかで、しかもまい日キング家で、年上
の姉妹たちが、ぜいたくをしているのを見るので、だ
れよりも貧乏をつらがっていました。ジヨウはびっこ
のマーチおばさんの世話をしますが、気みじかのおば
さんと、よく気が合いました。それに、死んだおじさ
んの文庫がすばらしく、おばさんが昼寝をしたり、来
客でいそがしいときさつそく文庫にはいりこんで、詩、
歴史、旅行記だのに読みふけりました。それはいいと
しても、思うさまかけまわったり、馬にのったりでき
ないのは、なやみの種でした。

ベスは、はにかみ屋で、学校へもいけないほどでした。それでおとうさんが勉強を見ていましたが出征しなすつてからはおかあさん、かあさんが軍人後援会へいくようになってからは、ひとりで勉強します。性質は勤勉で家事が好きで、ハンナを助けて家をきれいにしますが、まだ子供で、人形と遊ぶことが、なによりこのたのしみでした。けれど、このベスにも、苦になることがあります。それは、音楽好きなのに、よいピアノもないし、音譜もないことで、音楽の勉強が思うようにできないので、涙をながすことがときどきありました。

エミイのつらいことには、鼻が美しくないことで、エミイにいわせると、あかんぼのとき、ジョウが手をすべらして炭取のなかへ落したためだそうです。エミイは絵がじょうずで、花を写生したり、空想的な絵もかきます。それに十あまりの曲もひくし、フランス語も読めるし、性質は素直でおとなしいので、みんなからかわいがられました。

さて、晩に、みんながいつしよにお裁縫をはじめたとき、メグがいました。

「今日はほんとにくさくさした日だったわ。なにかおもしろい話でもない？」

すると、ジョウがすぐにいいました。

「あたし、今日はへんなことあったのよ。マーチおばさんがいねむりはじめたので、おばさんが読め読めという、つまらない、ベルシャムを読みかかったら、こつちもねむくなり、大きなあくびをしたの。そうしたら、おばさんは、罪ということについて、ながながとお説教をやりだし、お説教がすむと、よく考えなさいといって、またいねむりよ。そこでわたしは、「村牧師」を出して読みだしたのよ。そしたら、水のなかへころげこむところで、つい大声をあげて笑ったの。すると、おばさんが目をさまして、それを読んで聞かせ

なさいとおつしやるの。私は読んであげた。おもしろかったのね。だから、お昼すぎに、あたしが手袋をとりに行ったら。おばさんは、じぶんで「村牧師」を熱心に読んでるのよ。ね。やっぱりベルシヤムなんかよりおもしろいのよ。おばさんみたいな金持だって貧乏人とおなじような心配があるんだわ。だから、「村牧師」にひきつけられるのかわ。」

すると、メグがいました。

「それで、あたしも話すこと思いついたわ。今日キングさんのところへいったら、なんだかへんなの。「#」は底本では欠落」それで、あたし一人の子に尋ねた

ら、一ばん上の兄さんがなにか大へんなことをして、おとうさんから家をおいだされたんですって。泣き声、どなり声がして大へんだったわ。家のはじになるような、らんぼうな男の兄弟がいなくてよかったわねえ。」すると、エミイがいました。

「今日、スージーさんは、先生の漫画を書いたので、三十分も教壇にたたされたの。あたしスージーさんが、きれいな、めのうの指輪をはめて学校へ来たので、うらやましく思っていたけれど、あんなはずかしい目にあうようじゃ、いい指輪はめたってしあわせじゃないわ。」

つぎに、ベスが話しました。

「今朝あたしハンナにかわって、魚屋へかきを買いにいったの。すると、貧乏そうな女の人に来て、仕事がなく子供に食べさせるものがないから、みがきものでもさせて、お魚をすこし下さいと頼んだの。すると、魚屋さんいそがしいもので、つつけんどんに、だめよといったの。すると、そのときローレンスさんがしおれて帰っていく女に、大きな魚をステツキでひっかけたあげたの。女は、びつくりして、よろこんで、なんどもお礼をいって、ローレンスさんに天国へいけるようについて祈ったの。」

みんなはベスの話を笑いしましたが、もちろん心をうたれました。そして、おかあさんにお話をねだりました。

「そうね、おかあさんは、会で青いネルを裁っていたら、おとうさんのことが、みように心配になつて、もしものことがあつたら、どんなに頼りなく、さびしいだろうと思つていました。すると、なにか註文をもつておじいさんが、心配そうな、疲れたようすでやって来ました。身の上を尋ねてみたら四人息子が戦争に出ている、二人は戦死をし、一人はとりこになり、一人はワシントン病院にいるんですつて。そして、これが

らそこへいくんですって。けれど、すこしもぐちをこぼさないで、よろこんでお国のために、子供たちを出したというのです。おかあさんは、たった一人おとうさんを出してつらがつています。はずかしくなりまして。そればかりか、おじいさんは、たった一人ぼっちですがおかあさんには四人も娘がいて、なぐさめてくれます。ほんとに、おかあさんは、じぶんの恵みふかい幸福がありがたかったので、おじいさんに、つつみとお金をあげ、教えていただいた教訓に、心からのお礼をいいました。」

みんなは、この話にも心をうたれました。ジヨウは、

もう一つ、今のようない話をと望みました。おかあさんは、につこり笑つて、すぐに話しはじめました。

「むかし、食べたりに着たり、なに不足のない四人の娘がありました。たのしみも、よろこびもありあまり、親切なお友達や両親があつて、愛されていたのに、娘たちは満足しませんでした。（ここで聞き手たちは、こつそり見かわして、お裁縫に精を出しました）娘たちはよくなるうと決心するのですが、やりとげることができないで、これがあつたらとか、あれができたらかと、考えました。それで、あるおばあさんに、幸福にしてくれるまじないがあれば教えて下さいとい

ましたら、あなたがたが満足に思うとき、恵みということを考えて感謝なさいといいました。（ここでジョウは、なにかいいたそうでしたが、話がおわらないのでいうのをやめました）それで、りこうな娘たちが、その言葉を試してみますと、じぶんたちがいかによい暮らしをしているかわかってびっくりしました。一人は、お金持でも家のはじと悲しみは救えないということがわかりました。一人は、貧乏でも、若くて元気なら、じぶんのたのしみもたのしめない、気むずかしいおばあさんより、ずっと幸福ということがわかりました。一人は食事の仕事はいやだけど、食物をもらって歩く

のは、つらいということがわかりました。一人は、め
のうの指輪よりもお行儀のいいほうがいいということ
がわかりました。それで、四人の娘たちは、ぐちをや
め、さずかった恵みを感謝し、もつとよくなろうと考
えました。」

「おかあさんは、あたしたちのお話をとって、あたし
たちをお説教なさるの、ずるいわ。」と、メグがいいま
すと、ベスがいいました。

「あたし、そういうお説教すきだわ。おとうさんがよ
く話して下さいわ。」

エミイは、つぶやくように、

「あたし、そう不平いわないけど、もっとつつしむわ。スージーさんのやりそこないで、あたしほんとに教えられたんですもの。」

すると、ジヨウが、ふざけて、

「おかあさんの教えは、よかったわ。もしか忘れたら、チヨール人のおじいさんみたいに、子供らよ慈悲ちゆうもんを、ようくかんげえねせえと、おかあさん、おつしやって下さい。」と、いいました。これでおもおもしろい空気が、あかるくなりました。

第五 おとなりどうし

「まあ、ジヨウ、なにをなさるの？」

ある雪のふる午後、妹のジヨウがごむ靴をはき、古ばけた上衣に、ずきんといういでたちで、ほうきとシャベルをもって広間へ出て来たのを見て、そうたずねました。

「運動に行くの。」

「今朝、二度も散歩して来たんだもの、たくさんだわ。家において火にあたりなさいよ。」

「いやなこった。ねこじやあるまいし、火のそばでいねむりなんかするの大きい。あたし冒険がすき、これからなにかさがしに行くの。」

メグは炉に足を出して本を読み、ジヨウは通路の雪をどけはじめました。ところで、マーチの邸はローレンスの邸と、生垣でへだてられていました。いずれも、森や芝生の多い、いなかめいた気分のなかにつつまれていました。ローレンスの邸では、大きな馬車をいれる納屋や、温室や、りっぱな石づくりの家があるのに、マーチの邸には、赤茶けたふるびた家が見すばらしくあるだけでした。

けれど、ローレンスのりっぱな家はなんとなくさびしく、ここにおじいさんと、ただ二人で住むぼっちゃんに友だちもありませんでした。ジヨウは考えました。「#」は底本では欠落」かわいそうに、少年の心のわからないおじいさんから、お部屋にとじこめられているんだわ。ローリイには、にぎやかな、わかかわかしい遊び相手がいるんだわ。」

ジヨウはなんとかして、ぼっちゃんを誘い出そうと、冒険をもくろんでいると、ローレンス老人が馬車で出かけました。すてき、すてき、ぼっちゃん一人ならと、生垣のところまで道をつけていくと下の窓にはカーテ

ンがおりていて、召使の姿も見えませんが、上の窓には、やせた手と、ちぢれた髪の黒い頭が見えました。

「かわいそうに、病気でねているんだわ。こんなさびしい日に。」

ジョウは、一かたまりの雪を窓を目がけてなげました。黒い頭がすぐにふりむき、大きな目がいきいきとかがやきました。

「いかが、御病気なの？」

ローリイは、窓を開けてしやがれ声で答えました。

「ありがとう。いくらかいんです。ひどいかぜをひいて、一週間ねちやいました。」

「まあ、お気のどく、なにして遊んでいらつしやるの？」

「なにもしてません。家はお墓みたい。」

「本は読まないの？」

「あんまり読みません。読ませてくれないんですもの。」

「だれにも読んでいただけないの？」

「おじいさんに、ときどき。でもぼくの本はおじいさんにおもしろくないし、ブルツク先生に頼むのは、いっただっていやだし。」

「じゃ、お見舞に来る人もいないの？」

「いないんです。男の子はがやがやさわぐし、ぼくは頭がよわってるんです。」

「女の子はいないの、本を読んだりなぐさめてくれる女の子は？　女の子は静かだし、看護婦ごっこすきよ。」

「そんな女の子知りませんもの。」

「あんだ、あたしを知ってる？」

ジョウが笑うと、ローリーがさげびました。

「知ってる！　あんだ来てくれる？」

「ええ、あたしは、おとなしくも、やさしくもないけど、おかあさんがいいとおっしゃったらいくわ。」

ジヨウは、ほうきをかついで家へ帰りました。そのあいだに、ローリイはお客を迎えるために、髪にブラシをかけ、あたらしいカラをつけ、五六人の召使たちに部屋をかたづけさせました。やがて、ジヨウが玄関にたちベルをおしました。ローリイは、こころよくジヨウを迎えました。

ジヨウは、親切のあふれた顔をして、片手にはおおいをした皿をもち、片手にはベスの三匹の子ねをだいてあらわれました。

「おじやまにあがりました。荷物までしよって、おかあさんがよろしくって。メグはお手製の白ジェリイを

お見舞ですつて。おいしいんですよ。それから、ベスはねこをおなぐさみにつれていくようになって。お笑いになるでしょうが、ことわりきれなくて。」

ローリイは、ねこを見て笑い、はにかみを忘れ、すぐにうちとけました。ジョウが、皿のおおいをとると、緑の葉のわと、エミイの秘蔵のジエラニユームの赤い花をそえた白ジェリイがあらわれました。

「ああ、きれいだ、食べるのがおいしい。」

「たいしたものではないの。ただ、みんながお目にかけたかっただけ。でも、あっさりしてるからめしあがれてよ。それにやわらかいから、のどが痛くても、す

るっとはいつてしまうわ。それはそうとこの部屋なんて気がいいんでしょう。」

「女中が女中なので、片づいていなくて。」

「じゃ、あたし二分間で片づけてあげるわ。」

ジョウは、てきぱきとはたらきました。部屋の感じが一変したので、ローリイは満足してお礼をいいました。

「さあ、今度はぼくがお客さまをよろこばせなくちゃ。」

「いいえ、あたしはあなたをなぐさめに来たのよ。なにか本を読んであげましょうか?」

「ありがとう、でもそこにある本、みんな読んでしまっ
たんです。だから、あなたさえよかったら、お話のほ
うがいいんだけど。」

「いいですとも、一日だって話すわ。ベスはあたしが
おしゃべりをはじめたら、いつやめるかわからないな
んていうのよ。」

「ベスさんというのは、ときどき小さなバスケットを
もって出ていく、あかい顔の。」

「ええ、いい子ですわ。」

「すると、あの美しいかたがメグさんで、まき毛のか
たがエミさんですね？」

「どうしてごぞんじ、そんなによく。」

ローリイは、さつと顔をあかめました。

「だって、ここにいます。たのしそなみなさんがよく見えるんですもの、夜、カーテンを閉め忘れた窓越しに、おかあさんをかこんで、いらつしやるところも見えます。おかあさんのお顔は、やさしく花のようですよ。ああ、だけど、ぼくには母はいない。」

母の愛にうえた少年の目は、ジヨウのあたたかい胸をうごかしました。すなおなジヨウは、じぶんが、いかにゆたかな家庭の愛に恵まれているかを感じたので、よろこんでそれを病気のさびしいかれに、分けあたえ

たいと思いました。

「では、カーテンをおろさずにお好きなだけ見せてあげます。いいえ、それより家へいらっしやい。おかあさんはいい人よ、ごちそうたくさんして下さるわ。ベスは歌をうたい。エミイはダンスをする。メグとあたしはおかしなお芝居の道具を見せて笑わしてあげるわ。そうして、みんなでおもしろく遊ぶのよ。でも、おじいさん来させて下さる？」

「あなたのおかあさんが頼んで下さればね。おじいさんは親切で、ぼくのすきなことをさせてくれます。」

ローリイは、マーチ家の人たちのことについてたく

さんの興味をもち、ジヨウの口から姉妹たちのことを聞いてうれしそうでした。ことに、ジヨウが、せっかちの、気むずかしいおばさんの世話をしにいく話をおもしろがって、そのおばさんのところへ気どった老紳士が結婚申込に来たとき、むく犬がその紳士のかつらをひっぱって、はげ頭がむき出しになった話では、ころげまわって、涙が出るほど笑ったので、女中がおどろいて、のぞきに来たくらいでした。

ジヨウは、話が成功したのでとくいになって、家のお芝居のこと、いろんな計画のこと、おとうさんのこと、その希望や心配、家のなかの一ばんおもしろいこ

となど、のこらず話しました。それから本の話になりましたが、ジヨウはローリーがやはり本ずきで、じぶんよりもたくさん読んでいるのをうれしく思いました。

「そんなに本がすきなら「#「すきなら」は底本では「すきなち」、おじいさんの文庫へいきましよう。」

文庫は、ジヨウをよろこばせました。ずらりとならんだ本のほかに、絵や彫刻や古い品物のはいったたんすがあり、ゆったりしたイスがそなえてありました。ジヨウは、そのビロウド張りのイスに腰をかけて、

「まあ、りっぱだ！ あなたは、一ばんこの世でしあわせなぼっちゃんですよ！」と、いいましたがそのと

キベルが鳴りました。あ、おじいさんだと、はっと、
しましたが、まもなく女中が来て、お医者さんが来た
といい、ローリイは診察してもらいに出ていきました。
ジヨウは、ほっとして、文庫のなかを見物しましたが、
老紳士のりっぱな肖像画の前に足をとめてながめまし
た。そのとき、扉が開いたけれど、ジヨウはふり返っ
てもみずに、

「この人、親切そうな目をしていらっしやるから、あ
たしもうこわくないわ。でも口もとはきつそうだし、
とても意地っぱりみたいね。うちのおじいさんほど、
きれいではないけど、あたし好きだわ。」

すると、うしろで声がしました。

「どうも、ありがとう。」

ふりかえると、ローレンス老人が立っていたので、ジヨウはちぢみあがりました。顔はあかくなり動悸がうちます。逃げ出すのに卑怯だし、ふみとどまることにしたものの、ほんものの老人の目は、肖像画の目よりも、もつとやさしかったので、そんなにこわくなくなりました。

「そうすると、あなたは、わたしがこわくないのかね？」

「そんなに。」

「あなたのおじいさんほど、きれいではないというのだね？」

「ええ、きれいではありませんわ。」

「わしは、意地っぱりかね？」

「そう思います。」

「それなのに、わしが好きだって？」

「ええ、好きです。」

この答えが老人をよろこばせました。老人はジョウの手をにぎり、その顔をのぞきこんで、

「顔はにいていなくても、あなたは、りっぱなおじいさんの性質をうけついでいる。おじいさんは勇気があり

正直だった。わたしは、あのかたと、友だちであったことを誇りに思っていますわい。」

「ありがとうございます。」

ジヨウは、気がらくになりました。

「あなたは、家の子と、なにをしていなさったのかね？
ええ？」

「近所づきあいをしようとしただけです。」

「あなたは、あの子を元気づける必要があるとお考えかね？」

「ええ、すこしさびしそうですもの。わかにお友だちがあるといいでしょう。わたしたち、女ですけど、お

役にたちたいと思います。あなたのとどけて下さった
りっぱなクリスマススのプレゼントを、とてもありがた
く思っていますのよ。」

「いや、あれはあの子の考えたことじゃ。ところで、
あの気のどくな婦人はどうしたな？」

「らくに暮していますわ。」

「そうか、おかあさんのやり口は、いつも貧乏な人た
ちを恵んだおじいさんのやり口とおなじだ。いつか天
気のいい日に、おかあさんをお訪ねしたいといってお
いて下され。ほら、お茶のベルだ。さあいつしよにお
茶をのんで、近所づきあいをしてもらおう。」

ローレンス老人は、礼儀正しくジヨウにうでをさし出し、二人はうでをくんで階段をおりていきました。すると、そこへローリイが帰つて来て、そのありさまを見てびっくりしました。まったく、これは考えることもできないことでした。

老人は、四はいのお茶をのむ間、あまりしやべりませんでした。老人は、ローリイがジヨウと快活にしやべつて、顔が今日にかぎつて、あかくいきいきしているのを見まもつていたからです。

「ふむ、この娘のいうとおり、孫はさびしいのだ。今日、孫はかわつた。よし、この家の娘たちが、孫をど

うするか見ていよう。」

老人も、ほんとは気さくで、こだわりのない人だったのです。だから、孫のことも理解することができました。お茶がすむと、ジヨウは帰るといい出しました。ローリイはひきとめて、ジヨウを温室へつれていき、りょう手にもてないほど、美しい花をたくさん切つて、

「これ、おかあさんにかけて下さい。そして、おとどけ下すつたお薬、とても気にいりましたとおっしゃつて下さい。」

客間へ帰ったとき、老人は炉の前に立っていました。

ジョウの目は、そこにあるグラント・ピアノにすいつけられました。

「あなた、ひくの？」

「ときどき」と、ローリイは、ひかえ目に答えました。

「今、ひいてちょうだい。帰ったらバスに話してやりたいから、聞いていきたいの。」

「あなた、さきにひかない？」

「あたしだめなの。音楽は好きだけれど。」

ローリイがひきました。ジョウは花たばに鼻をおしつけながら、耳をすましました。ローリイが、じょうずなのに、ちっとも気どらないので尊敬をよせました。

ひきおわってから、あまりほめたのでローリイはまっかな顔をしました。

「いや、ほめるのはもうたくさん。この子の音楽はま
ずくはないが、もつとほかのだいじなことに、身をい
れてもらいたいのじゃ。ああ、もうお帰りか。ありが
とう、またお出で、おかあさんによろしく。では、さ
よなら、お医者者のジョウさん。」

老人の握手はかたかったが、なにか気にいらないう
すでした。あとで、ローリイにたずねたら、ぼくが
ピアノをひいたからだといいました。なぜというと、
いつか話すといいました。ローリイは、

「また、来てね。」と、名残りおしそうでした。

「あなたが、よくなったら、家へ来るといふ約束をすれば。」

「ええ、いきます。」

ジョウが帰つて来て、のこらず報告すると、みんなもおしかけたくなりました。マーチ夫人は、おとうさんのことを忘れないでいる老人と話したかったし、メグは温室が歩きたかったし、バスはグランド・ピアノに心ひかれ、エミイはりっぱな絵や彫刻が見たかったのです。

「おかあさん。ローレンスさんは、なぜローリーさん

がピアノをひくのをきらうのでしよう?」と、せんさく癖をジヨウが出しました。

「よく知らないけど、ローリーさんのおとうさんが、イタリアの女の音楽家と結婚なさったのをきらうからでしょう。ローリーさんがまだ小さいとき、両親がなくなつたので、おじいさんがひきとつたわけですが、おかあさんのような音楽家になりたいなどという、望みを起されたら、こまるからでしょう。」

「まあ、小説みたいね。」と、メグ。すると、すぐに、ジヨウが

「まあ、いやだ。音楽家になりたければならせて、い

やな大学にいかせて、苦しめなくてもいいのに。」

ひとしきり、ローリイのことで話はずみしました。

話のすえに、メグがいました。

「夜会であつたけど、たしかにあなたの話のとおり、ローリイは、お作法を知ってるわ。おかあさんがあげた薬って、ちよつと、気のきいたいいまわしね。」

「白ジェリイのことでしょう？」

「まあ、なんておばかさんでしょう！ あなたのことを、おっしやつたのよ。」

「そうなの。」と、ジョウは、思いがけないというようすで目をまるくしました。

「あんたみたいな人ってあるかしら？ お世辞をいわれてわからないんですもの。」

「そんなばかなこといいっこなしよ。お世辞をいうなんて考えずに、かあさんのないぼっちちゃんをみんなで親切にしてあげましょう。ローリイ、遊びに来てもいいでしょう、おかあさん？」

「ええ、ええ、けっこうです。それから、メグさん、子供はできるだけ、いつでも子供でいるほうがいいのよ。」

「あたし、じぶんを子供だなんていわないねまだ十三にもなっていないんですもの。」と、エミイがつぶやき

ました。

「ベス、あなたはどうか？」

「あたし、あの巡礼ごっこのこと考えていたの。おとなしくなろうとして、失望の沼をとおり、試練の門をぬけて、けわしい山をのぼっていくことだの、あのりっぱなもののたくさんあるローレンスさんの家が、あたしたちの美しい宮殿になるかもしれないってことだの、考えていたの。」

「あたしたちは、まあライオンのところまで来ることができたんです。」と、ジョウは、ベスの言葉にいくらか賛成らしく答えました。

第六 美しい宮殿

大きな家は、とうとう美しい宮殿になりました。けれど、みんながそこへいくのに、かなりの時間がかかり、ことにバスがライオンのそばをとおりぬけるのに、かなり骨がおれました。そして、ローレンス老人は、一ばん大きなライオンでしたが、訪ねて来て、娘の一人一人に、おどけ言葉や親切な言葉をかけ、おかあさ

んとむかし話をしてからは、もうだれも老人をこわがりませんでした。もう一つのライオンは、こちらが貧乏で、むこうが金持ということで、それもそのうちに、ローリイが、貧乏でも、愛のこもった家から受けるなぐさめを、どんなにありがたがって「#」ありがたがって「」は底本では「なりがたがって」いるかがわかったので、じぶんたちがローレンスの家から受けるものを、べつに恐縮しないでもいいと思うようになりました。そして、そこに春の草のめばえのように、あたらしい友情がもえました。

ローリイは、今までおかあさんの味も、姉妹の味も

知らなかったので、マーチ家にみなぎるゆたかな、あたたかなものに心をひかれ、ひまさえあると、遊びに来ました。それを心配してブルック先生は老人へくわしく告げました。

「いや、かまわん。遊ばせておくさ」「#「おくさ」は底本では「おくき」。あとでとりかえせばいい。マーチ夫人の意見のとおり、あまり勉強させすぎたのがいけなかったのだ。マーチ夫人がよくやってくれる」

老人は、もうわかつていました。そして、みんなはどんなにおもしろく遊んだでしょう！ お芝居、「#「は底本では欠落」そり遊び、氷すべり、にぎやかな

夜会、たのしい談話。マーチ家からも三人の姉妹がおしかけ、メグは温室で花たばをつくり、ジョウは文庫で本をむさぼり読み、エミイは絵をうつしました。ただ、ベスだけは、グランド・ピアノ「#「グランド・ピアノ」は底本では「グランド・ピアノ」にあこがれながら、老人をこわがって、逃げて帰りました。老人は、そのことを知って、わざわざ訪ねて来ておかあさんにいいました。

「ローリーは、ピアノを怠けています。やりすぎたから、いいあんばいなのですが、ピアノは使わんといかん。どなたか「#「どなたか」は底本では「どなたか」来て

て使ってもらえんかな、いつはいつて来てもいいし、口をきかんでもいい。だまって来て、だまってひけばいいんだが。」

聞いていたバスは、もうたまらなくなつて、

「あたしバスです。音楽が好きです。おじやまでなければ、まいりたいのですが」

「どうぞ。どうぞ。半日だれもないんだから、えんりよなく、ピアノを使ってもらえれば、こちらからお礼をいわねばならん。」

ああ、バスは顔をほてらし、ローレンスさんの手にぎり、お礼の言葉がいえないので、ただきつくにぎり

りしめました。老人は、そつとベスの髪に口をあてて、
「わしには、こういう娘があつた。ああ、かわいい子
じゃ、さよなら、おくさん。」

老人が大いそぎで帰つていくと、ベスはおかあさん
といつしよによるこび、そのうれしいニュースを仲よ
しの人形たちに告げに二階へかけあがっていきました。
その晩、ベスは今までにない、たのしさでうたいまし
た。あくる日、老人とローリイが出かけたのを見とど
けたベスは、こつそりと、客間へしのびこみ、ふるえ
るゆびでピアノをひきました。おお、その美しい音、
ベスはうつとりとなり、よろこびはてしなく、やすま

ずにひきつづけ、ハンナが食事のむかえに来るまで手をやめませんでした。その後、ベスはまい日のように生垣をくぐり、客間にしのびこんでひきました。ベスは、老人がそのしらべを聞くために、じぶんの部屋の扉を開けることも、新しい音譜をそなえておいてくれることも、ローリイが広間にいて女中たちの来るのをおっぱらってくれることも知りませんでした。ただ、ベスは、じぶんの望みのかなったことを感謝して、まことにたのしかったのであります。

二三週間たちました。ある日、ベスはおかあさんにいいました。

「おかあさん、あたしローレンスのおじいさんに、スリッパを一つ、つくつてあげたいの。あたしお礼をしたいんだけど、ほかにどうしていいかわからないんです。」

おかあさんは、にっこり笑って、

「ええ、ええ。つくつておあげなさい。きつとおよろこびになるでしょう。みんなも手伝つてくれるでしょうし、かかるお金は、おかあさんが出してあげますよ。」と、いいましたが、おかあさんは、ベスがめつたにおねだりをするのがないので、今、ベスの望みをかなえてやるのを、とくべつうれしく思いました。

ベスは、メグやジョウと相談して、型をえらび、材料をととのえて、スリツパをつくりはじめました。紫紺の布地に、しなやかな三色すみれの花をおいたのが、たいそうかわいいと、みんながいました。ベスは、手が器用でしたし、ほとんど朝から晩までかかりきりでしたから、まもなくできあがりました。それから、ベスはごくみじかい手紙を書き、ローリイに頼んで、ある朝、老人がまだ起きないうちに、こっそり書斎のテーブルの上に、スリツパといっしょに、のせておいてもらいました。

ベスは、心待ちに、待ちましたが、その日も、つぎ

の日の朝も、なんの返事ありません。きつと老人をおこらせたのだと、ベスは心配しはじめました。けれど、その日の午後、バスがちよつとお使いに出た帰りに、思いがけないことが起りました。バスが家のちかくまで来たとき、四つの頭が客間の窓から、見え、たくさん「#「たくさん」は底本では「たんさん」の手がふられ、いつせいにさけぶ声が耳をうったのです。

「ローレンスさんから御返事よ！」

ベスは胸をとどろかせながら、いそいで帰って来ました。すると、姉妹たちは扉口のところに待っていて、バスをつかまえ、わいわいいいながらかついで、客間

へつれていきました。

「ほれ、あれよ！」と、みんなが、ゆびさすほうを見たとき、ベスはうれいしいのと、おどろいたのとで、まつさおな顔色になりました。ああ、そこには、小さなキャピネット・ピアノがおいてあつて、ぴかぴかしたふたの上に「エリザベス・マーチさん」にあてた手紙がのつていました。

「あたしに？」と、ベスはジョウにつかまり、たおれそうな気がしながら、あえぐようにいいました。ジョウは、手紙をわたしながら、

「そう、あんたによ、いい方ね、世の中で一ばんいい

おじいさんね、かぎも手紙のなかにあるわ。」といいました。

「読んでちょうだい、わたし読めないわ。へんな気がして、ああ、とてもすてき！」と、ベスはそのおくりものに、すっかりどぎもをぬかれてしまって、ジヨウのエプロンに顔をかくしました。ジヨウは、手紙を開きましたが、最初の言葉を見て笑い出しました。そこには、

「マーチさん、親愛なるおくさん」と、書いてあったからです。

「まあいいこと！ あたしにも、だれかがそんなふう

に書いて手紙くれるといいわ。」と、エミイがいました。エミイは、こういうむかし風の書き出しは、たいそう上品のように思われました。

「小生これまでに、かず多くスリツパを使用いたし候が、あなたよりおくられしスリツパのごとく、小生に似合うものこれなく、三色すみれ、すなわち心を安める花は、小生の愛する花にて、やさしきおくり主を常に思い起させてくれるものと存じ候。よつて小生は小生の負債をはらいたく、なにとぞこの老紳士の小さき孫のものたりし、あるものを、あなたにおくることをお許し願ひ上げ候。心よりの感謝と祝福をこめて、あ

あなたよろこんでいる友だちでもあり、いやしき召使の、ジエームス・ローレンス。」

「ねえ、ベス、あなた、じまんしてもいいわ！　ローリーが話しただけど、おじいさん「#」おじいさん」は底本では「おじいささん」は、亡くなったお孫さんがすきで、そのお孫さんのものはちゃんとしまっておおきになるんですって。そのピアノを、あなたに下すつたのよ。大きな青い目をして、音楽が好きなためよ。」

ジョウは、そういつて、今までに見たことがないほど、たかぶって、ふるえているベスを、おちつけようと思いました。すると、メグも、

「ごらんなさい。このローソク立て、まんなかに金のばらのあるみどり色の絹のおおい、きれいな楽譜かけに、腰かけと、みんなそろつてるわ。」と、楽器を開けて、そのきれいなものを見せながらいいました。

そのとき、

「さあ、ひいてごらんなさいまし、かわいいピアノの音を聞かして下さい。」と、家族のよろこびにもかなしみにも、いつでも仲間入りする女中のハンナがいました。

そこで、バスがひきました。みんなは口をそろえて、こんないい音は聞いたことがないといいました。それ

は、あたらしく調律されて、調子がととのっていました。ああ、なんというすばらしい音色だったでしょう。

「おじいさんどこへ行って、お礼をいわなくちやいけないわ。」と、ジヨウが、じょうだんのつもりでいいました。むろん、はにかみ屋のベスが、ほんとにいくとは「#」とは「は底本では「とほ」思わなかったからですが、ベスは、

「ええ、いくわ、今すぐ」と、いって、庭におり、生垣をくぐり、ローレンス邸の扉を開けてはいつていきました。これには、みんなは、あきれてしまいました。が、ベスがそれからどうしたかを知れば、もつとおど

ろいたにちがいありません。というのは、ベスは書齋の扉をたたき、おはいりという声を聞くと、はいつていき、おどろくローレンスさんのそばへ立ち、手をさし出しながら、

「あたし、お礼を申しに来ました。」と、いいましたが、やさしい老人の目につきあたって、もうあとの言葉が出なくなり、いきなり、老人の首にだきついて、じぶんの唇をあてました。

老人は、たとい、屋根がふいにふきとばされても、もつとおどろきはしないでしよう。老人は、すっかりおどろきました、それがうれしく、そのかわいい唇

づけで、いつものふきげんは消えうせてしまいました。老人は、ベスをじぶんのひぎの上のにのせて、そのしわだらけのほおを、ベスのばら色のほおにすりよせ、まるでじぶんのかわいい孫娘が、生きかえって来たような気持になりました。ベスは、「#」「」は底本では「。」「」そのときから、もう老人をこわがらなくなりました。そして、まるで生れたときから、ずっと知っている人に話すように、やすらかな気持で話しました。なぜなら、愛はおそれをおいのけ、感謝は誇りをおしつぶすからです、ベスが家へ帰るとき、老人は門まで送り、あたたかい握手をしてくれました。そして、いかにも

りっぱな軍人らしく帽子に手をかけて、敬礼をし、堂々とひきかえしていきました。

姉妹たちは、そのありさまを見て、おどろくとともに、うれしくてたまりません。ジヨウは、じぶんの満足をあらわすために、おどりあがってダンスをはじめ、エミイはびっくりして、窓からころげおちそうになり、メグは手をあげて叫びました。

「まあ、この世の中は、とうとうおしまいが来たようね！」

第七 はずかしの谷

ある日、ローリイが馬にのって、家の前をむちをふつて通りすぎるのを見て、エミイがいました。

「ローリイさんが、あの馬につかうお金のうち、ほんのすこしでもほしいわ。」

メグが、なぜお金がいるのか尋ねますと、

「だって、わたしたくさんお金がいるの、借りがあ
るんですもの、お小遣は、あと一月もしないともらえな
いし。」

「借りがあるって？ なんのこと？」

メグは、まじめな顔になりました。

「塩漬のライム、すくなくつても、一ダースは借りがあるの。それに、おかあさんは、お店からつけでもつて来るのいけないとおっしゃるし。」

「すっかり話してごらんなさいよ。」

「今ライムがはやっているの？」

「ええ、みんなライム買うわ。メグさんだって、けちだと思われなくなかったら、きつと買うわ。そして、みんな教室で机のなかにかくしておいてしゃぶるの。お休み時間には、鉛筆だの、ガラス玉だの、「#」は

底本では「。」「紙人形やなにかと、とりかえっこするの。また、好きな子にはあげるし、きれいな人の前では見せびらかして食べるの。みんなかわりばんこにごちそうするの、あたしも、たびたびごちそうになったわ。それをまだお返ししてないの、どうしてもお返ししなければねえ、だってお返ししなければ顔がつぶれてしまうわ。」

「お返しするのに、どのくらいいるの？」

メグは、財布をとり出しながら尋ねました。

「二十五銭でたりますわ。あまったぶんで、おねえさんにも、ごちそうできますわ、ライム好き？」

「あまり好きじゃないわ。あたしのぶんもあげます。では、お金、できるだけ長く使うのよ、ねえさんだって、もうそんなにないんですから。」

「ありがとう。お小遣のあるの、いい気持ねえ、みんなにごちそうしてあげるわ、わたしこの週は、まだ一度もライム食べないわ。ほんとには食べたいけど、お返しできないのに、一つでもいただくの気がひけるわ。」

つぎの日、エミイはいつもよりすこし「#」「すこし」は底本では「すこ」おそく学校へ行きました。けれど、しめった、とび色の紙づつみを机のおくにしまう前に、みんなに見せびらかしてしまいました。すると、それ

から五分とたたぬうちに、エミイが二十四のおいしいライム（エミイはその一つを学校へ来る途中で食べました。）をもっていて、それを大ぶるまいするといううわさが、たちまち仲間につたわり、お友だちの、エミイへのおせじは、ものすごいものとなりました。ケティはつぎの宴会によぶといたしましたし、キングスレイは、つぎのお休み時間まで、時計を貸してあげるといいましたし、ライムをもっていないといつて、エミイをあざけたことのあるスノーという、いじわるの子もたちまち好意をよせて、エミイの得意でない算数を教えてやるといいました。けれど、エミイは、スノー

のいったわる口を忘れてはいけませんでした。それで、きゆうにそんな親切はむだよ、あなたにあげないという、電報を発して、スノーの希望をペしやんこにしてしまいました。

ところが、ちょうどその日、ある名士が学校へ参観に来ました。そして、エミイのかいた地図がおほめにあずかりました。その名誉にエミイは得意になり、スノーははげしい苦しみを味わいました。そこで、名士が教室から出ていくと、重要な質問でもするようなふうをして、デビス先生のそばへいき、エミイがライムを机のなかにかくしていることを告げました。

デビス先生は、きびしい先生で、チュウインガムのはやったときも、とうとうやめさせてしまいましたし、小説や新聞をもつて来ると、とりあげてしまいました。生徒が手紙をやりとりすることもよさせました。ですから、ライムがやりだすと、ライムをもつて来てはいけない、もしもつて来た者を見つけたらむちでうつと、おごそかにいわたしたのです。それは、つい一週間ほど前のことでした。

それに、この日、先生はたしかにきげんがわるかったのです。それで、スノーの告げたライムという言葉は、まるで火薬に火をもつていったようなものでした。

「みなさん、しずかに！ エミイ・マーチ、机のなかのライムをもってここへ来なさい！」

となりになっていた生徒が、ささやきました。

「みんなもっていくことないわ。」

そこで、エミイはす早く半ダースほどを、つつみからふり落して、先生のところへもっていきました。先生は、このライムのおいが大きらいでしたから、顔をしかめて、

「これで、みんなですか？」

「いいえ。」と、エミイは口ごもりました。

「のこりをもって来なさい。」

エミイは、じぶんの席へ帰り、いわれたとおりにしました。

「たしかに、もうのこっていませんか？」

「うそ、いいません。」

「よろしい、それでは、このきたならしいものを、二つずつもって行って、窓からすててしまいなさい。」

このはずかしめに、顔をあかくして、エミイは六度も窓へ往復しました。ライムがすてられると、窓の下の往来から子供たちのよろこびの声が起りました。みんなは、その声を聞いて、ライムをおしみ、無情な先生をにくみました。エミイが、すっかりライムをすて

てしまうと、えへんと、せきばらいをして、きびしい顔つきでいいました。

「みなさんは、一週間ほど前に「#「前に」は底本では「前た」」、わたしがいい聞かせたことをおぼえているはずです。ところがこうしたことが起つて、まことにざんねんです。わたしはじぶんのつくった規則をまもります。さ、マーチ、手を出しなさい。」

エミイは、びっくりして、りよう手をうしろへまわし、かなしそうな、許しを乞うような目をしました。エミイは、先生のお気にいっていた生徒の一人でしたし、その嘆願の目つきは言葉よりもつよく、先生の心

を動かしたようでしたが、だれかが「#「だれかが」は底本では「だれかがだ」、ちえっ！ 「#空白は底本では

欠落」と、舌うちする音がしたので、かんしゃくもちの先生は、エミイを許すことなんか、考えようともせず、「手を出して、さあ！」と、宣告「#「宣告」は底本では「宣告」をしてしまいました。

エミイは、自尊心のつよい子でしたから、泣いたりあやまつたりするようなことはなく、頭をもたげひるむことなく、その手がはげしく五六度うたれるままに、まかしていました。けれど、人からうたれるのは、これがはじめてで、そのはずかしめは、エミイにとって

は、先生からなぐりたおされたほどにも感じました。

「休み時間まで教壇の上に立っていなさい。」

デビス先生は、どこまでも、ばつを加えるつもりでした。

これもエミイにとって、たまらないはずかしめでした。けれど、それをやらなければなりません。エミイは、その場にたおれそうになる足をふみしめて、その不名誉の場所に立ち、まっさおな顔をして立ちつづけました。一時間ほどにも思われる十五分がすぎ、先生が、

「休め、もうよろしい、エミイ」と、いったときには、

もううたれた手の痛みを忘れ、うれしくてたまりませんでした。エミイは、だれにも口をきかず、ひかえ室へいき、じぶんのものをひつつかんで二度と来るものかと、怒りの言葉をもらして、立ち去りました。

エミイが、家へ帰ったとき、すっかりしよ氣ていました。やがて、ねえさんたちが帰ってきました。ねえさんたちは話を聞いてすっかりふんがいました。

メグは、エミイのはずかしめられた手を、リスリンと涙で洗ってやり、ジョウは、すぐにデビス先生をしりあげるといいました。ベスは、じぶんのかわいいねこも、こんなときのエミイにはなぐさめにならない

と、思いました。ハンナは、わる者めと、いつて、げんこをふりあげ、夜の食事のじやがいもが、わる者でもあるように、すりこ木でつぶしました。ただ、おcaaさんだけは、あまり口もきかず、心をいためていたようでしたが、エミイをやさしくなぐさめました。

エミイが逃げて帰ったことは、親しい友だちのほか、だれも気がつきませんでした。けれど、よく気をつく生徒たちは、デビス先生が、その日の午後からたいへんやさしくなり、それでいていつになくびくびくしているのに気がつきました。ちょうど授業のおわるころ、こわい顔をしたジョウが来て先生に母の手紙をわたし

ました。

「#空白は底本では欠落」それから、のこっていたエミイのもちものを一まとめにまとめると、それをもつて帰っていききました。

その晩、おかあさんがいいました。

「エミイ、退学させました。むちでぶつことには賛成できません。デビス先生の教育方針にも感心できないし、友だちもためにならないようです。けれど、ほかの学校へかわることは、おとうさんにうかがってからでないとできません。だから、まい日、これからベスといっしょに勉強するんです。ただ、あなたがライム

を机のなかにいれていたことは、同情できません。規則をやぶったのですから。」

「ね、おかあさんは、あたしがあんなふうに、人の前ではじをかかさされたのを、あたり前と思っついていらっしやるんですか？」

「あやまちを改めさせるのに、おかあさんならば、あんなやり方をしません。ただ、あなたは、このごろ、すこしうぬぼれ「#「うぬぼれ」は底本では「うぬぼれ」が強くなつていくようです。なおさなくてはいけません。あなたは、才能もありいい性質ももっているけど、それを見せびらかしてはだいなしです。へりくだると

いう気持、それがあなたをぐつと美しくするでしょう。」

そのとき、むこうで、ジョウと将棋をさしていたローリーが大声でいいました。

「そのとおり！ 音楽のすばらしい才能をもっていないが、じぶんでは気づかずにいる、あるおじょうさんを、ぼくは知っています、その人は、ひとりであるとき、どんなりっぱな音楽を作曲しているのか知らずにいるし、そのことを人からいわれても本気にしません。」

ローリーのそばに立っていたベスが、それを聞いて

いいました。

「そんなすてきな方とお友だちになりたいわ。きっと、あたしのためになる方よ、あたしなんて、とてもだめ。」

ローリイは、いたずらっ子らしく、

「あなたは知っていますよ。その人は、ほかのだれよりも、あなたのためになっていますよ。」と、いったので、ベスは顔をあからめ「#「あからめ」は底本では「あかめ」、はずかしがってクツションに顔をうめました。

ジョウは、ベスをほめてもらったお返しに、ローリイに勝をゆずりました。ベスはほめられてからは、いくらすすめられても、ピアノをひこうとしませんでし

た。ローリイは、いきげんで、たのしそうにうたいました。

ローリイが帰って「#「帰って」は底本では「帰てっ」
いってから、エミイは、

「ローリイは、なんでもできる方なの？」と、いうと、
おかあさんが、

「教育もあり、天分もあるから、かわいがられて、増
長しなければ、りっぱな方におなりでしょう。」と、答
えました。

「うぬぼれたりなさらないでしょう？」と、エミイが
尋ねました。

「ちつとも。だから人をひきつけるのよ。」

「たしかに、気どらないのは、りっぱなことだわ。」と、エミイはしみじみいきました。

「教養とか才能は、へりくだっていても、あらわれて来ます。見せびらかさなくてもいいわけです。」

ジョウが、そのとき、

「あなたの帽子や服やリボンを、みんな一度に身につけて、人に見せびらかさなくてもいいわけね。」と、いったので、おかあさんのお説教は、にぎやかな笑い声のなかにおしまいとなりました。

第八 ジョウの原稿

エミイが、土曜日の午後、ねえさんたちの部屋へいくと、メグとジョウが外出の支度をしていましたが、ないしよらしいので、

「おねえさんたち、どこへいらつしやるの?」と、尋ねました。すると、ジョウは

「どこへだつていいじゃないの、小さな「#」「小さな」は底本では「小さに」子はそう聞きたがらないものよ。」

と、つつけんどんにいいました。

「わかったわ！ ローリイといっしよに、七つの城のお芝居を見にいらっしやるのね。あたしもいくわ。おかあさんは、見てもいいとおっしやったわ。あたしお小遣もあるし。」

メグは、なだめすかすように、

「まあ、あたしのいうことをお聞きなさいよ」「#」お聞きなさいよ」は底本では「お聞きなさいよ」。おかあさんは、あなたの目がまだなおっていないから来週バスやハンナといっしよに、いくといいつて。」

エミイは、あわれっぽい顔をして、

「いやだあ、おねえやんやローリイといく、半分もおもしろく」# 「おもしろく」は底本では「おもしろく」
ないわ。ね、お願いだからいかせてよ。長いことかせ
ひいて家にばかりいたんですもの、ねえ、おとなしく
しますから。」と、せがむのでした。

「いっしょに」# 「いっしょに」は底本では「いっしに」
つれていつてはどう？ あつ着させていけば、おかあ
さんだつて、なにもおつしやらないでしょう。」と、と
うとうメグが、しかたがないというようにいいました。
「それなら、あたしいかないわ。二人だけ招待された
のに、つれていくのは失礼だわ。」

このジョウのいいかたや態度は、ますますエミイを怒らせました。靴をはきながら、エミイは、

「メグねえさんがいいっておっしゃったから「#」から」は底本では「かち」、あたしいきます。じぶんで切符買うから、ローリイにめいわくかけません。」

「あたしたちのは指定席よ。と、いって、あなた一人はなれていられないしさ、そうすると、ローリイがじぶんの席をゆずるでしょう「#」でしょう」は底本では「ででしょう」。それじゃ、つまらない。もしかしたら、ローリイが切符もう一枚買うかもしれないけど、それじゃずうずうしいわ。だから、おとなしく待ってい

らっしやい。」

ジョウは、仕度にあわてて、針で指をさしたので、ますますふきげんになって、エミイをしかりつけました。

エミイは泣き出しました。メグがなだめていると、階下でローリイがよんだので、二人は、いそいでおりていきました。二人が出かけていくのを、エミイは窓から見おろして、おどかすようにさげびました。

「今に、後悔するわよ。ジョウさん、おぼえていらっしやい！」

「ばかなー」と、ジョウがやり返して、玄関の扉をび

しやっと閉めました。

「七つの城」のお芝居は、とてもよかったので、三人はたのしく見物しました。けれど、ジョウはときどき、きれいな王子や王女に見とれながらも、「#」「」は底本では「。」「心にくらい影がさしました。妹が、後悔するわよといった言葉が、あやしく、耳にのこっていたからでした。

ジョウとエミイは、前からよくはげしいけんかをしました。二人とも気がみじかく、かっとするどひどくめんどろなことになるのでした。けれど、二人とも長く怒ることはなく、けんかの後では、たがいによくな

ろうとするのですが、日がたつと、またくり返すことになるのでした。

二人が家へ帰つたとき、エミイは知らん顔をして本を読んでいました。ジョウは、帽子を二階へしまいにいきしましたが、この前けんかをしたとき、エミイがひき出しをひっくり返したので、たんすやかばんや、たなの上などをしらべましたが、なんともなっていないので、エミイがじぶんを許してくれたものと思いません。

けれど、それはジョウの思いちがいであることが、あくる日になってわかりました。その日の午後、ジョウ

「#「ジヨウ」は底本では「メグ」は血相をかえて、メグとベスとエミイが話しあっているところへ、とびこんで来て、息をきらして尋ねました。

「だれか、あたしの原稿とった？」

メグとベスは、いいえといいましたが、エミイは炉の火をつついてだまっていました。

「エミイ、あなたですね。」

「あたし、持ってないわ。」

「じゃ、どこにある？」

「知らないわ。」

「うそつき！ 知らないとはいわさないわ。さあ、早

「白状なさい。白状しないか。」

ジョウは、ものすごい顔でどなりました。

「いくらでも怒るがいいわ。あんなつまらない原稿なんか、もう出ないわよ。」

エミイは、どうにでもなれというような、いいかたでした。

「どうして！」

「あたしが焼いちやったから。」

「なに？ あんなに苦労して、おとうさんがお帰りになるまでに書きあげるつもりなの、あの大切な原稿を、ほんとに焼いたの？」

ジヨウは、まつさおになり、目は血ばしり、ふるえる手でエミイにとびかかりました。

「ええ、焼いたわ。昨夜、いじわるしたからよ。おぼえていらつしやいといったでしょう。」

ジヨウは、悲しみと怒りに、かっとなつて、

「ばか、ばか！ 二度と書けないのよ。あたし一生あなたを許さない。」

メグもベスも、どうしようもありませんでした。

ジヨウは、エミイの横つつらをひっぱたいて、部屋をとび出し、屋根部屋のソファに身を伏せて泣きました。

おかあさんは、帰宅してその話を聞き、エミイをし

かりました。エミイはわるいことをしたと思いました。けれど、ジヨウの原稿は、五六篇のかわいいお伽話でしたが、文学的才分と全精力を数年間かたむけて書いたもので、ジヨウにとつては、とり返しのつかぬ損失でしたから、ジヨウは、お茶のベルが鳴ったとき、いかにもこわい顔をして出て来ました。エミイは、ありったけの勇気をふるい起して、

「ジヨウ、ごめんなさいね、あたし、ほんとうにわるかったわ。」と、あやまりました。

ジヨウは、ひややかに、

「許してあげるものか。」と、答え、エミイにとりあい

ませんでした。

だれも、この大事件のことを口にしませんでした。ジヨウがじぶんの怒りをやわらげるまで、なにをいってもしようがないからです。そんなわけで、その晩はたのしくなく、みんなだまって針仕事をしました。おかあさんが、おもしろい物語を話しても、なにかもの足りなくて、家庭の平和は、すっかりみだされていました。「#「いました。」は底本では「いました。いました」おもくるしい気分は、メグとおかあさんがうたつても晴れませんでした。

おかあさんは、ジヨウにおやすみなさいのキッスを

したとき、やさしい声で、

「ねえ、怒りを明日まで持ち越さないように、今夜中にきげんをなおしましょうね。おたがいに、ゆるし合い助け合いしましょう。明日からは、またたのしくね。」と、ささやきました。

ジョウは、おかあさんの胸に、顔をうずめました。悲しみと怒りを、涙で流したかった。けれど、あまりにいたでは深く、とうとう頭をふり、エミイに聞えよがしに、

「あんまりひどいんですもの、許してやれませんか。」
そういつて、ジョウは、さつさと寢室へいつてしまつ

たので、その夜はおもくるしい気分でおわりました。

つぎの日も、おもくるしい気分は去らず、みんなつまらなそうでした。ジョウは、ぶんぶんして、ローリイを誘ってスケートにでもいってみようと思っ出て出かけていました。エミイは、じぶんのほうからあやまつたのに、ジョウがまだ怒っているのです、なお気をわるくしました。メグは、エミイにむかつて、「#」「」は底本では「、「」

「あなたがわるかったのよ。大切な原稿をなくされたんですもの、なかなか許せないわ。だけど、いいおりを見て、あやまればいいと思うの。だから、あなたも

スケートにいつてごらんさい。そしてジョウがロー
リイと遊んで、きげんがよくなったとき、ジョウにキッ
スしてしてあげるか、なにかやさしいこととしてあげる
のよ。そしたら、心から仲なおりにしてくれるにちがい
ないわ。」

この忠告が気にいったので、エミイはいそいそと仕
度をして、後をおいかけました。川までは、そんなに
遠くなかったが、エミイがいったとき、二人はすべる
用意ができていました。ジョウは、エミイのすがたを
見ると、くるりとせなかをむけました。ローリイは、
エミイの来たのに気がつかず、氷のあつさをしらべる

ために、そのひびきを聞きわけながら、用心ぶかく岸にそつてすべつていきました。ローリイは、角をまがるとき、

「岸について来なさい。まんなかはあぶない。」

そういつて、すがたが見えなくなりました。

ジョウが、すべつて、その角までいったとき、エミイはずつとはなれたところで、川のまんなかへすべつていきました。ジョウは、みょうな心さわぎをおぼえました。ふいに氷のさける、ぱりつという音とともに水けむりをたて、エミイがりよう手をあげ、悲鳴とともに落ちこむのを見ました。その悲鳴に、ジョウは

心臓がとまると思うくらい、おどろきました。ローリイをよぼうとしましたが声が出ません。すると、なにかが、じぶんのそばを走ったと思うと、

「ぼうをもつて来て、早く、早く！」と、ローリイのどなる声が聞えました。

それから、ジョウは、まるで夢中でした。ただし冷静なローリイのさしずのままになって、おびえているエミイを救いあげること「#「こと」は底本では「ことと」ができました。

ふるえて、ぼとぼとしずくをたらしながら泣いているエミイを、二人は家までつれて帰りました。ジョウ

は、口ひとつきかず、青い顔をし、手にきずをし、服はさけたままで、とびまわり、なにかと用事をしました。さわぎがおさまった後、エミイは毛布にくるまって炉の火の前でねむってしまいました。

おかあさんは、エミイのそばにすわってましたが、ほっとして、ジョウをよんで、手にほうたいをしてやりました。

「おかあさん、だいじよぶでしょうか？」

「ええ、けがもしていないし、かぜもひかなかつたようです。あなたが、よくくるんで、大いそぎでつれて来てくれたからね。」

「ローリイが、みんなしてくれました。わたしは、エミイをほつといたから、一人ですべていって落ちたんです。もしかして死んだら、あたしのせいですわ。」

ジョウは、後悔の涙を流しましたが、それはもつと重い心の痛みからのがれることのできた、感謝の涙でもありました。

「みんな、あたしの、おそろしいかんしゃくからですわ。ああ、どうして、こうなんでしょう。おかあさん。どうぞあたしを救って下さい。」

「ええ、ええ、救ってあげますよ。そんなに泣かない

でね。今日のことよく覚えておいて、二度としないと誓いなさい。おかあさん「#「おかあさん」は底本では「おおあさん」だって、じつは、あなたとおなじくらい、かんしゃくもちなんですよ。それに、おかあさんはうち勝とうとしているんです。」

「まあ、おかあさんが？　だって、一度だって、かんしゃくを起しなすつたの、見たことがありますわ。」
ジョウは、おどろしい目をまるくしました。

「なおすのに四十年かかりました。やっとおさえられるようになりました。ほとんど、まい日、怒りたくなるけど、顔に出さぬようになったのです。これからは、

怒りたく「#「怒りたく」は底本では「怒りたくない」ならないようにしたいのですが、それには、もう四十年かかるかもしれません。」

ああ、その言葉はジヨウにとって、どんなお説教よ
り、はげしいおしかりより、よい教訓でありました。
そして、四十年も祈りつづけて欠点をなくそうとした
おかあさんのように、じぶんもどうかしてこの欠点を
なおしたいと思いました。

「ねえ、おかあさん、どういうやりかたなさるの？
教えて下さい。」

「そう、あたしは、今のあなたより、すこし大きくなっ

たころ、おかあさんをなくしました。あたしは、自尊心が強いので、じぶんの欠点をたれにうち明けることもできず、ただ一人で長い年月を苦しみました。なん度も失敗して、にがい涙を流しました。そのうちに、あなたたちのおとうさんと結婚して、しあわせになったので、じぶんをよくすることが、らくになりました。けれど、四人の娘ができ、貧乏になって来ると、またまたむかしのわるい欠点がでて来そうです。もともと、あたしは忍耐力がないので、娘たちがなにか不自由しているのを見ると、とてもたまらない気持になるんです。」

「まあ、おかあさん！ それじゃ、なにがおかあさんを救って下すつたんですか？」

「あなたのおとうさんです。おとうさんは、忍耐なさいます。どんなときも、人をうたがうことなく不平なく、いつも希望をもっておはたらきになります。おとうさんは、あたしを助けなぐさめ、娘たちの御手本になるように、教えて下すつたのです。だから、あたしは娘たちのお手本になろうとしてじぶんをよくすることに努めました。」

「ああ、おかあさん。もしあたしが、おかあさんの半分もいい子になれたら本望ですわ。」

「いいえ、もつともつといい人になって下さい。今日味ったよりも、もつと大きな悲しみや後悔をしないように、全力をつくして、かんしやくをおさえなさい。」

「あたし、やってみます。でも、あたしを助けて下さいね。あたしね、おとうさんは、とつてもおやさしいけど、ときどき真顔におなりになり、指に口をあてて、おかあさんをごらんになるのを見ましたわ。そうすると、おかあさんは、いつも口をむすんで、部屋を出ていらつしやいます。そういうとき、おとうさんに、おかあさんは、お気づかせになったんですか？」

「そうなんです。そういうふうに、助けて下さいとお

頼みした「#「した」は底本では「しんだ」んです。おとうさんは、お忘れにならないで、あのちよつとしたしぐさや、やさしいお顔つきで、あたしがきつい言葉を出しそうになるのを救って下すつたのですよ。」

ジョウは、おかあさんの目に涙があふれているのを見て、いいすぎたかしらと、心配になって尋ねました。

「あたし、あんなふうにしたの、いけなかつたでしょうか？　でも、あたし思ったこと、おかあさんにみないってしまふの。とてもいい気持なんですもの。」

「ええ、なんでもおつしやい。そうやって、うちあけてくれると、おかあさんはうれしいのよ。」

「あたしは、おかあさんを悲しませたのではないかと
思っで。」

「いいえ、おかあさんは、おとうさんのことを話して
いるうちに、お留守ということ「#「こと」は底本では
「ご」と「がしみじみ」#「しみじみ」は底本では「みじみ」
さびしくなり、おとうさんのおかげということを思っ
たりしたので。」

「だって、おかあさんは、おとうさんに従軍なさるよ
うに、おすすりになったし、出発のときもお泣きにな
らなかつたし、留守になってからも一度もこぼしたり
なさらないし、だれの助けもあてにしていらつしやら

ないし。」と、ジヨウは、いぶかしそうにいいました。

「あたしは、愛する御国のために、あたしの一ばん大切なものをささげたのです。どうしてぐちがいえましよう。あたしが人の助けがいらぬように見えるのは、おとうさんよりも、もつといいかたがおかあさんが慰め励まして下さるからなの、それは、天国のおとうさんです。天国のおとうさんに近づけば、人の知恵や力に頼る必要はなく、平和と幸福が生れます。さ、あなたもこのおとうさんのところへいきなさい。すべての心配や悲しみや罪をもつて。ちようど、あなたがおかあさんのところへ心から信頼して来るように。」

ジョウの答えは、ただおかあさんに、しっかりとすがりつくことでした。そして、だまって、心からある祈りをささげ、いかなる父や母よりも、いつそう強いやさしい愛で、すべての世の子供をむかえて下さる「おとうさん」に、近づいていくのでした。

エミイは、眠ったまま、ねがえりをうって、ため息をつきました。ジョウは、今すぐに、じぶんの過失をつぐないたいと思うためか、今までにないまじめな表情をしました。

「あたし、かんしやくをつぎの日までもち越して、エミイを許さなかった。もしローリさんがいなくなったら、

とんだことになったんだわ。ああ、どうしてあたしは、
こんなにいけないんでしょう？」

ジョウは、エミイの上によりかかり、枕の上のみだ
れ髪をなでながら、そういいましたが、それが聞えた
ものように、エミイはぼつちり目を開け、ほほえみ
をうかべて手をさし出しました。二人はなんともいい
ませんでした。毛布にへだてられながらも、しっか
りと「#「しっかりと」は底本では「しっりと」抱き合い、
心こめたキスに、すべてを許し忘れてしまいました。

第九 虚栄の市

四月のある日、メグはじぶんの部屋で、いもうとたちにかこまれながら、トランクに荷物をつめこんでいました。おかあさんは、娘たちが年ごろになったら与えようと考えて、むかしのはなやかだった時代の記念品のしまつてある杉箱を開けて、絹の靴下と、きれいな彫刻のある扇子と、かわいい青いかざり帯を下さいました。

あくる日は、うららかな天気で、メグはたのしい二

週間の遠出に家を出ました。上流のマフオット家の客になりに行くのです。おかあさんは、あまりこの訪問をよろこびませんでした。メグが熱心に頼むし、サリイがよく面倒を見ると約束してくれたので、冬の間よくはたらいたごほうびの意味で許したので、メグは、上流社会の生活を味わう第一歩をふみ出したのであります。

マフオット家に客となってみると、メグはそのすばらしい家や、そこに住む人々の上品さに、気をのまれてしまいました。その生活は、軽薄でしたが、みんなが親切でしたから、らかな気持ちになりました。すばら

しいごちそうをたべ、りっぱな馬車で乗りまわし、上等な服を着かぎって、なにもせず遊び暮すことは、たしかに、たのしいことでした。それはメグの趣味にかない、メグはその家の人たちの、会話や態度や服の着こなしや、髪のちぢらしかたなどを、まねしようと努めました。そして、金持の家の暮しのゆたかさにくらべると、貧乏なわが家の暮しが、いかにも味気なく不幸に見えて来ました。

メグは、マフオット家の、三人のわかいおじょうさんたちの氣にいつて、散歩、乗馬、訪問、芝居やオペラ見物、夜会など、いつもいっしょに、たのしい時間

をすごしました。そして、ベルには婚約者があることがわかりましたが、メグはそれに興味をもち、ロマンチックなことに思えました。

マフオット氏は、ふとつた老紳士で、メグのおとうさんを知っていました。マフオット夫人も、やはりふとつた婦人で、メグをかわいがってくれ、「ひな菊さん」という名で、よんでくれました。

いよいよ、夜会があるという日、三人はみんなすばらしい服を着て、はしゃいでいるのに、メグはじぶんのポプリンの服のみすぼらしさに心がおもくなりしました。それでも、服のことなど、なんとも思っていない

ように、三人は親切にメグにむかつて、髪をゆってあげようとか、かざり帯をしめてあげようとかいいましたが、メグはその親切のなかに、じぶんの貧しさへのあわれをみてとり、いつそう心は重くなるのでした。

そこへ、女中が花のはいつている箱をもつて来ました。アンニイが、

「ジョージから、ベルへ来たんだわ。」と、いいましたが、女中は、手紙をさしだしながら、

「マーチさんへと、使いの者が申しました。」と、いいました。

「まあ、すてき。どなたから？　あなたに恋人がある

とは知らなかったわ。」

みんなは、強い好奇心をいだきました。

「手紙は母から、花はローリーからですわ。」

「まあ、そうなの。」と、アンニイは、みょうな表情でいいました。

母からの手紙は、みじかいけれど、よい教訓でした。

メグはポケットにしまいました。また、花はしずんだ
「#「しずんだ」は底本では「じずんだ」気持をひきたて
てくれました。その幸福な気持で、メグは、しだとば
らをわずかとして、あとは気前よくわけましたので、
メグのやさしさに心ひかれたようでした。メグが、み

どりのしだを髪にさし、ばらの花を胸にさしたので、服はそのためにいくらかひきたって見えました。

メグは、その夜、心ゆくまでダンスをしました。みんなが親切にしてくれ、歌をうたえばいい声だとほめ、リンカーン少佐は、あの目の美しい令嬢はどなたと尋ねましたし、マフオット氏は、メグの身体にばねみたいなものがある、ぜひメグとダンスするといいました。こうしてたのしくしていたのに、温室のなかに腰かけて、ダンスの相手がアイスクリームを持って来てくれるのを待っていたとき、うしろで話す話し声をふと聞いて、メグは気分をこわされました。

「いくつぐらいでしょう?」

「十七八かしら、」

「あの娘たちのうちの一人が、そういうことに、なつたらたいしたものですよ。サリイがいつてましたが、あの人たちは、このごろとても親しくしていて、それに、あの老人は娘たちに、まるで夢中になっているんですつて。」

「それやマーチ夫人の計略ですよ。娘のほうではそんな気はなさそうだけど、」

「そういつたのは、マフオット夫人でした。」

「あの子ったら、おかあさんからだなんてうそついて、」

花がとどいたら顔をあかくしたわ。いい服さえ着せたら、きれいになるでしょう。木曜日にドレス貸して「#「貸して」は底本では「貸しで」あげようといったら、あの子、気をわるくするかしら？」

「あの子、自尊心は強いけれど、モスリンのひどい服しかないのだから、気をわるくはしないでしよう。それに今晚の服をやぶくかもしれないから、貸してあげる口実になるわ。」

「そうねえ。あたしローレンスをよんで、あの子をよろこばしてあげましょう。そして、後で、からかってあげましょう。」

そこへ、ダンスの相手もどつて来ました。メグは、今のうわさ話に怒りをもやし、すぐにも家へ帰って、おかあさんに心の痛みを訴えたくになりました。

けれど、メグの自尊心は、むろんそのことを「#」ことを「は底本では「ことる」させるわけもなく、できるだけ、ほがらかにふるまったので、だれもメグの努力に気づきませんでした。

夜会がおわると、メグはほっとしました。ベットのなかで考えていると、ほてったほおに、涙が流れました。あのおろかなうわさ話は、メグに新らしい世界を

開いてくれ、古い平和の世界を根こそぎみだしてしまいました。あわれなメグは、ねぐるしい一夜をあかし、おもいまぶたの、いやな気分で床をはなれました。

その朝は、だれもぼんやりしていました。娘たちが編物をはじめめる気力が出たときには、もうおひるでした。メグは、みんなが好奇心で、じぶんのことを気にしていることを知りましたが、ベルが手をやめて感傷的ないかたで、こういったので、なにもかもわかりました。

「ねえ、ひな菊さん、木曜日のに、あなたのお友だちのローレンスさんに招待状を出しましたの。あたし

たち、お近づきになりたいし、それに、あなたに対する敬意ですからね。」

「御親切にありがとうございます。でも、あのかた、いらつしやらないでしょう。七十に近い、お年よりですもの。」

「まあ、ずるい、あたしのいうのは、わかいかたのほうよ。」と、ベルは笑いました。

「わかいかたって、いらつしやいませんわ。ローリイなら、ローリイなら、まだ子供で、いもうとのジョウくらいでしょう。あたしはこの八月で十七ですもの。」

「あんなりっぱな花をおくって下すって、ほんとにい

「い方ね。」と、アンニイが、意味ありげにいいました。
「ええ、いつでも下さるの。あたしの家のみんなに。
あのかたの家に、いっぱい花があるし、あたしの家ではみんなが花がすきだからです。母とローレンスさんとはお友だちでしょう。だから、あたしたち子供同志も遊びますの。」

メグは、この話を、うちきつてくれればいいと思いました。
ました。

「ひな菊さんは、まだ世間のことにうといのね。」と、クララはうなずきながら、ベルにむかっていいました。
「まるで、まだあかちゃんね。」と、ベルは肩をすぼめ

ました。

そのとき、マフオット夫人が、レースのついた絹の服を着てはいつて来ました。

「あたし、これから娘たちのものを、もとめにまいりますが、みなさん御用はありませんか？」

「ございませんわ、おばさま、ありがとう。あたしは木曜日には、あたらしいピンクの絹を着ますし。」と、サリイがいいました。

「あなた、なにお召しになるの？」と、メグにサリイが尋ねました。

「昨夜の白いのを来ますわ。ひどくさけましたが、も

「うまくなおせましたら。」

「どうして、かわりを家へとりにおやりにならないの？」と、気のきかないサリイがいました。

「かわりなんか、あたしありませんわ。」

やっとメグがいったのに、サリイは人のよさそうな、びっくりしたふうで、

「あれつきり、まあ、」と、いいかけましたが、ベルは頭をふって、サリイの言葉をさえぎってやさしくいきました。

「ちつともおかしくないわ。まだ社交界に出ていないのに、たくさんドレスこしらえておく必要ないわ。ひ

な菊さん、いく枚あっても、お家へとりにいかせなくてもいいわ。あたしの小さくなった、かわいい青色の絹のが、しまつてありますから、あれを着てちょうだいな。」

「ありがとうございます。でも、あたしみたいな子供には、この前のでたくさんですわ。」

「そんなことおっしゃらないで、あなたをきれいにしてみたいの。だれにも見せないように仕度してシンデレラ姫みたいに、ふたりでふいに出て行って、みんなをおどろかしたいの。」と、ベルは笑いながら、けれど、あたたかい気持ですすめるので、メグもそれをこぼむ

ことはできませんでした。

木曜日の夕方、ベルと女中で、メグを美しい貴婦人にしあげました。髪をカールし、いい香りの白粉をぬりこみ、唇にさんご色の口紅をぬり、空色のドレスを着せ、腕環、首かざり、ブローチなど、装身具でかざりたてました。美しい肩はあらわに、胸にばらの花はあかく、ベルも女中も、ほればれと「#「ほればれと」は底本では「ほればれと」ながめました。

「さあ、みんなに見せてあげましょう。」と、ベル「#「ベル」は底本では「べる」は、ほかの人たちのつめかけている部屋へ、メグをつれていきました。

メグは、ハイヒールの青い絹の舞踏靴をはき、長いスカートをはき、胸をわくわくさせながら歩いていきました。鏡がかわいい美人だと、メグにはつきり教えてくれたので、メグはかねての望みがかなえられた満足を味わい、じぶんから進んで、美しさを、見せびらかそうとさえしました。ベルは、ナンとクララにむかつて、

「あたしが、着かえて来る間に、ナン、あなたは裾さばきと、靴のふみかたを教えてあげてね。ふみちがえてつまずくといけないから、それから、クララ、あなたの銀のちようちよを、まんなかにさして髪を左がわ

のカールをとめてあげてちょうだい」「#「ちょうだい」は底本では「ようだい」。あたしのつくつた、すてきな作品をだめにしちやいやよ。」と、いって、じぶんの成功に、さも満足らしい顔つきで、いそいで出ていきました。

ベルが鳴りひびき、マフオット夫人が、使いをよこして、娘たちにすぐ来るように、告げるとき、メグはサリイに、ささやきました。

「あたし、階下へいくのこわいわ。なんだか、とてもへんな、きゆうくつな気持で、それに半分、はだかみたいで。」

「とてもきれいだからいいわ。あたし「#「いいわ。あたし」は底本では「いいわあ。たし」なんかとてもくらべものにならない。ベルの趣味はすてき、ただつまづかないようにね。」

心のなかにその注意をたたみこんで、メグは無事に階段をおり、客間へ、しずかにはいつていきました。メグは、たちまちみんなの目をひきつけ「#「ひきつけ」は底本では「ひきつけ」、この前の夜会のとくと、まるでちがって、わかい紳士たちが、ちやほやして、いろいろ気にいるようなことを話しかけました。ソファに腰かけて、他人の品定めをしていた数人の老婦人たち

は、メグに興味をもち、なかの一人がマフオット夫人に身もとを尋ねました。

「ひな菊マーチです。父は陸軍大佐で、あたしどもとおなじ一流の家がらですが、破産しましてね、ローレンスさんと親しいんです。家のネッドはあの子に夢中なんですよ。」

「おや、そうなんですの。」と、その老婦人はもつとよく見ようとして眼鏡をかけました。

メグは、聞えないふりをしましたが、夫人のたためにはあきれました。けれど、その妙な気持を心のすみにおしつけ、笑いをたたえて、貴婦人らしくふるまっ

ていました。ところがメグの顔からきゆうに笑いがきえました。正面にローリーの姿を見たからで、その目はじぶんを非難しているではありませんか。ローリーは、笑っておじぎをしましたが、メグはこんな姿でなくじぶんの服を着ていればよかったと思いました。メグは、そばへいき、

「よくいらっしやいました。お出でにならないと思っ
ていました。」

「ジョウが、ぜひいつて、あなたのようなすを見て来て
ほしいというので来たんです。」

「ジョウに、なんておっしやるつもり？」

「どこの人だかわからなかったといえます。だって、まるで大人みたいで、あなたらしくないんですもの。」
「みんなでこんななりにさせたの、あたしもちよつとしてみたかったけど。ジヨウびつくりするでしょうね？ あなたもこんなの、おいや？」

「ぼく、いやです。わざとらしく、かざりたてたの、いやです。」

年下の少年からいわれた言葉としては、あまりにするどく、メグはふきげんになって、

「あなたみたいな、失礼な人、知らないわ。」と、いつて、そこを去り、窓ぎわへ行ってたたずみ「#」たたず

み」は底本では「たにずみ」、きゆうくつなドレスのために、ほてったほおを夜気にひやしました。大好きなワルツの曲がはじまっても、そのまましていると、ローリイが来て、ていねいに手をさしのべました。

「失礼なことといって、お許し下さい。いっしょに踊って下さい。」

「お気持ちをわるくするとこまります。」

「いいえ、ちつとも、ぼくダンスしたいのです。そのドレスは好きじゃないけど、あなたはほんとうに、すてきです。」

メグは、にっこり笑って気持ちをやわらげ、二人は音

楽に合わせておどりはじめました。

「ローリー、あたしのお願ひ聞いてね、家へ帰ってもあたしのドレスのこといわないでね、家の人々は、じょうだんがわからないし、おかあさんには心配させるから。」

「どうしてそんなものを着たんのです？」

ローリーの目がなじっていました。

「どんなに馬鹿だったか、自分でお母さんというから、あなたいわないですよ。」

「いわないと約束します。でもきかれたらどういいましょう！」

「あたしがきれいで、たのしそうだったとだけ、いつてちょうだい。」

「きれいだけど、さあ、たのしそうかしら？ たのしそうに見えない。」

「ええ、たのしくないの。おもしろいことしてみたかったけど、やっぱり性にあわないわ。あきてしまうわ。」

このとき、マフオット家の若主人のネッドが来たので、ローリイは顔をしかめました。

「あの人、あたしに三回もダンスを申しこんでいるの。だから来たんでしょう。」

メグがいかにもいやそうにいうので、ローリイは、これはおもしろいと思いました。

ローリイは、それつきり夕飯のときまで、メグと話しませんでした。食事のとき、ネットとその友達のフィツシヤアを相手に、メグがシャンペン酒を飲むのを見たローリイは、だまっていられませんでした。

「そんなもの飲むと、明日、頭痛がしますよ。ぼくは飲みません。おかあさんだって「#「だって」は底本では「たつて」、お気にいらないでしょう。」

ローリイは、ネットとフィツシヤアに聞かれないように、メグによりそって、そうささやきました。

「今夜は、あたし気持ちがよいみたいなお人形なの。明日からはいい子になるわ。」

「それじゃ、明日もここにいたいんですね。」

ローリイに、ついとはなれて立ち去りました。

メグは、踊ったり、ふざけたり、しゃべったり、ローリイがあきれるほど、はしゃぎました。帰りがけに、ローリイがあいさつに来ると、メグは、もう頭痛になやまされていましたが、

「いいこと！ 頼んだこと忘れないでね。」と、むりに笑顔をつくつていました。

「死をもつての沈黙」と、ローリイは、フランス語で、

芝居がかりで答えて立ち去りました。

メグは、もう疲れきっていました。わびしい気分で床にはいりましたが、あくる日も一日気分がわるく、土曜日になって、二週間の遊びと、ぜいたくざんまい「#「ざんまい」は底本では「さんまい」にあきあきして家へ帰って来ました。

日曜日の晩、メグはおかあさんとくつろいだとき、あちこち見まわしながら、

「年中、お客さわぎなどいやだわ。しずかに暮すのたのしいわ。りっぱでなくても、じぶん「#「じぶん」は底本では「じぶ」」の家が「ばんいいわ。」と、のびのび

した表情でいいました。

「そう聞いてかあさんはうれしい。あなたがりっぱなところへいったので、家がつまらなく「#」つまらなく」は底本では「つまちなく」、みじめに見えやしないかと、心配していたのよ。」と、おかあさんの目の、気づかわしそうな影が消えました。

メグは、おもしろそうに、いろいろの冒険を話しました。けれど、心の中になにかおもしろいものがあるらしく、九時がうってジョウがねようといいい出したとき、メグは「#「メグは」は底本では「メグに」」思いきったというふうに

「おかあさん、あたし白状することがありますの。」

「そうだと思っていました。どんなこと！」

「あたし、むこうへいきましようか？」と、ジヨウが
気をきかしていました。

「いいえ、いて。なんでもあなたには、うち明けてる
じゃないの。いもうとたちの前では、はずかしいけど、
あなたには、あたしのした、あさましいこと、すつか
り聞いてほしいわ。」

「さあ、聞きましょうね。」と、おかあさん「#」おか
あさん」は底本では「あかあさん」は、にこにこしながら
も、すこし心配そうでした。

「みんなで、あたしをかざりたてたことは、お話ししましたが、髪をカールしたり、白粉をぬったり、ドレスを着せたりしたこと、まだ話しませんでしたね。ローリイは、正気の沙汰ではないと思ったでしょう。あたしは、お人形のようなとか、美人だとかおだてられました。つまらないこと「#「こと」は底本では「と」とはわかっていながら、おもちゃになりました。」

「それつきり？」と、ジョウがいました。

「まだ、あるの。シャンペンを飲んだり、ふぎけたり、はねまわったり、けがらわしいことばかり」と、メグは自責の念に堪えられないようでした。

「もっと、なにかあったでしょう？」と、おかあさんが、やさしくメグのほおをなでながらいいました。

「ええ、とてもばかげたことなの。だって、みんながあたしとローリイのこと、あんなふうにいたり考えたりするのんですもの。」

メグは、マフオツト家で聞かされたいろんなうわさ話をしました。おかあさんは、こんな考えを純真なメグの心につきこんだことを不快に思って、唇をぎゅつとむすんでいました。ジョウは、怒ってさげびました。「そんなばかなこと、あたし聞いたことがないわ。なぜおねえさんは、その場でいってやらなかったの？」

「あたしにはできなかつたの。でもあんまりひどいので、しやくにさわるし、はずかしいし、帰つて来なければならぬのに、帰るのも忘れてしまつて。」

「あたしたちのような貧乏人の子供について、そんなつまらぬうわさ話をしていることを、ローリイに話したら、きつとどなりつけるでしょうね。」

「ローリイにそんなこといったら、いけませんわ。ねえ、おかあさん。」

おかあさんは、まじめな顔でいいました。

「いけません。ばかなうわさ話は、二度と口にしてはいけません。できるだけ早く忘れることです。あなた

をいかせたのは、おかあさんの失敗でした。親切なん
でしようが、下品で、教養があさく、わかい人たちに
いやしい考えを持たせる連中ですからね。メグ、今度
の訪問があなたにわるい影響があるようなら、かあさ
んは残念です。」

「御心配下さらないで。あたしは、自分のいけなかつ
た「#「なかった」は底本では「なかつた」ことをなおし
ますわ。けれど、あたしはみんなから、ちやほやされ
て、ほめられるの、わるい気はしませんの。」

メグは、はずかしそうにいました。

「それは、しぜんな気持です。それがために、ばかげ

たことをしなければいいんです。ただ、ほめられたとき、それだけの価値がじぶんにあるか反省して、美しい、へりくだる娘になることです。」

それから、話は計略のことになりましたが、メグはおかあさんにむかって尋ねました。

「マフオット夫人のおっしやったように、計略をたてていらっしやる」#「いらっしやる」は底本では「いらっしやる」の?。」

「ええ、たくさんたてています。だけどマフオット夫人のいうのとはちがいます。あたしのは、娘たちが、美しくて教養のある、善良な人になって幸福な娘時代

をすごし、よい、かしこい結婚をして、神さまの御意により、苦勞や心配をできるだけなくして、有益なたのしい生涯を送ってほしいのです。りっぱな男の人に愛され、妻としてえらばれることは、女の身にとつて一ばんたのしいことです。あたしは、娘たちがこういう美しい経験をすることを、心から望んでいます。そういうことを考えるのはしげんで、メグ、その日の来るのを望み、その日を待つのは正しいことですし、その支度をしておくことは「#」おくことは「は」は底本では「おくことに」かしこいことです。あたしは、あなたがたのために、そういう大望をいだいています。けれど、

ただ世間へおし出し、金持と結婚させたいのではありません。お金持だからとか、りっぱな家に住めるからとか、そんなことだけで結婚したら、それは家庭といえませんが。愛がかけているからです。お金は必要で大切なものです。上手に使えばたつといものですが、ぜひとも手にいれるべき第一のものとか、ごほうびとか思つてはこまります。かあさんは、あなたがたが、幸福で、愛されて、満足してさえいれば、自尊心や平和なくして王位にのぼっている王女さまたちになつてもらうより、かえつて貧乏人の妻になつてもらいたいと思ひます。」

メグは、そのとき、ため息をしていました。

「貧乏な家の娘は、せいぜい出しゃばらなければ、結婚のチャンスはつかめないって、ベルがいつてましたわ。」

ジョウは、気づよくいました。

「そんなら、あたしたちは、いつまでも、えんどおい娘でいましょう。」

「ジョウのいうとおりです。不幸な奥さんや、だんなさんをあさりまわっている娘らしくない娘よりも、幸福なえんどおい娘でいたほうが、よろしい。なにも心配することはありません。メグ、ほんとに愛のある人

は、相手の貧乏などにひるむことはありません。かあさんの知っているりっぱな婦人のなかには、むかしは貧乏だったかたがいくらもあります。けれど、愛をうける、ねうちのあるかたのばかりだったから、人がえんどおい娘にしておかなかつたのです。そういうことは、なりいきにまかせておけばいいので、今は、この家庭を幸福にするように努め、やがて結婚の申しこみをうけたらばその新らしい家庭にふさわしい人になるし、もしかしこい結婚ができなければ、この家に満足して暮すのです。それから、もう一つ、よく覚えていてほしいのは、かあさんはいつでもあなたが秘密をう

ち明けることのできる人ということ、また、おとうさんは、あなたがたのよいお友だちであるということですよ。そして、おとうさんとあたしは、あなたがたが結婚しても、独身でいても、あたしたちの生活のほこりであり、なぐさめであることを信じ、また望んでもいるということをね。」

メグとジヨウは、

「おかあさん、あたしたちきつとそうなります！」と、ほんとに、心からさげんで、おやすみなさいをいいました。

第十 ピクイック・クラブと郵便局

便局

「#「第十 ピクイック・クラブと郵便局」は底本では「第十 ピクイック・クラブと郵便局」

春がめぐつて来ると、いろいろと新らしいたのしみ
がはやり、しだいに日がのびるにしたがって、長い午
後の時間に、いろいろの仕事やあそびができるよう
になりました。

庭に手入れをしなければなりません。姉妹は

めいめい四分の一の地所をもらって、じぶんのすきなようにやりました。ハンナが、どれがどのかたの庭か、支那から見たってわかるといいましたが、まさにそのとおりで、四人の趣味はひとりひとりちがっていました。

メグは、ばらとヘリオトロップと天人花と、かわいいオレンジの木をうえました、ジョウの花壇には、二シーズン、けっしておなじじものがうえられたことがなかったのは、たえず新しい実験を試みるからで、今年はいまわりをうえるはずで、その種子はにわとりと、そのひよこの餌にするためでした。ベスは、スイー

ト・パイ、「#」「」は底本では「・」もくせい草、ひえん草、なでしこ、パンジイ、よもぎなど、古風な香りゆたかな花や、小鳥の餌になるはこべ、子猫のためのいぬはつかなどをうえました。エミイは、小さくはあ
るが、かわいいあずま家をつくり、にんどうだの、朝
がおだのを、その上にはわせ、いろんな花を咲かせま
した。そして、せの高い白ゆりだの、やさしいしだな
ど、たくさんの花をうえこみました。

晴れた日には、庭いじり、散歩、川でのボートあそ
び、花の採集など、雨の日には、室内のあそびごとに
時間をすごしました。そのあそびのなかには、もとか

らのもあり、新らしいのもありましたがその一つ、ピ
クイック・クラブというのは、イギリス文豪ジケンス
の作品中から、その名をとったものでした。このクラ
ブは、そのころはやっていた秘密会で、土曜日の夕方、
ひろい屋根部屋で開き、ずっと一年もつづけて来たの
です。会はこんな順序で行われます。ランプをおいた
テーブルの前に、三つのイスをならべ、ちがった色で
クラブの頭文字のP、C、二つの大きな字をぬいつけ
た四つの白いきしようが用意されました。そして、「ピ
クイック週報」という週刊新聞が発行され会員はみん
ななにか寄稿することになって、文才のあるジョウが、

編集にあたりました。

今後七時、四人の会員は、クラブ室にのぼっていき、くびに、きしやうをまきつけ、ものものしい態度で席につきました。デイケンスの小説のなかの名を借りて、メグは一ばん年上なので、サミエル・ピクイック氏「#ピクイック氏」は底本では「ビクイック氏」。ジョウは文学的才能があるので、オーガスタス・スノーダグラス氏、ベスは、トラシイ・タップマン氏、エミイは、ナザニエル・インクル氏でありました。会長のピクイック「#ピクイック」は底本では「ビクイック」が、週報を読みました。週報には、創作物語、詩、地方のニュー

ス、おかしな広告、たがいの、欠点や短所を注意しあういましめなどが、いっぱいのつていました。今夜は、玉のはいつていない目がねをかけた会長が、テーブルをたたいて、せきばらいをし、おもむろに読みはじめました。

会長が、週報を読みおわると、いつせいに拍手の音がり、つぎにスノーダグラス氏が、ある提案をするために立ちあがりました。

「会長ならびに紳士諸君。」と、議会で演説するような堂々たる態度と調子ではじめました。「わたくしは、ここに一名の新会員の入会許可を提議したいと思うの

であります。その人は、その名誉をあたえられるにふさわしい人物でありまして、入会されたならば、クラブの精神、週報の文学的価値に寄与するところ大なるものがありました。そして、その人とは、ほかならぬテオドル・ローレンス氏です。ねえ、入れてあげましょう。」

ジョウの演説は、最後で調子がかわつたので、みんな大笑いしました。けれど、すぐに、みんな気づかわしそうな顔をして、ひとりも発言しませんでした。そこで、会長が、

「投票によってきめることにします。」と、いい、つづ

いて「この動議に賛成のかたは、賛成といって下さい。」と、大声でうながしました。

すると、おどろいたことに、ベスのトラシイ・タツプマン氏が、おずおずした声で、

「賛成」と、いいました。

「反対のかたは、不賛成といって下さい。」

メグとエミイ、すなわち、ピクイツク氏と、インクル氏は、不賛成でありました。そして、まずエミイのインクル氏が立ちあがって、いと上品にいいました。

「わたしたちは、男の子たちを入会させたくありません。男の子たちは、ふぎけたり、かきまわしたりする

だけです。これは、女のクラブですから、わたしたちだけで、やっていきたいと思えます。」

ついで、メグのピクイツク氏が、何かうたがうときにするくせの、ひたいの小さなカールをひっぱりながらいました。

「ローリイは、わたしたちの週報を笑いものにし、あとでわたしたちをからかうでしょう。」

すると、スノーダグラス氏は、はじめたようにとびあがって、熱をこめて、

「わたしは紳士として誓います。ローリイはそんなこととは致しません。かれは書くのがすきで、わたしたち

「の書いたものに趣きをそえ、わたしたちが「#「たちが」は底本では「たが」センチメンタルになるのを防いでくれると思います。そう思いませんか？ わたしたちは、かれにすこししかなし得ませんが、かれはわたしたちにたくさんのことをしてくれません。よつて、かれに会員の席をあたえ、もし入会すれば、よろこんで迎えたいと思います。」

いつも受けている利益をたくみに暗示されたので、ベスのタツプマン氏は、すっかり心をきめたようすで立ちあがりました。

「そのとおりです。たとえば、すこしぐらいの不安は

あつても、かれを入会させましょう。もしかれのおじいさんも、はいりたければ入会させてよいと思ひます。」

バスのこの力ある発言に、みんなおどろき、ジヨウは席をはなれて握手を求めに來ました。

「さあ、それでは、もう一度投票します。諸君はわたしたちのローリイであることを頭にいれて、賛成といつて下さい。」

ジヨウのスノーダグラス氏が、いきおいこんでさけぶと、たちまち、賛成という三つの声がいっしよに聞えました。

「よろしい、ありがたいしあわせ！ さて、それでは、
時をうつさず、さつそく新会員を紹介させて下さい。」
と、ジョウは、戸だなを開けると、くずいれぶくろの
上に、おかしさをこらえて顔をあかくして、ローリイ
がすわっていました。このいたずらに、すっかりやら
れた三人が、

「いたずら者。ひどいわ！」と、ぶつぶついつている
あいだに、ジョウはかれをひき出し、会員章をあたえ
て席につかせてしまいました。

「きみたち、ふたりのずるいにはおどろかさされましたぞ。」と、ピクイック氏は、こわいしかめっ面をしよ

うとしましたが、かえってにこにこ顔になってしまいました。その新会員に、うやうやしく敬礼をして、きわめて愛想のよいようすでいました。

「会長閣下および淑女諸君、いや、これは失礼、紳士諸君、どうぞ自己紹介をお許し下さい。わたくしは、このクラブの末席「#「末席」は底本では「末席」をけがすサム・ウエラーと申します。」

「すてき すてき」と、ジョウはテーブルをたたきながらいいました。

「ただ今、わたくしを、じょうずにひっぱり出して下さった、忠実な友だち、そして、尊敬すべき後援者は、

今夜のずるい計画については、すこしも責任はないのでありまして、これはすべてわたくしがたてた計画で、わたくしがむりをいって、やっと承知させたのであります。」

ローリイが、手をふりながらそういうと、そのじょうだんが、おもしろくてしようがないというふうに、スノーダグラス氏は、

「みんなじぶんのせいになくってもいいわ。戸だなにかくれることは、あたしがいい出したんだわ。」といいました。

「この人のいうことなど心にかけてはいけません。計

画をしたわる者はわたくしです。しかし名誉にかけて、二度とこんなことはしません。今後は、永久につづくこのクラブのために、大いに力をいたす考えであります。」

「ヒヤ！ ヒヤ！」と、ジョウはフライ鍋のへりをたたきながらさげびました。

「つづける！ つづける！」と、インクル氏は、会長がうやうやしく礼をしている間にいいました。

「おお、一言申しておきたいことは、小生の受けた名誉を感謝いたしたく、となり合う両国民の親善関係をふかめる一助として、庭のすみに郵便局をつくったこ

とであります。もとはつばめ小屋でしたが改造しました。手紙、原稿、本、小づつみ、なんでもとりつき、時間の節約に役だつと思います。両国民はそれぞれかぎをもちますわけで、ここにそのかぎを贈呈することをお許し下さい。」

ウエラー氏が、かぎをテーブルの上において、自席にもどると、さかんな拍手、さけび声がありました。つづいていろんな討議がおこなわれ、めいめい、かっぱつに意見をかわしました。そして、新人会員のぼんざいを、最後にとなえて散会しました。

たしかに、ローリーのサム・ウエラー氏の入会は、

このクラブに生氣をふきこみ、書くものでも、週報にちがったおもむきをそえました。郵便局は、すばらしい考えでした。たくさんの奇妙なものがとりつがれました。悲劇台本、ネクタイ、詩、漬もの、草花の種子、長い手紙、譜本、しようがパン、「#」「」は底本では欠落「ゴム靴、招待状、注意書き、小犬などでした。ローレンス老人も、このあそびをおもしろがって、おかしな小づつみや、ふしぎな手紙や笑いの電報などを送って来ました。また、ローレンス家の園丁はマーチ家の女中ハンナにひきつけられ、本気で恋文を書いて来ました。その秘密がばれたとき、みんなはどんなに笑いました。

ころげたことでしょう！

第十一 経験が教える

「#」は底本では欠落「六月一日、明日はキングさんの家の人、みんな海岸へ出かけて行って、あたしはひまになるの！ 三ヶ月のお休み！ なんてうれしーんでしよう！」

あるあたたかい日、家へ帰って来たメグが、ジヨウ

を見つけてさげびました。ジヨウは、いつになく疲れたようすで、ソファの上に横たわり、ベスがそのほこりだらけの靴をぬがしてやっていました。エミイは、みんなのためにレモン水をつくっていました。

ジヨウがいました。

「マーチおばさんも、今日お出かけになったわ。すてきでしょ。いっしょにいつてほしいと、いわれやしないかと、びくびくしちやった。それで、あたし、おばさんを早くたたせたいので、お気にめすように、それこそいっしょうけんめいにはたらいたわ。だけど気のきいたこのおつきを、つれていこうと思われたら大へ

んだと心配したの。それでおばさんを馬車にのりこませると、なにかいってたけど聞えないふりをして、大いそぎで逃げて帰ったの、ほんとに助かったわ「#」助かったわ」は底本では「助かったわわ」。

「よかったわね。それで、メグねえさん。この休みになにをなさるつもり？」と、エミイが尋ねました。

「うんと朝ねぼうして、なにもしないの。だって冬からこつち、朝早くからたたき起されて、ひとのためにはたらいてばかりいたんですもの。大いに休んであそぶのよ。」

「ふうむ、あたしはそんなだらけたの大きらい。たく

さん本を集めておいたから、あの古い林檎の枝の上で、このかがやかしい少女時代をよくするために勉強するの。」と、ジヨウがいいました。

「あたしたちも、勉強はやめにして、おねえさんのまねしてあそびましょう。」と、エミイがいうと、ベスも、よろこんで、

「ええ、いいわ。あたし新らしい」「#「新らしい」は底本では「新ちしい」歌をすこしおぼえたいし、人形さんの夏服もつくらなければならぬし。」と、いいました。

そのとき、おかあさんが、針仕事の手をやめて、みんなにむかっていいました。

「一週間、はたらかないであそんでごらんさい。土曜日の晩になると、つまらないということが、きつとわかるでしょう。」

「そんなことはありませんわ。とてもうれしいわ。きつと。」と、メグがいました。

「ねえ。わが友、祝杯をあげましょうよ。あそびは永久に！ あくせくしつこなし！」と、ジョウはレモン水がいきわたったとき、そのコップを高くささげてくださいました。

みんなはたのしそうに飲みほしました。そのときから、ぶらぶらあそびがはじまりました。あくる朝も、

メグは十時までねどこのなか。ジヨウは花瓶に花もささず、ベスはそうじをしないし、エミイの本はちらかつたまま、ただ「おかあさんの領分」だけが、きちんと片づいているだけでした。この部屋では、メグは、休息も読書もできず、あくびが出るばかり、給料で夏のどんなドレスが買えるかなどと考えるのでした。ジヨウは、午前のうちはローリイと川へボートこぎにいき、今後は林檎の木の上で「広い世界」という物語を涙を流して読みました。ベスは、戸だなをかきまわし、そのままにして、ピアノへ気をうつしていきました。エミイは、じぶんの花園のスケッチをはじめました。そ

れから散歩にいきましたが、夕方になってぬれねずみになって帰って来ました。

お茶のとき、四人はその日のことを、いろいろ話し合いましたが、たのしかったけれど、いつになくその日は、永く感じられたということに、みんなの意見は一致しました。そして、つぎの日も、また、つぎの日も、休んであそびました。ところが、いよいよ一日が永く感じられ、なんとなくおちつかない気分になって来ました。すると、悪魔は四人の心をねらい、いろんなわるいことを見つけて、あばれはじめたのであります。

たとえば、メグは布地を小さくきりすぎて、一枚の服をだいなしにしてしまいました。ジヨウは、本を読みすぎて目がぼやけ、いらいらした気分となって、やさしいローリイと、けんかして「#「けんかして」は底本では「けんかしてして」しまいました。ベスは、あそんでばかりいないで、いつもの習慣で家事のお手つだいをするので、わりにいいほうでしたが、それでも、家のなかの気分にかきまわされて、いらいらしてしまい、人形をしっかりとばしたりしました。エミイは、ひとりであそぶことが、むずかしいことがわかりました。一日中、絵をかいてもいられませんし、人形あそびはきら

いでしたし、すっかり心のつかれをおぼえました。

金曜日の晩になると、だれもあそびにあきたとはい
いませんでしたが、もう一日で一週間がおわるので、
うれしく思いました。おかあさんのほうでも、ほうれ
ごらんと、ちゃんと見てとつて、この教訓をいつそう
印象づけたいと思つて、わざとハンナに土曜日一日、
休みをあたえました。

土曜日の朝、みんなが起きてみると、台所には火の
気はなく、食堂には朝御飯はなし、おかあさんもハン
ナもいません。

「あら、どうしたつていうんでしょう！」

ジヨウがさげんだとき、メグはもう二階へかけあがっていき、まもなく、ほっとして、けれど、すこしはおかしそうな顔をしておりて来ました。

「おかあさんは、御病気ではないけど、おつかれですよ。今日一日は、みんな大好きなようになさって。」

「そう。いいじゃないの、おもしろいわ、あたしにかけたくて、うずうずしてたんですもの。」と、ジヨウがいました。

まったく、今、四人はすこし仕事をしたくなりまして。メグがコック長となつてさつそく食事の仕度をは

じまり、みんなおもしろがってやりました。おかあさんは、じぶんのはかまわないでいいましたが、おかあさんの食事は用意され、ジョウが二階へはこびました。わかしすぎた紅茶はにがく、オムレツはこげ、ビスケットは重曹でかたまつて、ぶつぶつしていましたが、おかあさんは、感謝して受け、ジョウが去ってしまうと、おかしくてたまらなくて、ひとりで笑ってしまいました。

「かわいそうに、みんなこまっているでしょう。でも、そうつらいとも思っていないだろうし、後のためにもなることだから。」と、つぶやいて、おかあさんはじぶ

んで用意しておいたもつとおいしい食物をとり出し、運ばれた食事はわからないようにしまつして、食べたことにしておいたので、みんなはうれしがりました。これはおかあさんらしい、ちよつとしたうそでした。

ところで、階下ではいろんな不平が起りました。食事の失敗に、コック長はひどくやしがりました。ジヨウは、

「いいわ。お昼の食事は、あたしが女中になって用意するわ。ねえさんはおくさんになって、お客さまの相手をしてちようだい。」と、いって、ローリイをよぶことを提案しました。

これは、賛成されました。そこで、ジヨウは、さつそくローリイに招待状を書いて郵便局へ出しておきました。けれど、ジヨウのうで前は、すこしあぶないようでした。メグが心配すると、

「だいじょうぶ、コンビーフも、じゃがいももある。つけ合せに、アスパラガスとえびを買ってくるわ。それから、ちさでサラダをつくりましょう。つくりかたの本を見ればいいわ。デザートは、白ジェリイといちご、もつとぜいたくすれば、コーヒーも出すのよ。」

「ジヨウ、あなたは。しょうがパンとキャンディだけしかつくれないじゃないの。あたしこの御馳走には関

係しないわよ。だって、あなたが勝手にローリイをよ
んだんだから。」

「おねえさんは、ローリイを、そらさないようにして
下さればいいわ。でもこまったら、なんでも教えて下
さるでしょうねえ？」と、ジョウはむつとしました。

「ええ、でもあたしいろんなこと知らないわ。おかあ
さんに、尋ねてからにするほうがいいわ。」

ジョウは、じぶんのうでをうたがうようなことをい
われたので、ぷりぷり怒って部屋を出て、おかあさん
へ相談にいきました。

「好きなようになさい。おかあさんのじやまをしない

でね。あたしは食事は外でします。家のことなどか
まっけていられません。今日はお休みです。本を読んだ
り、手紙を書いたり、お友だちをたずねたりして過し
ます。」

いつもいそがしいおかあさんが、今日は朝からゆれ
イスにかけて本を読んでいるふしぎなありさまと、け
んもほろろな、その言葉に、ジョウは、

「へんだわ。おかしいわ。」と、ひとり言をいいながら
階段をおりて来ると、ベスの泣き声が聞えました。
いってみると、鳥かごのなかでカナリヤが死んでいま
した。

「みんな、あたしのせいよ。えさも水もちつともないわ。」と、ベスはこわばって、つめたくなつたカナリヤを手の上に乗せて、かいほうしましたが、もうだめでした。

「お墓へいれてやるわ。もうあたし小鳥なんかかわない。」

ベスは、すっかり気を落していました。

「おとむらいは、お昼からにして、みんなでおまいりしましょう。さ、もう泣かないで、箱のなかへねかせておやり。」と、ジョウはいつて、台所へはいりました
が、台所は手のつけられないほど混乱しストーヴは火

が消えていました。ジヨウは火を起し、お湯がわくま
でに市場に買い出しにいくことにしました。えびとア
スパラガスと、いちごを二箱買って来ると、火は起き
ていました。ジヨウはまず台所を片づけましたが、ハ
ンナがパンをやくように鍋にしかけたままにしてあつ
たのを、メグがこねなおして、ストーブにのせたまま、
客までサリー・「#」は底本では「欠落」ガーデナアの
お相手をしていました。

ジヨウ「#」ジヨウ」は底本では「メグ」は、そこへと
びこんでいって、

「ね、パンがお鍋のなかでころがるようになったら、

ふくらんだのじゃない？」

サリイは笑い出しましたが、メグはただうなずいただけでした。ジョウは、すぐにひきかえし、すっぱいパンをそのまま、かまにいれました。

そのとき、おかあさんは、どんなぐあいによっているか、あちこちのぞきまわり、あわれなカナリヤを箱にに入れて、着せてやる服をぬっているバスに、なぐさめの言葉をかけると、外へ出かけてしまいました。娘たちは、なんだかもの足りない気がしました。

そこへ、クロッカーがやって来ました。この人は、やせて黄色い顔をしたオールドミスで、いろいろとあ

たりをながめまわし、お昼の食事をごちそうになりた
いといいました。娘たちは、この人がきらいでしたが、
年よりで貧乏で友だちもないから、親切にしてあげる
ようにいわれていました。その人は、いろいろなこと
を尋ねたり、やたらに批評したり、知人のうわさ話を
したりしました。

その朝のジョウの苦しい骨折は、たいへんなもので
ありました。ジョウの骨折は、すべて失敗におわり、
アスパラガスは、一時間もにてまだかたく、パンは黒
くこげ、サラダのかけじるは食べられるしろものでは
「#「しろものでは」は底本では「しろものでほ」なく、え

びには手こずり、じゃがいもはなまにえ、白ジエリイはぶつぶつだらけでした。

「まあ、いいわ。ビーフとパンにバターをつけて食べてもらえばいいわ。だけど、朝のうちまるで、むだになつたのがくやしい。」

ジョウは、いつもより三十分おくらせて食事のベルを鳴らしましたが、いつもりっぱな料理を食べつけているローリイと、失敗をほじくり出すような好奇の眼と、それをしゃべり散らす舌をもつクロツカーの前にならんだ料理をながめて、ジョウは顔がほてり、すっかりしよげてつつ立つていました。

ああ、料理はちよつと味をみただけで、のこされて
いきます。エミイはくつくつ笑い、メグはこまった顔
をし、オールド・ミス・クロツカーは口をつぼめるし、
ローリイは景気づけようとして大いにしゃべりました。
ジヨウの最後の頼みはいちごでした。ガラスの皿に赤
いいちごをもり、おいしそうなクリームがかかってい
ます。だが、それを食べた「#「食べた」は底本では「食
べた・」クロッカーは、しかめ面して「#「して」は底
本では「しで」あわてて水を飲みました。ローリイは
口をゆがめながらも男らしく食べてしまいました。エ
ミイは、むせかえり、ナプキンで口をおさえて、あた

ふたと食卓からはなれていきました。ジヨウはふるえながら、

「まあ、どうしたの？」と、さげびました。

「お砂糖のかわりに塩をいれたんだわ。クリームすっぱいわ。」と、メグが答えました。

ジヨウは、うめき声をたてて、イスにたおれかかりました。ところが、がまんをしようとしても、おかしくてたまらないというような、ローリーの顔につきあたると、ジヨウはきゆうにこの事件がいかにもこっけいに思われ、涙のこぼれるほど笑い出しました。すると、ぶつくさ屋のクロツカーもいっしょに、みんな笑

い出し、不幸な宴会は、ともかく陽気におわりました。「あたし、もう片づける元氣ないわ。だから、おとむらいをして、すこしおちつきましよう。」

ジョウは、みんなが食卓をはなれたときにいいました。クロツカーは帰っていきました。きつとこの料理のことを、しゃべりたかったからでしょう。みんなはベスのために、やっとおちつきました。ローリイは、木立のなかの、しだの下にお墓をほり、カナリヤはやさしいベスの手で、涙とともにうめられ、こけでおおわれ、すみれとはこべの花輪が、墓石の上にかざられました。墓石には、ジョウが、食事の仕度をしながら

つくった詩が書かれていました。

おとむらいがすむと、ベスは悲しみと、さっきのえびとで、胸がいつぱいになり、じぶんの部屋へひっこみました。ベッドがそのままになっていて、ねる場所もありませんでした。片づいているうちに、悲しみもやわらいで来たので、台所で片づけものをして、ジョウの手つだいをしました。二人はへとへとにつかれました。ローリイは、エミイを馬車にのせてつれ出しました。すっぱいクリームで気持がわるくなっていたエミイは、大よろこびでした。

やがて、おかあさん「#「おかあさん」は底本では「お

かさん」が帰宅しました。三人の娘たちがはたらいて
いましたし、戸だなをちよつとのぞいてみて、経験の
一部が成功したことがわかりました。

ところが、やつと片づけたのに、三人は休むことも
できませんでした。と、いうのは、数人の来客があり、
それお茶、それお使いというわけでした。けれど、露
とともにたそがれがせまるころ、姉妹たちは六月のば
らが美しく咲きはじめたポーチに集りました。

「なんていやな日だったでしょう。今日は。」

ジョウが口をきると、メグが、

「いつもより短いような気はしたけど、とてもいや

だったわ。」

「ちつとも家みたいじゃないわ。」と、エミイ。

「おかあさんと、カナリヤがいなければ、家のような気がしないわ。」とベスは、涙ぐんで、からの鳥かごを見あげました。

「みなさん、かあさんは帰って来ましたよ、ベス、カナリヤがほしければ、明日買ってあげましょうね。」と、いいながら、おかあさんも娘たちの仲間入りをしました。おかあさんも、一日のお休みが、あまりたのしもうではありませんでした。

「みなさん、あなたたちの経験は、もうたくさんです

か！」

「あたし、もうたくさん。」と、ジヨウ、ほかの三人も、声をそろえて、

「あたしも！」

「おかあさんは、みなさんが、どんなふうにするかと思つて、わざとなにもかもほうつて、出かけました。けれど、今日の経験で、みなさんは、家をたのしくするには、めいめいが、受持の仕事を忠実にやらなければならぬということがわかつたと思います。ハンナとあたしが、みんなの仕事をしたいれば、あなたがた「#あなたがた」は底本では「おなたがた」は、そう幸福で

気らくだったとは思いませんが、とどこおりなくやっていけたのです。だから、かあさんは、だれもかれも、じぶんのことばかり思ったら、どんなことになるか、教訓としてみんなに見せておきたかったのです。あなたがたが、たがいに助け合い、まい日のお仕事があれば、ひまになったとき、それがとてもたのしく思えるし、くるしいときにはたがいに、しんぼうし合つていけば、家はどんなにたのしく美しいでしょう。わかりましたか？」

「わかりました。よくわかりました。」
娘たちは、口々にさげびました。

「では、かあさんのいうことを聞いて、もう一度、小さい重荷をしようのですよ。たまには重く思えても、みんなのためになり、なればかるくなつていきます。はたらくことは健康にもよく、たいくつはしないし、わるい心も起らないものです。身体にも心にもよく、お金や流行ものなどより、精神力や独立心をあたえてくれます。」

みんなは、はたらくことにきめました。よろこんで。ジヨウは、お料理をけいこする、メグは、おかあさんにかわつて、おとうさんへ送るシャツをぬう、ベスはピアノやお人形あそびにあまり時間をとれないで、ま

い日勉強する、「#「」」は底本では欠落」エミイは、ボタンのあなかがりがじょうずになるように、また文法にかなう言葉づかいのけいこをすると、てんでに決心をのべました。

「けっこうです。かあさんは、今度の経験がうまくいって、よかったと思います。もうくりかえさなくてもいいと思います。でもね。どれいのように、はたらかすぎないように、はたらくにもあそびにも、時間をきめて「#「きめて」」は底本では「きめで」、まい日を有益にたのしく送って、時間をじょうずに使い、時間のねうちをさとするようになさい。それできたら、貧乏で

も、娘時代をたのしくすごせるし、年をとってからも後悔することもなく、この人生をりっぱに生きていくのです。」

「よくわかりました。」と、娘たちは、おかあさんの教訓を、ふかくも心にとどめました。

第十二 ローレンスのキャンプ

ベスは郵便局長でした。たいてい家において、時間を

きめて局へいくことができましたし、「#」「」は底本では「。」かぎで小さな扉を開けて、郵便物をとつて来て、くぼるのがすきだったからです。七月のある日のこと、バスはりよう手にいつぱい郵便物をかかえて帰り、家中にくばりました。

「おかあさん、はい、花束、ローリイは一度も忘れたことないのねえ。」と、いって、バスはおかあさんの花瓶にさしました。

「メグねえさんには、手紙が一本、手ぶくろが片っぱ。」
メグは、おかあさんのそばにすわって、シャツのそで口をぬっていました。

「あら、りようほう忘れて来たのに。お庭に落して来やしない？」「#「しない？」は底本では「しないい？」」

「いいえ、郵便局に片つぽしかなかったわ。」

「片つぽなんていやだわ。でもそのうちに片つぽ見つかるでしょう。あたしのお手紙は、ドイツの歌の訳したのがはいつているだけ、きつとブルツク先生がなさった」「#「なきった」は底本では「なかつた」のね。」

「ジョウ博士には、手紙が二通、本が一冊、おかしな古帽子、帽子は大きくて、郵便局からはみ出していました。」

ベスは、書齋でなにか書きものしているジョウに、

笑いながらいいました。

「まあ、いやなローリーさん、あたし日にやけるから大きな帽子がはやるといいといったら、流行なんか気にしないで、大きな帽子かぶりなさいっていうから、あればかぶるといったの。いいわ。あたしかぶって、流行なんか気にしないこと見せてあげよう。」

その帽子をそばの胸像にひっかけて、手紙を読みはじめました。それはおかあさんからの手紙で、ジョウの目はよろこびにかがやきました。

「愛するジョウ——あなたが、かんしやくをおさえようと努めているのを見て、「#」「」は底本では「。」かあ

さんはたいへんうれしく思っています。あなたはその
試み、失敗、成功についてなにもいわないし、日々あ
なたを助けて下さる神さまのほかには、だれも見えてい
ないと考えておいででしょう。けれど、かあさんもの
こらず見ていました。そして、りっぱな実がむすびそ
うですから、あなたの決心が真心からであることがわ
かります。愛する娘よ、しんぼう強く勇ましくやり通
して下さい。かあさんが、あなたに同情をよせている
ことを、常に信じて下さい。」

「まあ、うれしい。百万円もらって山ほど賞讃される
よりうれしい。かあさんが助けて下さるんですもの、

あたしやります。」

ジョウは、顔をふせたので、うれし涙で原稿をぬらしてしまいました。やっと顔をあげたジョウはこのあたりがたい手紙を、ふいにおそつて来る敵へのふせぎの楯にするつもりで、上衣の内がわにピンでとめました。

もう一つの手紙はローリーからでした。

「やあ、親愛なるジョウさん、明日、イギリス人の男の子と女の子が二三人来るから、おもしろくあそびたいのです。天気がよかったら、ロングメドウへボートでいってテントを張り、べんとうを食べてからクロツケーをし遊ぼうというわけ。焚火をし料理をつくり、

ジプシイみたいにやるつもり、みんないい人たちで、そういうことが好き、ブルック先生もいっしょで、男の子のかんとくをして下さるし、ケイト・ボガンさんが女の子をとりしまって下さいます。みんなぜひ来て下さい。食料の心配は無用、すべてぼくのほうで用意します。右とりいそぎ、あなたの永久の友ローリイ。」

「すてきだわ!」と、ジョウはさげんで、メグに知らせるためにいそぎました。

「ね、かあさん、いつてもいいでしょう。いけばローリイも助かるわ。あたしボートこげるし、メグはおべんとうの世話ができるし、エミイやバスだってなにか

役にたつわ。」

「ボガンの人たち、大人くさくなければいいのね。あの人たちのこと知ってる？」と、メグがいました。

「兄妹四人ということしか知らないわ。ケイトはあなたより年上、ふた児のフレッドとフランクはあたしぐらい、グレースは九つか十でしょう。ローリイは、その人たちと外国で知り合ったんだって。兄妹のうち男の子が好きらしいのよ。でもローリイは、ケイトをあまり好きでないらしいわ。」

メグとジョウは、着ていく服について話し合いました。キャンプだから、しわくちやになってもかまわな

いものにすることにきまりました。ジョウは、

「さあ、精出して、今日中に、二倍の仕事をしておき
ましょう。明日、安心して遊べるように」といって、
ほうきをとりにいきました「#「いきました」は底本では
「いききました」」。

つぎの日、いい天気を約束しに、お日さまが娘たち
の部屋をのぞいたとき、そこでは、娘たちがたのしい
遠足の仕度をしていました。バスは、さっさと仕度を
すまして、窓ぎわへいって、おとなりのようすを、た
えず知らせました。

「あ、おべんとうをつめている。あら、ローリイが、

まるで水兵さんみたいなかこうをして……」

やがて、みんなの仕度ができました。ジヨウは、ローリイがじょうだん半分でよこした旧式の麦わら帽子をかぶり、あかいリボンをしぼりました。それを見て、メグがやめなさいというと、ジヨウは

「あたし、だんぜんかぶっていくの。だって、かなくて大きくて日よけになるし、みんなおもしろがるわよ。」と、いって、平気を出ていきました。それにつづいて、はなやかな三人の娘たち「#「娘たち」は底本では「娘だち」の小隊がいました。

ローリイは、かけて来て小隊をむかえ、じぶんの友

だちに紹介しました。芝生が応接間になり、そこに陽気な光景がひろげられました。すぐにみんなは心やすくなり、えんりよなく話し合いました。

テントやおべんとうは、クロツケーの道具などといっしょに、さきへ運んでありましたので、一行は二隻のボートにのりこんで岸をはなれました。ローレンス氏は、岸に立つて帽子をふっていました。ローリイとジョウが一隻のボートをこぎ、ブルック先生と大学生のネットドが、もう一隻のほうをこぎました。ジョウのおかしな帽子は、みんなを笑わせて気分をやわらげ、ボートをこぐと、つばがばたばたしてすずしい風が起

りましたし、ジヨウにいわせれば、もし夕立でもふれば、みんなをいれてあげることができそうでした。

メグは、もう一隻のボートにのつていましたが、ブルック先生とネッドにとって、よろこばしい存在で、この二人の青年は、メグがいるので、いつもよりいっそうじょうずにボートをこぎました。

ロングメドウについたとき、もうテントがはられ、クロツケーをするための、鉄輪がとりつけてありました。そこは、気持のよい緑の野原で、まんなかに、三本の檜の樹が、広く枝をはり、クロツケーをする芝生は、きれいに刈りこまれていました。

「キャンプ・ローレンスばんざい！」

みんなが、よろこびの「#「よろこびの」は底本では「よろこび」声とともに上陸すると、ローリイがいました。

「ブルツク先生が司令官で、ぼくが兵站総監、ほかのみんなは参謀です。それから、女のかたはお客さま、テントはみなさんのために、とくに張ったもので、櫛の樹のところは客間、ここが食堂、そちらが台所です。あまり暑くならないうちに、ゲームをやつて、それから、ごちそうの支度をしましょう。」

フランク、ベス、エミイ、それからグレースは芝生

に腰をおろし、ほかの八人がクロツケーをはじめました。ブルック先生はメグとケイトとフレッドと組み、ローリイは、サリー、ジョウ、ネッドと組みました。みんな張りきって、ものすごく戦い、しばらくは、どちらが勝つか敗けるわかりませんでした。そのうちに、フレッドが、だれも近くにいなかったたので、じぶんの打ちいいように、ボールを靴のさきでころがしました。そして、

「ぼくはいったよ。さあ、ジョウ、あなたを敗かして、ぼくが一ばんだ。」と、いいました。

ジョウは、ずるいフレッドにむかって、やり返しま

した。そして、しばらく戦いましたが、とうとう勝つことができました。

ローリイは、帽子をほおりあげましたが、お客の敗けたのをよろこんではいけないと気がつき、小声になつてジヨウにいいました。

「きみ、えらかつたぞ。あいつインチキやった。ぼく見た。みんなの前でいつてやることできないが、二度とやらないだろう。」

メグも、髪をなおすふりをしてジヨウをひきよせ、さも感心したというような顔で、

「ほんとに、しゃくだったわ。でも、よくこらえたわ。

あたし、うれしかった。」

「ほめないですよ。メグ。今だってあいつの横つ面はりとぼしたいくらいよ。もうすこしであるとき、かんしやく玉がはれつしそうだったわ。」と、ジヨウは、フレッドをにらみつけました。

時計を出して、ブルック先生がいました。

「さあ、おべんとうにしましょう。兵站総監、きみは火を起させたり、水をくませたりして下さい。マーチさんとサリーさんとぼくとで食卓の支度をするから、たれかコーヒーをじょうずにいれる人はいませんか？」

「ジョウがじょうずです。」と、メグはよろこんで妹をすいせんしました。

ジョウは、このごろ、料理のけいこをしたので、こんな名譽な役をひきうけられるのだと思ひながら、支度にかかりました。そのあいだに、少年たちは火を起し、近くの泉から水をくんで来ました。司令官とその部下は、すぐにテーブルかけをひろげ、食べものや飲みものをならべ、みどりの葉でかざりました。コーヒーの用意ができると、みんな席につきました。食慾はさかんでしたし、まことにたのしく、しばしば起る大きな笑い声は、近くで草を食べているおとなしい馬

をおどろかせました。

食事がすむと、すずしくなるまで、なにか遊びをしようということになり、檜の樹のかけ、すなわち客間へ席をうつしました。

ケイトが、尻とり話をしようといいました。

「いいですか、たれかが、勝手なお話をはじめのよ。そして、好きなだけつづけて、おもしろそうところで、ぷつつときつてしまうのよ。すると、つぎの人がそれをつづけ、じゆんに話していくと悲しいのやおかしいのや、ごっちゃになっておもしろいわ。さ、では、どうぞあなたから。」と、ケイトが命令するような調子

でいったので、ブルツク先生がはじめました。

「むかし、ある一人の騎士が立身出世しようと思って旅に出ました……」

ブルツク先生は、ゆたかな想像で話しました。この騎士は二十八年も旅をつづけ、ある王宮へいきますと、王さまはまだならしていない馬を、うまくしこんだ者に、ほうびを与えると申されました。そこで、騎士はその馬をしこむために、まい日、のりまわししていると、お城に美しいおひめさまが、魔法のためにとじこめられ、自由になるお金をつくるために、糸をつむいでいることを知りました。騎士は、貧乏なので、お

金はなし、しかたがないので、お城の扉をたたくと：
：と後の待たれるように話をきりました。

それをつづけたのは、ケイト、ネットド、メグ、ジョウ、フレッド、サリー、エミイ、ローリー、フランクというじゆんでしたが、話のすじは、じつに変化していき、おほりに落ちたり、墓場のようなろうかを歩いていたり、そこで見つけたかぎ煙草をかいだら首がおちたり、そうかと思うと、たちまち生きかえったり、箱の中でダンスしたら、それが軍艦にかわったり、聞いている者も、ときには笑い出し、ときには眉をしかめ、はてしもなく変化していく話をおもしろく思いま

した。

話がすむと、サリーがいました。

「ずいぶん、へんな話でしたね。だけど、練習すれば、もっといいのができそうね。それじゃ、今後はツルースっていうあそびごぞんじ？」

「どんなの？」

「そうね、みんなで手をかさねておいて、かずをきめて、じゅんじゅんに手をのけていって、そのかずにあった人が、ほかの人の質問になんでも正直に答えるの。それやおもしろいわ。」

「やってみましょう。」と、新しいことの好きなジヨウ

がいました。そして、みんなで手をかさね、じゅんじゅんにのいていくと、ローリイがあたりました。

「だれ、あなたの尊敬する英雄は？」と、ジョウが尋ねました。

「おじいさんと、ナポレオン。」

「一ばん美しいと思う女の人は？」と、フレッド。

「もちろん、ジョウ。」

ローリイの、あたり前さというような顔つきに、みんなどつと笑ったので、ジョウは、

「ずいぶん、ばかげた質問ね。」と、けいべつするように肩をすぼめました。

「さ、もう一度やろう。おもしろいね。」と、フレッド
がいました。今度はジヨウのぼんでした。

「あなたの一ばん「#「二ばん」は底本では「一がん」大
きい欠点は？」と、フレッドが尋ねました。

「かんしゃく。」

「一ばんほしいものは？」と、ローリイがいました
が、ほしいものをいえば、ローリイがくれそうなので、
わざと、

「靴のひも」と、答えました。

「そんなのだめ、ほんとのこといわなくちゃ。」と、ロー
リイ。

「天才、あなたは、あたしに天才をくれないと思わない？」と、ジヨウはいつて笑いました。

「男の美点のなかで、なにが一ばんだいじ？」

「勇気と正直」

すると、フレツドが、

「今度はぼくのぼんだ。」と、いいました。

ローリイが、あれをいつておやりと、ささやいたので、ジヨウはすぐにきり出しました。

「クロツケーでインチキやらなかった？」

「うん、ちよつと。」

「よろしい、きみのさっきの尻とり話、海のライオン

という本からとらなかつた？」と、ローリイ。

「いくらかね。」

「イギリス国民は、あらゆる点で完全だと思いますか？」
と、サリー。

「そう思わなかつたら、イギリス人の自分は、はずかしいですよ。」

「それでこそほんとのイギリス人だ。さあ、今度はサリーのぼんだ。」

「あなたは、じぶんをおてんば娘だと思いませんか？」
と、ローリイ。

「ひどいわ。そんな女じゃないわ。」

「なにが一ばんきらい？」と、フレッド。

「くもと、ライス・プディング。」

「一ばん好きなのは？」と、ジョウ。

「ダンスとフランスの手ぶくろ。」

そのとき、ジョウが、頭をふって、

「つまらない遊びね。それより作家トランプを、おもしらくやらない？」

ネットとフランクと小さい女の子がくわわって遊んでいるあいだ、「#」「」は底本では「」年上の三人はそこからはなれて腰をおろして話しました。ケイトは、ふたたび写生帳をとり出してかき、メグはそれをなが

めブルック先生は草の上からねころんでいました。メグは、ケイトのかくのを見て、おどろきの声で、

「なんておじょうずなんでしょう！ あたしもあんなにかいてみたいわ。」と、いいました。

「どうして、おけいこなさらないの？ あなたは絵の天分がおありですわ。」

それから、家庭教師のことになり、ケイトは家庭教師について習ったから、あなたも家庭教師に習うといいといいました。メグは家庭教師につくどころか、じぶんは家庭教師として教えにいつているといいますと、ケイトは、

「まあ、そんなんですの。」と、いいましたが、そのいかたは、おやおや、いやなことだと、いうような調子でした。ブルック先生は、とりなすように、

「アメリカのおじょうさんがたは、先祖がそうであつたように、独立し自活することがたつとばれるのです。」と、いいました。

ケイトは、眉をひそめて、去つていきましたが、それを見送りながらメグはいいました。

「あたし、イギリス人が、女の家庭教師をけいべつすることを忘れていました。」

ブルック先生は、むしろ満足そうに、

「あちらでは、男の家庭教師だつてよくいいません。なさないことですがね、なんといつても、われわれはたらく者には、アメリカほどこいところはありません。」と、いったので、メグはじぶんのことを嘆いたのを、むしろはずかしくなりました。

「ええ、あたしアメリカに生れたのをうれしく思いますわ。そのために、たくさんのよろこびを得ているのですから。ただ、あたし、あなたのように教えることが好きになれたら、どんなにいいでしょう。」

「ローリーがあなたの生徒だったら、あなたも教えるのがたのしくなります。来年ローリーと別れなければ

ならないので、ざんねんですよ。」

「大学へいらっしやるのでしょうか？」

「そうです。準備はだいたいできています。ローリーがいけば、ぼくは軍隊にはいりません。」

「まあ、すてき！ わかい男のかたは、兵隊にいきたがるのはほんとですね。お家にのこるおかあさんや、姉妹たちはつらいでしょうが。」

「ぼくは一人ぼっちです。友だちもすくないし、ぼくが死のうが生きようが、たれも心配する者はいません。」

「ローリーやおじいさんが心配なさいますわ。それに、

あたしたちだって、あなたがおかげでもなされば、悲
しみますわ。」

「ありがとうございます。そう聞いてうれしく思いますよ。」と、
ブルック先生は、また快活になつて話しつづけました
が、ネツドが馬にのつて来たので、しずかに話し合う
ことはできませんでした。

たった一つ、メグやジョウのおどろいたことがあり
ました。それは、ベスが、人をよろこばせたいという
一心から、足のわるいフランクに話を聞かせてやって
いる光景でした。それは、また、フランクのいもうと
にとつても、びっくりするようなことで、いもうとの

グレースは、

「フランクにいさんが、あんなに笑っているの知らないわ。」と、いいました。

日ぐれ近くまで、また、いろいろのあそびをしました。帰り支度は、みんなでやり、テントをたたみ、クロッケーの鉄輪をぬき、一行はボートにのりこみ、声はりあげてうたいながら、川を下つていきました。

ネッドは、センチメンタルになって、

ひとり、ひとり、ああ、ただ、ひとり。

われら、いまだ年わか

みなあたたかき心もつに

なぜにつめたくはなれいく。

と、いうところで、わざとあわれっぽい表情をして、メグをながめましたので、メグは笑い出してしまい、その歌をめちやめちやにしてしまいました。

「あなたは、どうしてぼくにつらくあたるんです？ 今日一日、あなたはあのかたくるしいイギリス人ばかりくつついていて、今度はぼくを鼻であしらうんですね。」

「そんなつもりじゃなくってよ。あんまりおかしな顔をなさるので、つい。」

ネットドは怒って、サリーの同意を得ようとして、

「あの人、すこしも情味のない人ね。」

「ちつとも。だけど、かわいい人。」

サリイは、友だちの短所をみとめながらもかばいました。

「とにかく、あの方は手おい鹿ではないね。」

ネットドは、しゃれたつもりでしたが、たいしたしゃれとはいえませんでした。

朝、集合したローレンス家の芝生で、みんなは、たがい、あいさつして別れをおしめました。というのは、ボガン家の人たちは、カナダへ帰っていくからでした。四人の姉妹は、庭を歩いて家へ帰りましたが、

そのうしろすがたをながめていたケイトは、今度はかばうような調子などをまじえずにいいました。

「アメリカの娘さんたちは、ずいぶん露骨なところはあるけれど、よく知つてみると、とてもいい人たちねえ。」

すると、ブルック先生がいました。

「ぼくも同感ですね。」

第十三 美しい空中楼阁

「#第十三 美しい空中楼阁」は底本では「十三 美しい

空中樓閣」

九月のあるあたたかい日の午後、ローリイは、マーチ家の連中が、なにをしているだろうと考えながらも、わざわざ見に出かけていくのもおつくうなので、ただハンモックにゆられていました。

かれは、ふきげんでした。その日は、することがうまくいかず、あたたかいので身体はだるく、勉強をすっぽかしてブルック先生をいやがらせ、お昼からピアノをひきつづけて、おじいさんの気持をそこね、家の犬が一匹、気がくるったといって女中をおどかし、馬に

ひどくしたといつて馬丁とけんかし、世のなかはおもしろくないやと、ぶんぶん怒つて、ハンモックにとびこんだのです。

けれど、美しくのどかなので、かれの気持はやすま
り、世界一周の航海をしているような空想にふけつて
いると、人声がして空想はやぶれました。見るとマー
チ家の姉妹たちが出かけていくところでした。けれど、
いつもとようすがちがって、めいめい大きなつばの帽
子をかぶり、肩に茶色のふくろをかけて長いつえをつ
き、メグはクッション、ジョウは本、ベスはひしやく、
エミイは紙ばさみを、それぞれ持っていました。一行

は、しずかに庭をぬけ、うら木戸を出て、家と川のあいだにある丘をのぼりはじめました。

「ひどいなあ。ぼくを誘わないでピクニックにいくなんて。かぎをもっていないから、ボートにのれまい。よし、持つていってやろう。そして、なにをするのか見て来よう。」

ローリイは、どの帽子をかぶろうかとまよい、かぎをさんざんさがし、かぎがポケットにはいつているのに気がつくと、さっそく後を追いましたが、少女たちのすがたはなく、ボート小屋へいきましたが、だれも来ないので、上へのぼっていきました。すると、松の

木立のかげから、風の音よりも、こおろぎの歌よりも、もつとほがらかな声が聞えて来ました。

「すてきだ！」と、ローリイは、目がさめたような思いでした。

姉妹たちは、木かげにすわり、太陽の光と木の影が、その上にゆれていました。メグはぬいものをしていましたが、ピンクのドレスがばらのようにあざやかでした。ベスは、松ぼっくりをよりわけていました。エミイは、一むらのしだを写生していました。そして、ジョウは、大きな声で本を読みながら、あみものをしていました。この光景が、ローリイの心をとらえました。

ローリイは、そばへいきたいが、誘われたのでもなし、家へ帰るべきだが、家はたまらなくさびしく、それで立ち去りかねていると、リスがかれのすがたにおどろいて、するどい声を出しました。その声に、ベスが顔をあげると、ローリイのさびしそうな顔があつたので、安心させるように、にっこり笑って手まねきました。

「ぼく、いつでも、いいですか？」

メグは、眉をつりあげて、いけないといょうすをしましたが、ジヨウはメグに顔をしかめて、

「だいじょうぶよ、いらっしやい。お誘いしようと思つたけど、こんな女の遊びなんか、つまらないと思つ

たのよ。」

「あなたたちの遊びなら好きです。でもメグがいやなら、ぼく帰ります。」

「いやじゃありませんわ。そのかわり、ここでは怠けてはいけないという規則だから、あなたもなにかしなればいけませんよ。」

「どうもありがとう。なんでもします。だって家は、さばくみたいに退屈です。」

ローリイは、うれしそうでした。

「それでは、あたしが、かかとをあんでいるあいだに、この本を読んでしまつてね。」

ジョウが本をわたすと、ローリイは、はいと、うやうやしく答えて「はたらきばち会」に入会させてくれた好意に感謝して、熱心に読みはじめました。その物語はあまり長くはなく、ローリイは読みおわると、労にむくいてもらう「#「もらう」は底本では「もろう」」ために、二三の質問を出しました。

「ちよつとうかがいますが、この有益な会は、新らしくできたんですか？」

姉妹たちは顔を見合せました。秘密にしておくべきか、それともうち明けるべきか？ ローリイにならいつてもいいと、みんなは考えました。ジョウは、につ

こり笑っていいました。

「あたしたち、巡礼あそび」#「あそび」は底本では「あそび」を、冬から夏までつづけて来たの。そして、この休暇には、怠けないようにと思って、めいめい仕事をこしらえて精いっぱいやりました。休暇はもうじきおわりますが、仕事はみんなできて、よろこんでいますの。ところで、おかあさんは、あたしたちを、外へ出したがっていらっしやるので、この丘へ仕事を持って来て、おもしろくやっているの。」

ローリイは、うなずいていいました。

「ああ、それで、ふくろをしょい、杖をつき、古い帽

子をかぶるんですね。」

「あたしたちは、この丘のことを、よろこびの山といっています。ずっと、むこうまで見わたせるし、「#」「」は底本では欠落」あたしたちが、いつかは住んでみたいと思う国も見えるからです。」

ジョウが、ゆびさしたので、ローリイは立ちあがってながめました。あおい川、ひろびろとした草地、そのむこうのみどりの山々、その峰にたなびく金と紫の雲、まことに、天の都を思わせるものがありました。

「なんてうつくしいんだろう！」と、ローリイは、美しさをす早く見つけました。

「あのうつくしい景色のところか、あたしたちのほんとの国で、みんなでそこへいけたら、うれしいと思うわ。」と、ベスがいますと、メグは、やさしい声で、「あれよか、もつとうつくしい国があるのよ。あたしたちが、りっぱな人になったら、そこへいけるのよ。」と、いいました。

「ベスなんか、いつかいけるでしょうが、あたしなんか、戦ったりはたらいたり、のぼったりすべったりで、いかれそうにもないわ。」

ジョウがいうと、ローリイも、

「ぼく、ベスの道づれになりますよ。でも、ぼくがそ

の旅におくれたら、やさしい言葉をかけてくれるでしょうね？」

ベスは、なんと返事してよいかこまったようでしたが、快活にいいました。

「だれだって、ほんとはいきたい気持で、一生、努力の旅をつづけたら天の都へいけると思うわ。」

しばらく沈黙がつづいた後、ジョウがいました。

「あたしたちの勝手に考える空中楼阁がみんなほんとのものになって、そこに住むことができれば、どんなにおもしろいでしょう。」

「ぼくは見たいだけ世界を見物してから、ドイツにお

ちついて、好きなだけ音楽を勉強して、有名な音楽家になるんです。けれど、ぼくはお金だとか、商売とかすこしも気かけずに、じぶんの好きなように暮すんです。これがぼくの気についている空中楼阁です。」

ローリーがそういうと、メグがつぎをつづけました。

「あたしは、いろいろぜいたくなものが、たくさんあるうつくしい家がいいわ。おいしい食べもの、きれいな服、りっぱな道具、感じのいい人たち、そして、お金は山ほどあるの。あたしその家のおくさんで、召使をたくさん使って。でも怠けたりしないで、いいことをして、みんなからかわいがられたい。」

ジヨウは、ずばりと、

「おねえさんは、なぜひこうでやさしい夫と、天使のような子供がいてと、おっしやらないの。それがなかったら、おねえさんの空中楼阁はできないわ。」と、いいました。

「あなたの空中楼阁には、馬とインクつぼと小説しかはいつていないんでしょう？」と、メグはすこしむっとしていいかえました。

「いいじゃないの。アラビア馬のいっぱいはいった馬屋と、本をつみあげた部屋と、魔法のインクつぼがあれば、あたしは、そのインクつぼで、ローリーの音楽

とおなじくらい、有名な作品を書くんだわ。だけど、あたしその空中楼阁へはいる前に、なにかすばらしい英雄的なこと、そうね、あたしが死んでも人から忘れられないようなこと、やってみたいわねえ。そうだ、あたし本を書いてお金持になり有名になれたらいいわ。それがあたしに似合っているの。それ、あたしの大好きな空想よ。」

「あたしのは、無事におとうさんやおかあさんといっしょに家で暮して、家の人たちの世話をしてあげることですわ。」と、ベスがいうと、ローリーが尋ねました。「ほかには、なにか望みはないの？」

「あのかわいいピアノをいただいたから、ほかになんにも望みはありません。」

すると、エミイがいました。

「あたしは、絵をかきにローマへいき、りっぱなものをかいて、世界中で一ばんえらい画家になることですよ。」

「ぼくたち、なかなかの野心家ですね。ベスのほかは、金持になり、有名になり、あらゆる点でえらくなろうというのですから。」と、ローリイがいうと、ジョウが、「今から十年たつて、みんな生きていたらあつまつて、だれが望みをとげたか、だれが望みに近づいたか見ま

しようよ。」と、いいました。

「そしたら、あたしいくつ？ 二十七ね。」と、メグ。
すると、すぐにジヨウが、

「ローリイとあたしが二十六、ベスが二十四、エミイ
が二十二、なんとみなさん、相当の御先輩というわけ
ね。」

「ぼくは、それまでになにか、じまんになるようなこ
としたいな、だけど、ぼくはこんな怠け者だから、だ
めだろう。ねえ、ジヨウ。」

「おかあさんが、あなたにはなにかいい動機があれば、
きつとすばらしいことなさるって、いつてらしたわ。」

「そうですか。ぼくやります。ぼくは、おじいさんの、
気にいるようにしたいんだが、できないんですよ。お
じいさんは、後つきにして、インド貿易商にしたがつ
ているんです。だけど、ぼくいやだ。大学へ四年いく
だけで、満足して下さればいいのに、ああ、おじいさ
んを世話して下さるかたがあれば、ぼくは明日にも家
をとび出すんだがなあ。」

ローリイは、ひどく気がたかぶっていました。かれ
には青年の熱情があり、じぶんのちからで世の荒浪を
のりきつていこうとして、いるのでした。ジョウは同
情して、

「あなたの船で海へのり出し、したいほうだいなこと
して、あきるまで帰らなければいいわ。」と、じぶんの
好きな空想でありました。びつくりしたメグはいい
ました。

「いけないわ。ジョウ、あんなこといって、ローリイ
もそんな忠告聞いてはだめ。あなた大学で一心に勉強
すれば、おじいさんもいつまでもがんこなこといわな
いで、きつとあなたの望みをかなえて下さいます。だ
から、さびしがったり、いらいらしないで、じぶんの
務めをはたすようになさいね。そうすれば、ブルツク
先生のように、みんなからたつとばれ愛されるように

なります。」

それから、メグは、ブルツク先生が、おかあさんのなくなるまで孝養をつくしたこと、おかあさんから「#から」は底本では「かち」はなれたくないので、家庭教師として外国へいけるのをことわったこと、そして、今でもなくなつたおかあさんの看病をしてくれたおばあさんに、まい月、仕送りをしていること、それをだれにもいわずにいたことなど、ローリーのおじいさんが、メグのおかあさんに話したことを話し、どうかそのりっぱなブルツク先生を満足させるように、よく勉強しなければいけないと、まるで、ねえさんみたいに、

ローリイにいつて聞かせました。そして、こうつけ加えしました。

「ごめんなさい。お説教したりして。けれど、まるでほんとの兄弟みみたいな気がするものですから、思ったとおりのこというのよ。」

ローリイは、親切なメグの言葉をありがたく思い、「ねえさんのように、ぼくの欠点をいつて下さつてあげがとう。今日はぼくふきげんだつたけど、これですさっぱりした。」

ローリイは、できるだけ愉快にしようとして、メグの糸をまいてやつたり、ジヨウをよろこばそうとして、

詩をうたったり、バスに松ぼっくりを落してやったり、エミイの写生を手つだつてやつたりはたらきばち会の会員にふさわしいように努めました。そのうちに、ハシナの知らせるベルが聞えました。みんなが家へ帰る時間です。ローリイは、

「ぼく、また来てもいい？」

メグは、にこにこして、

「ええ、おとなしくして、本が好きになれたらね。」

「好きになります。」

「じゃ、いらっしやい、あみもの教えてあげるわ。スコットランド人は、男でもあみものするのよ。それに、

今とても靴下の注文があるんですって。」

その晩、バスはローレンス老人のためにピアノをひきました。ローリイはそれをカーテンのかけにたたずんで聞きました。バスのあどけない音楽は、ローリイの気持をはずめてくれ、おじいさんのことが、しみじみとなつかしく思われるのでした。そして、その日の午後のメグの話の思い出しながら、よろこんで犠牲をはらうつもりで、

「ぼくは、空中楼阁なんてすてて、おじいさんが望むだけ、いつまでも、いつしよにいてあげよう。おじいさんは、ぼくだけしか、頼る人がないんだもの。」と、

ひとり言をいいました。

第十四 秘密

十月にはいると、寒さもきびしくなり、日ざしもみじかくなつたので、ジョウは屋根部屋でいそがしい日を送りました。最後のページをおわって、じぶんの名を花文字で書くと、ペンをなげ出していきました。

「さあ、できあがった、これでだめなら、もつとよく

書けるまで待たなくてはならない。」

ソファにころりとあおむきになり、ジヨウは念入りに原稿を読みなおし、ところどころに、線をひいたり、感嘆符をつけたりしました。それから、あかいリボンでとじました。この屋根部屋のジヨウの机は、かべにとりつけてある古いブリキの台所用のたなでした。ジヨウは、そのなかへ原稿用紙や二三冊の本をしまいこんで、ねずみの、がりがりさんに、荒らされないようにしました。がりがりさんは、やっぱり文学好きで、原稿用紙や本をよくかじるからです。ジヨウは、ブリキのいれものからもう一つ of 原稿をとり出し、今書き

おわった原稿といっしよに、ポケットにねじこんで階段をおりました。それから、こつそり家を出て、通りがかりの乗合馬車をよびとめてのり、いかにもたのしそうな、秘密ありそうな顔つきで、町のほうへいきました。

町へ来たジョウは、大いそぎで、あるにぎやかな通りの、ある番地まで突進しました。やっとある家をさがし出しましたが、そのきたない階段を見あげると、じつと立ちどまっていましたが、きゆうに、また大いそぎで帰っていきました。こんなことを二三回くりかえしたあげく、まるで歯をすっかりぬいてもらうよう

な悲壮な顔つきで階段をのぼっていきました。その建物には歯科医もあつたのです。

それを見ていたのは、むかいがわの建物の、窓のところをぶらぶらしていたわかい紳士でした。

「一人で来るなんて、あの人らしいな。けれど、気分でもわるくなつたら、家までつきそってあげなくちや。」

十分とたたないうちに、ジヨウはまっかな顔をして、なにかおどろくほど苦しい目にあつたように階段をかけおりて来ました。わかい紳士は、ほかならぬローリーでしたが、ジヨウがちよいと頭をさげていきすぎた

ので、すぐに後をおつて尋ねました。

「とても痛かった？」

「そんなでもなかったわ。」

「早くすんだねえ。ずいぶん。」

「ええ、うまくいったわ！」

「どうして一人でいったの？」

「たれにも知らせたくなかったからよ。」

「ずいぶん、かわっているんだね。きみは、それで、

なん本ぬいたの？」

ジョウは、ローリーのいう意味がわからないので、
この顔をながめました、はっと気がついて、おもし

ろくてたまらないというように笑いました。

「二本ぬいてももらいたいんだけど、一週間も待たなきゃならないのよ。」

「なにを笑ってるの？　また、なにかいたずらしてきたんだね、ジヨウ。」

「あんなこそ、玉突屋でなににしてらしたの？」

「はばかりながら、玉突屋ではありません。体育館でして。ぼくは剣術を習ってます。」

「まあ、うれしい！」

「なぜ？」

「あたし教えてもらえるもの。そうすれば、今度ハム

レットをやるとき、あんなレアティスやれるから、二人であのすばらしい剣術の場がやれる。」

ローリイがふき出したので、通行人が、二三人ふりかえりました。

「教えてあげるよ、ハムレットはどうでもいいが、おもしろいよ。やれば身体がしやんとなる。でもそれだけで、あなたが、まあうれしいって、あんなに強くないとは思えないが。」

「そうよ、あんたが玉突屋にいなかったのがうれしかったの。あんた、いくの？」

「そんなに、いきませんよ。」

「いけないほうがいいわ。」

「なにもわるいことありませんよ。家の玉突では、じょうずな相手がなくてつまらない。だから、ときどきいって、ネット・マフオットや、そのほかの連中とやるんです。」

「いやだわ、だんだん好きになって、時間をお金をむだにして、いけない子になるんでしょう。品行方正でいてほしいわ。」

「男は、品をおとさなければ、ときどきおもしろい遊びをしてはいけないかしら？」

「それは遊ぶ方法と場処によるわ。ネットの連中、あ

たしきらい、交際しないほうがいいわ。あたしの家にも来たがっているけど、おかあさんよせつけないようになさるの。あなたが、あの人みたいなら、今までどおりあなたと遊ばせないでしょう。おかあさんは。」

ローリイがいました。

「では、ぼく申しぶんのない聖人になります。」

「聖人なんてまっぴら、すなおな品のある人になつてほしいわ。キングの家の息子さんみたいに、お金たくさん持って、よっぱらったり、ぼくちをしたり、しまいに、家出しておとうさんの名をかたつて「#」かたつて」は底本では「がたつて」、「、なにか偽造までして、こわ

いわ。」

「ぼくも、そんなことしかねないと思っ
ているんですね？ どうもありがとう。」

「とんでもない。ただあたし、お
金はおそろしい誘惑をするって聞
いてるから、あなたが貧乏だった
ら、心配しなくてもいいと思うこ
とがあるわ。だって、あなた、と
きどきふきげんだったり、強情だ
ったりするから、いったんまちが
ったほうへむいたら、ひきとめる
のがむずかしいと思うわ。」

「そう、そんなに心配して
いてくれるの。」

ローリーは、しばらくだまりこ
んで歩いていました。

ジヨウは、すこしいすぎたかしらん「#「かしらん」
は底本では「かしらう」と思いましたが、やがて、ロー
リイは、

「あなたは家へ帰るまで説教するつもり？」

「いいえ、どうして？」

「説教するつもりなら、ぼくバスにのるし、しないな
ら、いっしょに歩いて、とてもおもしろいこと聞かせ
てあげる。」

「しない。だから、そのニュース聞かせて。」

「よろしい、これは秘密ですよ。ぼくがいったら、あ
なたのもいわなければだめですよ。」

「あたし秘密なんかいわよ。」と、ジヨウはいいました。が、じぶんにも秘密があることを思って、きゆうに口をつぐみました。

「あるでしょう。かくしたってため、さつさと白状なさい。いわなければ、ぼくもいわない。」

「あなたの秘密おもしろいの？」

「おもしろいとも！ あなたのよく知っている人のこと。あなたが知っていないければならない秘密だから、教えてあげたくてうずうずしているんです。さあ、あなたからですよ。」

ジヨウは、家の人にもいわないこと、からかわない

ことを念おして、

「じゃいうわ。あたしね、小説を二つ、新聞社の人のところへおいて来たの。そして、来週返事があるの。」と、相手の耳にささやきました。ローリイは、

「アメリカにその名も高きマーチ女史ばんざい！」と、さけんで帽子を高くなげ、それをうけとめました。もう郊外を歩いていたので、それは二羽のがちようと、四ひきのねこと、五羽のにわとりと、六人のアイルランド人の子供をよろこばせました。

「返事なんか来ないわ。このこと、たれにも失望させたくなかつたから、いわなかつたの。」

「なあに、だいじょうぶ、あなたの書くもの、シエークスピアの書いたものくらい、ねうちがありますよ。活字になったらすてきな！」

ジョウは、そういわれると、うれしく思いました。友だちの賞讃はいいものです。

「それで、あなたの秘密ってなあに？　公明正大にいなさい。」

「いつてしまうと、こまることになるかもしれないんですが、いわないと気がらくになれないし、あのね。メグの片っぱうの手ぶくろのありかを知っているんです。」

「それつきり？」

「今のところ、それでじゆうぶんだよ、どこにあるかということをお教えたら。」

ローリイは、ジョウの耳に三つの言葉をささやきましたが、その言葉でジョウは、おどろきと不愉快な表情をしてつつ立ち、ローリイの顔を見つけてから歩き出しました。

「どうして知ってるの？」

「見たんだよ、ポケットに。」

「ずっと今でも？」

「ええ、ロマンティックじゃない？」

「いいえ、こわいわ。きらいだわ。ばかばかしい。たまらないわ。メグねえさん、なんていうかしら？」

「たれにもいわないでよ、きみを信用したからいったのさ。」

「それじゃ、当分はいわないわ。でも、いやね。聞かしてくれなければよかった。」

「ぼくは、きみがよろこぶかと思った。」

「たれかがメグをつれ出しに来るっていうことを、あたしがよろこべますか。ああ、あたしには秘密つてものは性に合わない。あなたがそんなこと聞かすものだから、気持がくしゃくしゃしちやった。」

ジョウが不満らしくいうと、ローリイは、

「この坂を競走しておりよう。そうすれば、気持がさっぱりするよ。」

あたりには人かげもなく、平らな道がまねくように坂なっていました。ジョウは走り出し、帽子もくしもふり落とし、髪をふりみだし、目をかがやかしました。もう不満な色はありませんでした。

「あたし馬だったら、こんなに気持のいい空気のなかを、いくらかけても息がきれないでしょう。ああおもしろかった。でも、このおかしなかつこう。あたしの落したもののひろって来てよ。」と、ジョウは紅葉のちっ

ているかえでの木の下にすわりました。そして、髪を
なおしました。そのあいだにローリイは、ジヨウの落
しものをひろいにいきましたが、そこへ訪問がえりの
メグが、りっぱな服を着て、貴婦人みたいに大人びて、
通りかかりました。

「あなた、走ったのね、いつになったら、そんなおて
んばやまるの？」

「年をとって、身体がこわばって、松葉杖をつくるよ
うになるまでやめないわ。あたしを大人あつかいにす
るのいやよ。おねえさんが、きゆうに変わったのを見る
のつらいわ。せめてあたしだけいつまでも子供にして

おいて。」

ジョウには、メグが大人びていくように思えるのに、ローリーのいった秘密から、やがて別れというおそろしいときが、近く来そうな気がしました。

「そんなに、おめかしてどこへ？」

「ガーデナアのところへ、サリーは、ベル・マフオツトの結婚のことをすっかり話してくれました。とてもりっぱでしたって、お二人はこの冬をパリで送るために、もうおたちになったのよ。どんなにうれしいでしょうね。」

そこへ、ローリーも帰って来て、ジョウといっしょ

に、メグの結婚のことを話しているうちに、とうとうメグは、

「あたし、たれとも結婚しないわ。」と、つんと気どつて歩きはじめました。二人はその後から、子供みたいに、笑ったり、つつき合ったりしてついていきました。

さて、それから一二週間というもの、ジョウはいかにも奇妙なふるまいが多かったので、みんなおどろいてしまいました。郵便屋の足音がすると玄関へかけていったり、ブルツク先生につっけんどうにしたり、じつとすわりこんで悲しそうな顔をしてメグをながめたり、きゆうに、メグにとびついてキッスしたり、ローリイ

が来ると、二人で目くばせして、新聞のことを話したり、いったい、どうしたというんでしよう？

ある日、ジヨウは家のなかへとびこんで来て、ソファに横になり、新聞を読むふりをしていました。ベスが尋ねました。

「なに読んでいらっしやるの？」

「はりあう画家という小説。」

「おもしろそうね、読んでちょうだい。」

メグがいうと、ジヨウはせきばらいをして、読みはじめましたが、ロマンチックな作で、出て来る人物は最後にみんな死んでしまうという、かなり悲壮なもの

でした。

「いいわ、恋をするとこ好き、だあれ、作者は？」と、エミイが尋ねると、

「あなたがたの姉妹よ。」

「あなた？」と、メグがさげびました。

「とてもおじょうずね。」と、エミイ。

「ああ、あたし肩身がひろい。」と、ベス。

この成功に、みんなはおどり出したいほどよろこびました。ハンナもとびこんで来て、おどろきの声をあげ、おかあさんもどんなにほこらしく思ったでしょう。よろこびが、家中をあらしのようにひっかきまわしま

した。ジヨウは目にいっぱい涙をため、ミス・ジヨセ
フィン・マーチと印刷された名前の新聞が、みんなの
手から手へわたるのをながめていました。

「すっかり、話して聞かせてよ。」「いつ新聞は来た
の?」「いくらいたただけるの?」「おとうさんはなんて
おっしゃるかしら?」「ローリイは笑わなかった?」と、
ジヨウのまわりに集った家中の者が、つぎつぎにさけ
びました。

「では、なにもかもいつちまうわ。」と、ジヨウは、じ
ぶんの作品を売りにいったときのことを話し、返事を
聞きにいったら、二つともおもしろいが、はじめての

人には原稿料を出さないで、ただ新聞にのせるだけ、そのかわり、いいものを書けるようになったら、原稿を買いに来るということだったと話しました。

「それで、あたし二つともわたして来たの。そしたら、今日これを送って来たの。ローリイが見せろってきかないから見せてあげたの。ローリイは、よくできているからもつと書けというの。そしてこのつきから原稿料を出させるようにしてやるって。あたし、うれしいわ。じぶんで「#「じぶんで」は底本では「しぶんで」書いたもので食べていけて、みんなのくらしもらくにすることが、できるかもしれないんですもの。」

ジヨウは、一気でしゃべって息がきれました。そして、新聞で顔をおおって、涙でじぶんの小説をぬらしてしまいました。ペンで、一人立ちして、愛する人からほめられるようになることは、一ばんジヨウにとつては、うれしいことでありました。

第十五 雲のかけの光

「十一月って、いやな月ね。」と、メグがいったのがきつ

かけで、ジヨウもエミイも、霜がれの庭をながめながら、いろんな気のひきたたない話をしていると、べつの窓から外を見ていたベスが、

「うれしいことが二つあるわ。おかあさんは町からお帰りだし、ローリーさんは、なにかおもしろいお話でもありそうに、お庭をぬけて来るわ。」

二人とも家へはいつて来ました。おかあさんに、おとうさんから手紙が来なかったか尋ねました。ローリーは、今日は数学をやりすぎたので頭がふらつくから、ブルック先生を馬車で送っていくといい、

「どうです、みんないらっしやい。今日は陰気だけど

馬車は気持ちいいですよ。」と、じょうずに誘いかけました。

メグは、そうたびたびわかい男といつしよにドライブしないほうがいいという、おかあさんの意見にしたがいたかったので、ことわりしましたが、ほかの三人は出かけることになりました。ローリイは「おばさん、なにか御用はありませんか？」と、いつもの愛くるしい声で尋ねますと、マーチ夫人はいいました。

「ありがとうございます。できたら郵便局へよつて下さい。今日は手紙の来る日なのに、郵便屋さんが来ません。おとうさんは、お日さまがまい日であるように、まちがいな

く手紙を下さるのに。」

そのとき、けたたましいベルが鳴って、まもなくハンナが一枚の紙を持って来ました。ハンナは、「おくさま、おそろしい電報が来ました。」といって、その電報が爆発でもするかのように、こわごわ出しました。

おかあさんは、それをひったくるようにして読みましたが、まるで弾丸を胸にうちこまれたかのように、まっさおになって、イスにたおれかかりました。ローリイは、水をとりに階下へかけおり、メグとハンナはおかあさんをだき起し、ジョウはふるえ声で読みあげました。

マーチ夫人へ——ゴシユジン「#「ゴシユジン」は底
本では「ゴシジュン」」 ジュウタイ スグコラレタシ。
ワシントン ブランクビヨウイン エス・ヘール

部屋は水をうったようにしんとなりました。娘たちは、じぶんたちの生活のあらゆる幸福と力がうばい去られるような気がしました。おかあさんは、すぐにわれにかえつて、電報を読みなおし、悲痛な声でいいました。

「あたしはすぐに出かけます。けれど、もうまにあわないかもしれない。ああ、あなたたち、どうかおかあさんが、それに耐えられるように力を貸して下さい

い。」

しばらくは、とぎれとぎれのなぐさめの言葉や、助け合うという誓いの言葉や、神さまの加護を信ずる言葉にまじるすすり泣きの声のほかに、部屋にはなんの音もしませんでした。けれど、あわれなハンナがわれにかえり、じぶんでは気づかないちえで、ほかの者にいい手本を示しました。すなわち、ハンナにとつては、はたらくということが、たいていの心配ごとをなおす良薬でありました。

「神さまが、だんなさまをお守り下さいます。わたしは泣いてばかりいられません。おくさまがおたちにな

る仕度をしなければなりません。」と、ハンナは真心からいって、涙をエプロンでぬぐい、そのかたい手でマール婦人の手をにぎって、人一倍はたらくために出てきました。

「ハンナのいうとおりです。泣いているときではありません。みんなおちついてちょうだい。そしておかあさんに考えさせておくれ。」

おかあさんが、あおぎめた顔をしながらも、気をとりなおして悲しみをおさえ、娘たちのためにいろいろ考えはじめたとき、娘たちも気をおちつけようとした。

「ローリイはどこ？」と、おかあさんは、まず第一になすべきことをきめたのです。

「ここにいます。おばさん、どうぞなにかさせて下さい。」と、ローリイは、いそいでとなりの部屋から出て来ました。かれはこの一家の人たちの悲しみのなかに、いかに親しくても、まじってはならぬと思って、となりの部屋にしりぞいていたのです。

「あたしが、すぐ出発するという電報をうって下さい。つぎの汽車は明日の朝早く出るはずです。それでいきます。」

「そのほかには？　馬の用意はできています。どこへ

でもいきます。なんでもします。」

「それから、マーチおばさんのところへ手紙をとどけて下さい。ジョウ、ペンと紙とを下さい。」

手紙が書かれ、ローリイはわたされました。

「では、すみませんがお願いします。めちやに馬を走らせてけがなんかしないで下さい。そんなにいそがななくてもいいんですからね。」

けれど、その言葉は守られず、ローリイは五分の後には、はげしいいきおいで馬を走らせていました。

「ジョウ、あなたは事務所へ行って、あたしがいけないうってことわって来て下さい。途中で買い物をして来

て下さい。今書きますから。それからバスはローレンスさんのところで、古いぶどう酒を二本いただいで来て下さい。おとうさんのためなら、いただくのをはずかしいと思つてはいられません。エミイ。ハンナに黒革のトランクをおろすようにいつて下さい。メグ、あなたはおかあさんの、さがしものを手つだつて下さい。あたしはだいぶうろたえていますからね。」

手紙を書いたり、考えたり、さしずしたり、すべてを一度にしなければならぬおかあさんに、メグはしぶんたちではたらくから休んでいてほしいといいました。けれど、おかあさんに休むことが、どうしてでき

ましよう。無事でたのしかった家は、今や不吉なあら
しに吹きあらされ、みんなは木の葉のように、ふきと
ばされるほかはありませんでした。

ローレンス老人は、バスとともに来ました。親切な
老人は、病人のためになりそうなもの「#「もの」は底
本では「うの」を、考えられるだけ考えて持って来ま
した。そして、夫人の留守中は、娘たちの世話はひき
受けるといいましたので、おかあさんは安心すること
ができました。また、老人は、なんでも必要なものは
提供するといいい、いっしょにワシントンへつきそつて
いくとさえいい出しました。けれど、長い旅に老人に

いってもらうことは、とてもできませんので好意を感じ謝してことわりました。

老人が帰って行ってまもなく、メグが片手にゴム靴、片手に紅茶を持って玄関をかけていくと、ぼったりブルック先生にいました。

「今、聞いたのですが、ほんとうにお気のどくです。僕はおかあさんのおつきそいをしていこうと思つて来たのです。ローレンスさんが、ぼくをワシントンまでいかせる用事ができたのです。ですから、道中おかあさんのお世話ができれば、ほんとうに満足です。」

メグは、あやうくゴム靴をおとしそうになるほど、

感謝にあふれました。

「みなさん、なんて御親切なものでしょう。おかあさんはきつとよろこんでお受けいたすでしょう。あなたが世話下されば安心でございますわ。お礼の申しようもありません。」

メグは、ブルツク先生を、客間へ案内しておかあさんをよびにいきました。

ローリーが、マーチおばさんからの手紙を持って帰ったときには、すべての支度がととのっていました。その手紙のなかには頼んだお金と、おばさんが前からたびたびいつていたことが書いてありました。すなわ

ち、マーチが軍隊にはいることはいけないといつも
いつていたし、どうせろくなことにならないと、注意
しておいたが、こんなことになった。今後はじぶんの
いうことにしたがってほしいとありました。おかあさ
んは手紙を火にくべ、お金を財布にいれ、きゅつと口
をむすんで、また支度をつづけました。

みじかい午後が暮れました。外の用事はすべてすみ、
メグとおかあさんは、必要なぬいもの、ベスとエミイ
は夕飯の支度、ハンナはアイロンかけに、みんないそ
がしく手をうごかしていました。どうしたものか、
ジヨウがまだ帰りません。みんなそろそろ心配しはじ

めていると、ジョウがみような表情で帰って来ました。そして、すこし声をつまらせて、

「これおとうさんの御病気がよくなって、家へお帰りになれるようにと思ったあたしの心持だけなの。」と、いっておかあさんにおさつのたばをわたしました。

「まあ、どこから手に入れたの？ 二十五ドル、ジョウ、あんたはとんでもないことしやしませんか？」

「いいえ、りっぱなあたしのお金です。じぶんのもの売ったお金です。」

ジョウが帽子をぬぐと、みんなは、あつ！と、おどろきの声をあげました。ふさふさした髪の毛はみじか

く切られていました。

「このほうが、さっぱりして気持ちいいわ。じぶんの髪をじまんして、虚栄心を起しそうだったが、これでもいいわ。どうぞお金とってちょうだい。」

「ジョウ、おかあさんは、満足とは思いませんが、しかりはしません。あなたが愛のために、虚栄心を犠牲にしたことはよくわかります。でもね、そんなことまでする必要はなかったのです。いつか後悔するでしょうね。」

「いいえ、そんなことはありませんわ。」と、ジョウは、じぶんのしたことを、一がいに非難されなかつたので、

ほっとしていいました。

みんなは、ジヨウの髪について、いろいろ考えました。なんととっても、重大事件でした。食卓をかこんだとき、髪の話でもちきりでした。いろいろ話があったあげく、ジヨウがいいました。

「はじめは髪を売るなんて考えなかったのよ、どうしたらいいかと考えながら歩いているうちに、ひよいと床屋の窓を見ると、長いけれど、あたしほどくくない黒髪が、一たば四十ドルなの、とつきにあたしにもお金になるものがあると気がついては行っていったの。そして、いくら髪を買って下さるか尋ねたのよ。店

の人は、女の子が髪を売りに来たことなんか、あまりないらしく、びつくりしていたけど、あたしの髪の色は、今の流行ではないといって、なるべき安く買おうとするのよ。そこであたしお金のいるわけを話したりして、ぜひぜひといそいだの。そうしたら、おかみさんが聞きつけて出て来て、買って娘さんをよろこばしておあげなさいよ。あたしにも売れるような髪があったら、家のジンミイのためなら売りますよと、とても親切なんですよ。ジンミイというのは、出征している息子ですって。」

話がおわると、メグが尋ねました。

「切られるとき、こわいと思わなかった？」

「床屋さんが道具を出しているあいだに、あたし見おさめに、じぶんの髪をながめたわ。でも、あたしめそめそしないわ。でもきつてしまったら、腕か足きられたようなへんな気持ちしたわ、おかみさんはあたしがきられた髪をながめているのに気がついて、長い毛を一本ぬいて、しまっておきなさいといってくれたの。おかあさん、記念にこれさしあげます。きつたらさっぱりして、あたしもう二度とのばそうと思いません。」

おかあさんは、その毛をたたみ、おとうさんのみじかい灰色の毛といっしょに、机のなかにしまいました。

おかあさんは、ただ、ありがとうといっただけでしたが、娘たちはおかあさんの顔色を見て話をかえ、ブルツク氏の親切なことや、明日はよい天気になりそうなことや、おとうさんが帰っていらして、じぶんたちが看病できるたのしさなど、できるだけ元気に話しました。

だれもねたくないようでしたが、十時をうつと、おかあさんは、さあ、みなさんといいました。ピアノで、おとうさんの一ばん好きな讃美歌をひきました。元氣よくうたい出しましたが、一人また一人と声が出なくなり、音楽がいつもなくさめになるبسだけが、心こめてうたいました。

讚美歌がおわると、娘たちはおかあさんにキツスして、しずかに床にはいりました。ベスとエミイは、大きな心配ごとがあつても、すぐにねむりましたが、メグはねむれませんでした。ジヨウは、身うごきもしなかつたので、メグはもういもうとがねむつたことと思つていましたが、おさえつけたようなすすり泣きを聞いたので声をかけました。

「ジヨウ、おとうさんのことで泣いてるの？」

「今はそうじゃないの、あたしの髪のこと。」

ジヨウは、そういつて、なおもはげしく泣きました。メグは、なやめるいもうとにキツスし、その頭をなで

ました。

「後悔はしていないの。だけど、美しいものをなくしたので、ちよつとばかり泣いただけ。でも、もうすっかりおちついたから、だれにもいわないで。おねえさんは、どうしてねられないの？」

「とても心配なので。」

「たのしいことを考えてごらんなさい。ねむれてよ。」
話しているうちに、ジヨウが大きく笑ったので、メグはおしやべりをやめようといって、ジヨウの髪にカールをかけることを約束し、やがて二人はねむってしまいました。

時計が、十二時をうち、ひっそりと部屋がしずまつたとき、一人の人かげが、娘たちのベッドからベッドを歩き、ふとんにさわったり、枕をなおしたり、ね顔をながめたり、唇にそつとキッスしたり熱いいのりをささげたりしました。

その人かげが、カーテンをひいて、わびしい夜空を見あげたとき、ふいに黒雲のかげから月があらわれて、あかるい慈悲ぶかい顔のように、その人かげに照りましたが、その顔は、言葉なき言葉で、こうささやいているように思われました。

「心やすくあれ、いとしき魂よ、雲のかげには、いつ

も光あり。」

第十六 手紙の花束

寒い、うすぐらい夜明けに、姉妹たちはランプをつけて、今までにない熱心さで聖書を読みました。その小さな書物には、救いとなぐさめがあふれていました。階下へおりていくと、もう仕度はできて、ハンナがいそがしく台所ではたらいしていました。おかあさんは、

夜ねむらなかつたので、ひどくやつれて見えました。心配の多いおかあさんを悲しませないように、旅に送り出すつもりでしたが、おかあさんの顔を見ると、つい涙ぐまずにはいられなくなりました。おかあさんは、食卓についてもあまり食べませんでした。

馬車の来るまで、みんなはあまり話さずに、おかあさんの身のまわりの用事をしました。おかあさんがいました。

「おかあさんは、あなたがたを、ハンナとローレンスさんにお願いでいきます。ハンナは心からの律義者ですし、おとなりのあの親切なかたは、あなたがたを、

じぶんの娘のように守って下さいます。ですから、すこしもあたしは心配しませんが、ただ、この不幸をよく理解して、留守中、悲しんだり、いらいらしたり、なまけたりせずに、めいめいの仕事をやって下さい、希望をもつてはたらきどんなことが起つても、けつしておとうさんを失わないということ覚えていらつしやい。」

「はい、おかあさん。」

おかあさんは、なおもこまかく、一人一人の娘に注意をあたえました。

馬車の音がしたとき、みんなはよくこらえて、悲し

みの声をたてる者はありませんでした。ただ、しずかにおかあさんにキツスして、馬車が動き出したら、元気で手をふろうと思いました。

ローリイとおじいさんが見送りに来てくれました。同行するブルック先生は、いかにも頼もしく見えましたが、巡礼ごっこのなかの案内者グレート・ハート氏という、あだ名を、さつそくつけました。馬車が走り出したとき、いい前ぶれのように、ちょうど日光が見送りのみんなを照らしました。そして、おかあさんが角をまがるとき、最後に目にはいったのは、四つのかがやかしい顔と、そのうしろに護衛のように立って

いるローレンス老人と、ハンナと、誠実なローリーのすがたでした。

「みなさん、なんて親切にして下さるのでしよう。」とおかあさんは、ブルック青年の顔にあらわれた尊敬と同情を見ました。

「だれだって、あなたがたに親切にせずにはいられないのです。」と、ブルック先生は、気持よく笑ったので、おかあさんもほほえまずにはいられませんでした。こうして長途の旅行は、日光と微笑と、たのしい言葉のよい前兆ではじめられました。

「あたし、なんだか地震でもあった後のような気がす

るわ。」と、おとなりの二人が帰って行ってしまおうと、ジヨウがいいました。

「家が半分なくなってしまったようね。」と、メグがさびしそうにいいそえました。

そして、娘たちは、勇ましい決心をしていたにかかわらず、その場に泣きくずれてしまいました。ハンナは、気をきかして、そつとしておき、どうやら夕立が晴れもようになったとき、コーヒーわかしを持って来ました。

「さ、おかあさんのおっしゃったとおりにやるんです。コーヒーで元気をつけて。」

この朝、とくにハンナが腕をふるったおいしいコー
ヒーに、みんなはすっかり元気づけられ、「せつせとは
たらけ、希望をもって」の、標語どおりに、ジョウは、
マーチおばさんのところへ、メグはキング家へはたら
きにいききました。そして、エミイとベスは、ハンナを
助けて家のなかの仕事を、つぎからつぎへ片づけてい
きました。こうして、まい日、わりに元気にあかるく、
なにごともなく過ぎていきました。

それに、おとうさんのことが、娘たちをたいそうな
ぐさめました。重態ではありましたが、もつともすぐ
れた看護婦がつきそうようになってから、その効果は

すでにあらわれました。ブルック先生がまい日、容態を知らせてくれるので、その速達を一家の長としてのメグが、読みあげることになりましたが、一週、二週とすぎるにつれて、いよいよ娘たちを元気づけてくれました。

みんなずいぶんふくらんだ手紙を書いて、ワシントンへ出しました。その手紙のなかから、こっそり披露してみましよう。

なつかしい、おかあさん。

先日のお手紙がどんなにあたしたちを幸福にしたか申しあげかねるほどでございます。あまりうれしいお

便りなので、読みながら泣いたり笑ったりいたしました。ブルツクさまは、なんて御親切なのでございます。しょう。ローレンスさまの御都合で、そんなに長くいて下さって、おとうさんやおかあさんを、いろいろお世話下さるのは、まことにしあわせでございますね。ジヨウは、あたしのぬいもののお手伝いをしてください。あの子の「道徳上の発作」が永つづきしないことを知っていなければ、過労にはならぬと心配になるくらいです。ベスは時計のように正しく、じぶんの仕事をしています。エミイは、わたしのいうことをよくきいてくれます。ボタンの穴かがり靴下のつくろい、わ

たしに教わってよくやります。

ローレンスさまは、年とつたかあさんのにわとりみたいに、ジョウがそう申します。わたしたちの世話をして下さいます。ローリイもたいそう親切にしてくれます。おかあさんが遠くへいらしたのでわたしたちはときどきさびしくて孤児みたいな氣もしますが、ローリイとジョウが元氣づけてくれます。ハンナは、聖人みたいです。日夜おかあさんのお帰りを待っています。おとうさんにくれぐれもよろしくお伝え下さいませ、おかあさんのメグより。

においりりの、びんせんに、きれいに書いたこの手

紙とちがつて、つぎの手紙は、大きなびんせんに書きなぐつてあります。

わたしのたつといおかあさん。

なつかしき父上のために、ばんざい三唱、おとうさんのよくなられたことを、電報で知らせて下さるブルック先生まことに頼もしきかぎり、電報を見て屋根部屋へかけあがり、わたしたちによくして下さいる神さまにお礼を申さんとせしも、ただ大声で、うれしいとくり返し泣きましたのみ。でも、長きいのりとおなじかと存じます。

わたしどもは、おもしろく暮しています。みんなひ

どく親切で、山鳩の巢にいるごとし。メグねえさんは、おかあさんらしくふるまい、日に日に美しくなり、いもうとたちは、かわいい天使のようです。わたしは、あいかわらずのジヨウ。そうそうローリイと、けんかしました。わたしのほうが正しいがいいわけしたのがわるく、わたしがあやまるまで来ないといって帰り、国交断絶、わたしはローリイのあやまりに来るのを待ちました。来ません。その晩、エミイが川に落ちたとき、おかあさんの教訓を思い出し、聖書を読んだらおちついて、怒ったままねてはならぬと、あやまりに来るローリイとあい、すっかり心は晴れ、元どおり仲

よしとなりました。昨日のハンナの洗濯のお手伝いをして詩をつくりました。お笑草に。おとうさんに、わたしにかわって、愛情こめてキツスをしてあげて下さい。でたらめのジヨウより、

しゃぼん水のうた

わたしのたらいの女王さま、わたしはたのしくうたいます。

白いあわが、ぶくぶく高くたつあいだに
せつせとあらって、しぼって、ほします。

きれいなお空の下で、吹きまわる風に
せんたくものは、ひらひらふかれます。

あたしたちの心とたましいについた

一週間のけがれをあらいたい。

水と空気のふしぎなちからで

きれいにきれいにきよめたい。

そうすれやこの世に、とてもすてきな

せんたく日がおこなわれるでしょう。

よき人の世の小道には

いつもパンジイが咲くでしょう

いそがしい心は かなしみも うれいも なやみも

考えるひまは、ありはしない

ほうきをせつせとつかうときには

なやむ思いもはいてしまう。

日ごと日ごとにつとめる仕事が

わたしにあたえられたのはうれしい。

仕事がつよいからだ　ちからとのぞみを　もつて
きてくれる

頭でいろいろよく考え　心でいろいろよく感じ、

けれど　手はいつもはたらかすよう。

なつかしい、おかあさん——わたしの愛情とおとう

さんがお帰りになったとき、お目にかけてようと大切に
していた三色すみれのおし花とをお送りするだけでご
ざいます。わたしはまい朝あの本を読んでいい子にな
ろうとつとめ、ねるときはおとうさんの好きな歌をう
たいます。わたしは、「まごとの国」がうたえません。
うたえば泣けて来るからです。みなさんが大切にしてい
下さいますので、おかあさんがるすでも、幸福に暮し
ています。エミイがこの紙ののこりに書くそうですか
ら、これでやめます。まい日、時計をまくことと、部
屋にいい空気をいれることは忘れたことありません。
なつかしいおとうさんによろしくお伝え下さい。小さ

なべスより

あたしのおかあさん——みんな元気です。わたしはまい日勉強しています。おねえさんのいうことをききます。メグねえさんは、たいへんやさしくして下さいます。夕飯のときゼリイを食べさせて下さいます。ジヨウねえさんは、あたしがゼリイを食べるからおとなしいのだといひます。もうじき十三になるのに、ローリイはあたしを子供あつかいにし、ひよこさんといったり、あたしがフランス語で、メルシイ（ありがとう）とか、ボンジュール（こんにちは）とかいうと、

ぺらぺらとフランス語をしゃべってこまらせます。

空色のドレスのそでがきれたので、メグねえさんが新らしいのにつけかえて下さいましたが、色が青すぎた前のほうがだめになりました。いやでした、ぐずらないで、つらいのを、がまんしています。ハンナがエプロンにもっとのりをつけて、まい日おそばを食べさせてくれるといいと思います。メグねえさんは、あたしの文章、てんのうちかたと、字の使いかたがだめだといいます。することがたくさんあるのです。かたありません。さよなら、おとうさんにくれぐれもよろしくおっしゃって下さい。エミイより

おしたわしきマーチおくさまへ——一筆申しあげます。みなさんおたっしやで、おりこうで、よくおはたらきになります。メグさまは、よいおくさまぶりで、なんでも早くこつをのみこみなされます。ジヨウさままつさきにたつておはたらきになります、考えてか
らなさらないので、なにをしでかしなさるかわりませ
ん。月曜日せんたく「#「せんたく」は底本では「せんた
くたく」をなさいましたが、しばらくのりをつけた
り、もも色キヤラコを青くしたり、おかしくてころげ
るほど笑いました。ベスさまは一ばんよくできたかた
で、手まわしがよく、わたしは大助かりです。なんで

もおぼえようとなされ、市場の買出しにもいかれます。みんなですいぶん険約しおくさまのおおせどおり、コーヒーも一週間に一回、食物は栄養のあるものにして、ぜいたくいたしません。エミイさまは、よい服を着たがったり、お菓子をほしがったりして、だだをこねなさるときもあります。ローリイさまは、あいかわらずのあばれんぼうですが、みなさんを元気づけて下さいますので、けっこうです。パンがふくらみかけたので、これでやめます。だんなさまによろしくお伝え下さいませ。肺炎が早くなおり「#「なおり」は底本では「おなり」」ますようお祈りいたしております。ハン

ナ・マレットより。

第二号付看護婦長殿

ラパハノツク川岸はきわめて静かにて全軍士気さかん。兵站部の処置よろし。テデイ大佐指揮の国防軍その警備にあたる。司令長官ローレンス將軍は、まい日軍隊の検閲をなされ、給養係マレットは宿舎をととのえ、ライオン少佐（犬の名）は夜中歩哨の任につく。ワシントンよりの吉報に、二十四発の祝砲をはなち、司令部に大観兵式をおこのう。司令長官の熱誠あふるる祝福をお伝えし、全快を祈るものなり。テデイ大佐

親愛なる夫人よ——御令嬢方みな無事。ベスと小生の孫は、まい日お便りいたしています。ハンナは模範的な召使、美しいベスさんを、まるで竜のように守っています。上天気つづきなにより、どうぞブルツクを御遠慮なくお使い下されたく、なお、費用お見込をこえる場合、当方よりお引出し願いたく、御主人に御不自由なきよう、御快方におもむかれしことを神に感謝いたしております。あなたの忠実な友であり召使のジエームス・ローレンス。

第十七 小さな真心

はじめの一週間というものは、マーチ家の美德は、となり近所へ配給してもあまりあるくらいでした。たしかにおどろくべきもので、たれもかれも申しぶんのない、よいきげんでしたし、わがままをおさえました。けれど、おとうさんについて、はじめのような心配がなくなると、しだいに気がゆるみ、標語の、せつせとはたらくということも怠りがちとなり、非常な努力のあとだもの、休んでもよかろうという気持で、たびた

び休みました。

ジョウは、髪をきった頭をつつまなかつたので、かぜをひき、マーチおばさんは、なおるまで来るなどいいましたので、それをいいことにして休みました。エミイは、家の仕事をやめて粘土細工をやりだしました。メグはキング家から帰つてする針仕事に、あまり身をいれなくなり、ワシントンへ手紙を書いたり、ワシントンから来た手紙をくりかえして読んだりしました。ベスだけは、たいして怠けず、まい日こまごました小さな仕事を忠実にやりました。おかあさんのことがこいしく、おとうさんのことが心配になるようなときは、

戸だなへはいつてすすり泣き、こつそり祈りました。

おかあさんが出発してから十日後、ベスがいました。

「メグねえさん、ハンメル家へいつて見て来ていただきたいわ。おかあさんはあの人たちのこと忘れないようにと、おっしゃったでしょう。」

すると、メグはあまり疲れたからいけないといいます。そこで、ベスはジョウねえさんに頼むと、かぜをひいているからといってことわりました。

「あなた、どうしてじぶんでいかないの？」と、メグが尋ねました。

「あたし、まい日いつてるのよ。だけど、あかちゃん病気でいて、どうしていいかわからないの。おばさんは、はたらきにいつてしまおうし、ロツチエンが看病してるけど、だんだんわるくなっていくようよ。おねえさんかハンナがいかなければだめだと思うわ。」

ベスが熱心になるので、メグは明日いくと約束しました。

「ハンナに頼んで、なにかおいしいものつくって、もらって持つていつておやりなさいよ。ベス、「#」は底本では「・」外の空気はあなた「#「あなた」は底本では「おなた」の身体にいいわ。」と、ジョウはいつて、

また、いいわけらしく言葉をそえました。「あたしも
いってあげたいけど、この小説書きあげてしまいたい
のよ。」

けれど、ベスは、

「あたし頭痛がしてくたびれているの。たれかいつて
下さるといいのに。」と、いかにも疲れているようなよ
うでした。

「エミイが、もうじき帰ってくるわ。あの子に一走り
いってもらおうといい。」と、メグがいました。

「では、あたしすこし休んで、エミイの帰るの待って
いますわ。」

そういつてベスは、ソファに横になりました。メグとジヨウは、それぞれの仕事にかかり、一時間あまりたつてもエミイは帰りませんでした。ハンナは台所でいねむりをしていました。ベスは、しかたなしに、そつと頭巾をかぶり、かわいそうな子供たちにやるものをバスケットにいれ、悲しげな顔をしてつめたい風のなかを出かけていきました。

ベスが帰つたのは、だいぶおそく、帰るところそり二階へあがり、おかあさんの部屋にこもりました。ジヨウが、用事でその部屋へいったとき、ベスが目をあかくして、カンフルの瓶を片手に持ち、薬箱に腰か

けているのを見ておどろきました。

「どうしたの？」と、ジヨウが尋ねると、ベスは近よつてはいけないという手つきをしました。

「ハンメルさんのあかちゃん、おばさんの帰つて来ないうちに、あたしに抱かれて死んでしまったの。」

「まあ、かわいそうに、どんなにこわかったでしょうね。あたしがいけばよかった。」

ジヨウは、後悔の色を顔にうかべ、おかあさんの大きなイスにかけてベスを抱きました。

「こわくはなかったけど、悲しかったわ。ロツチエンが医者をおよびにいったというので、あたしがあかちや

んを抱いて、ロツチエンを休ませてあげてたの。そうしたら、あかちゃんが、きゆうに泣き声をたててぶるぶるふるえて動かなくなったの。足をあたためたり、ミルクを飲ませたりしたんですがもうだめ、ちっとも動かないの。」

「泣かないでね、それから、どうしたの？」

「お医者さまが来るまで、あたし抱いていたの。お医者さまに死んでしまったとおっしゃって、ヘンリツヒとミンナののどを見て、「しよろこ熱」ですね、おくさん、もつと早くわたしをよびに来なければだめですと、むずかしい顔をしておっしゃったわ。すると、ハ

ンメルのおばさんが、貧乏だからじぶんの手でなおそうとしたんです。どうかほかの子を助けて下さいと
いったの。そして、わたしにね。早く家へ帰ってベラ
ドンナを飲みなさい。そうでないと、あなたもかかる
よとおっしゃったの。」

「ああ、ベス、あなたがかかったら、あたしはどうし
たって、じぶんを許せないわ！」

「だいじょうぶ、ベラドンナを飲んだら、いくらかよ
くなつたようだわ。」

「ああ、おかあさんが家にいて下すつたら！ あなた
は一週間以上も、ハンメル家へいったんだものきつと

うつったわ。ハンナをよんで来るわ。ハンナは病気の
ことなんでも知っているから。」

「エミイを来させないでね、エミイはまだかからない
「#「かからない」は底本では「かかない」から、うつる
と大へんだわ。あなたとメグねえさんは、もううつら
ないでしょうか？」

「だいじょうぶと思うわ。うつったってかまわないわ。
あなたばかりいかせて、くだらないもの書いていて、
じぶん勝手のむくいだわ。」

ジョウは、そうつぶやいて、ハンナのところへ相談
にいきました。ハンナはよく知っていて、手あてさえ

よければ死ぬものではないといつたので、ジョウはほつとし、今度は、二人でメグをよびにいきました。

ハンナは、ベスの容態を見たり、いろいろ尋ねてか
らいました。

「では、バンクス先生に診察していただいて手当をするんです。エミイさんはうつるといけないからしばらくマーチおばさんのところであずかっていたいただきましょう。それから、どなたか一人のこつてベスさんのお相手になつてあげて下さいませ。」

のこるのは、ジョウにきまりましたが、エミイは、
どうしてもいかないといい、いくらいなら、しょう

こう「#「しょうこう」は底本では「しょうこの」熱にか
かったほうがいいと、だだをこねはじめました。なだ
めても、すかしても聞き「#「聞き」は底本では「聞き」
ません。おりよく来たローリイに頼むと、ローリイは
いろいろとエミイの心をひくようなことを、まくした
てました。

「ぼくがまい日顔を出して、ベスの容態を知らせたり、
遊びにつれ出したりしてあげる。あのばあさんは、ぼ
くが好きなんだ。だから、できるだけけうまくやるよ。
芝居にもつれていってあげる。」

とうとうエミイは承知しました。

メグとジョウは、二階からおりて来て、エミイが承知したことを知って安心しました。バンクス先生をよびにいくのも、ローリイがしてくれました、親切なローリイは、生垣をとび越していきました。

バンクス先生がいらして、バスにはしようこう熱のきざしがあると診断しました。そして、ハンメル家の話を聞いてむずかしい顔をしましたが、たいていかるくすむだろうということでした。エミイは、すぐに家からはなれるように命ぜられ、予防の手あてをしてもらってから、ローリイとジョウにまもられて、マーチお婆さんの家へいきました。

マーチおばさんは、話を聞いて、

「だから、いわないことじゃない。よけいなおせっかいをして、貧乏人の家へいつたりするからだよ。エミイは、ここにいて、御用をしたらいいだろう。」と、いきました。

エミイは、おばさんから、目がね越しに、じろじろ見られるので、いやになってしまいました。が、それでも、ローリイとジョウが帰ってしまうと、気をとりなおして、

「あたし、とてもがまんできそうにないけど、やってみましょう。」と、考えました。

そのとき、おばさんのとこの、おうむのポーリーが、
「でていけ、ばけもの！」と、さげんだので、エミイ
はしくしく泣いてしまいました。

第十八 つづく暗い日

ベスは、まぎれもなく、しょうこう熱でした。ハン
ナと医者しか、その重態であることを知りませんでした。
た。ローレンス氏は、老体なので、病人を見舞うこと

は許されませんでしたから、すべてハンナが一人でやりました。

メグは、おかあさんへ手紙を書くとき、ベスのことに一言もふれないので、小さい罪をおかしているような気がしましたが、これはハンナがよけいな心配をかけてはいけないと、とめたためでした。ジヨウはバスにつききりでしたが、熱の高いベスは、ピアノをたたかっこうをしたり、はれあがったのだでうたおうとしたり、まわりの人の顔がわからなくなったりするので、すっかりジヨウはおびえてしまい、ハンナに、おかあさんへ知らせようといい、ハンナもそうしましよ

うかといっているところへ、ワシントンからの通信が来て、おとうさんの病気がぶりかえして、当分帰る見こみはないということでした。

来る日も来る日も、家のなかには悲しくわびしく、父母の帰りと、ベスの回復とをねがいながら、はたらいている姉妹の心は、なんとおもくるしかつたでしょう！

けれど、みんなそれぞれ心に教訓を受けました。メグは、今までの生活が、金であがなうことのできる、いかなるぜいたくよりも、はるかにたつといものであることを知りました。ジョウは、ベスが病気になって、

はじめてベスの美德を知りました。ほかの者のために
生き、手近の仕事をして家庭をたのしくしようとする、
そのあたたかい心持は、才能や財産や美しさよりも
たつといことを知りました。エミイは、早く帰ってベ
スのためにはたらきたいと思いました。労苦をいとわ
ぬベスが、じぶんのなおざりにしておいた仕事を、い
かにたくさん片づけしてくれたかを考えて後悔しました。

ローリイは、おちつきを失って、家のなかをうろつ
き、ローレンスは、ベスがじぶんをなぐさめてくれた
ピアノを思い出すのにたえられなくて、グラント・ピ
アノにかぎをかけてしまいました。牛乳屋もパン屋も

肉屋も、みんながベスのことを尋ねました。

「#空白は底本では欠落」ベスのすがたが見えないさびしいのでした。

ベスは、ぼろ人形をそば「#「そば」は底本では「そば」におきました。子ねこにもあいたがりでしたが、病気がうつるのを心配してがまんしました。すこし気分がいいと、手紙を書きたがりました。けれど、そのうちに、病状はわるくなり、意識が不明となり、うわ言をいうようになりました。バンクス先生は、一日に二回も来ました。メグは、机のひき出しに電報用紙を用意しました。

十二月一日は、冬らしい日で、風が吹き雪がふりました。その朝、バンクス先生は診察をすますといいました。

「おくさんが御主人のそばをはなれられるようなら、およびしたほうがよろしいです。」

ハンナは、うなずきました。メグは、イスにぐつたりたおれました。まつさおになったジヨウは、電報用紙をひつつかんで、吹雪のなかへとび出していききました。まもなく帰って来たとき、ローリーが来て、おとうさんがまた快方にむかったという手紙を持って来ました。けれど、ジヨウの顔が悲痛にあふれているので、

「どうしたの？　ベスわるいの？」

「ええ、おかあさんに電報うって来たの。もうあたしたちの顔がわからないのよ。おとうさんもおかあさんもいらっしやらないし、神さまも遠くへいっておしまいになった！」

ジヨウの顔に、涙がたきのように流れました。よろけそうなので、ローリイはその手をつかみ、なにかなぐさめの言葉をかけようとしたが、言葉もないので、ジヨウの顔をやさしくなでてやりました。ジヨウは無言の同情を心に感じ、やっとおちついて、感謝にみちた顔をあげました。

「ありがとう。もうだいじょうぶ、万一のことがあつても、こらえられるわ。」

「ぼくはベス死ぬと思わない。あんなにいい子だし、ぼくたちこんなにかわいだっているんだもの、神さまがつれていらつしやるわけではない。」

「やさしい、かわいい子は、いつでも死んでしまうんだわ。」

「きみ、つかれてるんだ、心ぼそく思うの、きみらしくないよ。ちよつと待ってて。」

ローリイは、階段をかけあがり、まもなくいっぱいのぶどう酒を持って来た。ジヨウはにっこり笑って、

ベスの健康のために飲むわといつて飲みました。

「あなたいい医者ね。そして、ほんとに気持ちのいいお友だちね、どうして、お返しできるかしら？」

「いずれ勘定書を出すよ。そして、今夜はぶどう酒よ、もつときみの心をあたためるものをあげるよ。」

「なんなの？」

「昨日、電報うったのさ。そうしたらブルック先生から、すぐ帰るといふ返電さ。だから、おかあさんは、今晚お帰りになる。そうすれや、万事好都合だろう。ぼくのやったこと気にいらない？」

ジョウは、狂喜してさけびました。

「おおローリイ！ おかあさん！ うれしい！」

ジョウは、ローリイにしがみつき、めんくらわせてしまいました。けれど、ローリイは、おちついて、ジョウのせなかをさすり、気がおちつくのを見て、二三度はずかしそうにキツスをしました。それで、ジョウはきゆうにわれにかえり、やさしくかれをおしのけ、息をはずませながらいました。

「だめよ、あたしそんなつもりじゃなかったのよ。いけなかったわ。でもハンナがあんなに反対したのに、電報うって下すったと思うと、うれしくて、とびつかずにいられなかったの。きつとぶどう酒のせいだわ。」

ローリイは、笑いながらネクタイをなおしました。

「かまわないさ。ぼくもおじいさんも、とても心配でね。もしもベスに万一のことでもあれば、申しわけない、だけどハンナは、ぼくが電報をうつと、となりつけたんだ。それでぼくかえって決心して、うってしまつたんだ。終列車は、午前二時につくからぼく迎えに行く。」

「ローリイ、あなた天使だわ。どんなにおれいっていいかわからないわ。」

「じゃ、もう一度とびつきたまえ。」と、ローリイがいたずらそうな顔をしていました。

「いいえ、もうたくさん、おじいさんがいらしたら、とびついてあげるわ。さ、あなたはお迎えにいった下さるのだから、早く帰ってお休み下さい。」

ジヨウは、そのまま台所へかけこみ、そこにいたねこにまで、うれしいお知らせ「#「お知らせ」は底本では「お知らせ」をいって聞かせました。ハンナは、

「おせっかいな小僧さんだが、かんべんしてあげましょ。おくさまが早くお帰りになるから。」と、いいました。

新らしい空気がさつと流れこんで来たようなよろこびでした。あらゆるものが希望にみちて来ました。姉

妹たちは、顔を合せるごとに、おかあさんが帰っていらっしやるのよと、はげまし合うようにささやきました。バスだけは、見るも痛ましく、おもくるしい昏睡状態におちていましたが、それでも姉妹たちは神さまとおかあさんを信頼していますので、今までほど心は苦しくありませんでした。

吹雪の一日が暮れて、とうとう夜が来ました。バンクス先生が来て、よくなるか、わるくなるか、いずれにしても、ま夜中ごろ変化が起るだろうから、そのころまた来るといって帰っていききました。

ハンナはつかれきって、ソファに横になってねてし

まいりました。ローレンス氏は客間をあちこち歩きまわっていました。ローリイはストーブの前に横わって、じつと火を見つめていました。姉妹たちは、すこしもねむくなくて、一生忘れることのなさそうな、ひきしまった気持でベスのそばにいました。

「もし神さまがベスをお助け下さったら、あたしもう二度と不平をいわないわ。」

メグが熱心にささやくと、ジョウも

「あたしは、一生、神さまにお仕えする。」と、答えました。

やがて、十二時が鳴りました。二人はベスのやつれ

た顔に、なにか変化が起つたような気がしたので、われ知らず病人の顔を見まもりました。家のなかは死のように静まり、むせび泣くような風の音だけが聞えませんでした。一時間がすぎましたが、ローリイが停車場へ迎えに出かけたほか、なにことも起りませんでした。「#「でした」は底本では「てした」。さらに一時間すぎました。吹雪のために汽車がおくれたのでしようか、それとも、おとうさんに大きな悲しみでも起つたのではないかしら。あわれな姉妹たちは、また心をなやましてはじめました。

二時まで、ジヨウは窓のそばへいつて、外を見てい

ましたが、ふとふりかえると、メグがひざまずいて「#
「ひざまずいて」は底本では「ひざまいて」います。あ、
ベスが死んだがメグはこわくてあたしにいえないので
と考えると、さつとつめたい恐怖が全身に通りすぎま
した。ジヨウは、すぐにベスのそばにいきました。苦
しそうなようすは消えていかにも安らかな顔です。
ジヨウは泣く気にも、悲しむ気にもなれず、かわいい
ベスの上に身をかがめて、そのしめった額に唇をあて
ました。

「さようなら、ベス、さようなら！」

その気配でハンナが目をさまし、いそいでベッドの

そばへ来て、手にさわったり、唇に耳をあてて息をしらべたりしていましたが、

「ありがたい、熱がさがりました。すやすやねていなさる。肌もしめつているし、息もらくになられた。」と、いいました。

姉妹がこのうれしい変化を信じかねているうちに、バンクス先生が来て保証してくれました。危険は通りすぎた。よくねむらしてあげなさいという、言葉を聞いたとき、お医者さんの顔は神さまの顔のように思われました。

お医者さんが帰ってから、メグとジョウとハンナは、大

きな安心のなかで、抱いたり、手を握り合ったり、よろこびのなかで、ゆめのような時間をすごしました。

冬の夜は、ようやく明けはじめました。メグは、咲きかけた白ばらの花を持って来て、

「あの子が目をさましたら、このかわいいばらと、おかあさんの顔が、一ばんはじめに見えるようにしてあげよう。」と、いいました。

メグとジヨウは、長い、悲しい一夜を明かし、おもいまぶたに、あかつきの空をながめたとき、こんなに美しい朝を見たことがないと思いました。メグが、
「まるで、おとぎの国みたいねえ。」と、いつてほほえ

むと、ジヨウがとびあがって、

「あら、お聞きなさい！」と、いいました。

そうです。ベルが鳴り、ハンナとローリイのうれし
そうな声、

「おかあさんのお帰りですよ！」

第十九 エミイの遺言状

家でこういうことが起っているあいだ、エミイは、

マーチおばさんの家で、まことにつらい日を送っていました。エミイは、まるで島流しにあつたようなわが身をふかく悲しみ、わが家でどんなにかわいがられていたかということ、生れてはじめて感じました。

マーチおばさんは、親切でしたが、けっして人をあまやかすようなことをしませんでした。エミイはしつけがいいので、たいそう気に入りました。それで、エミイをかわいがり、幸福にしてやりたいと思いました。が、さんねんながら、その方法がまちがっていました。

マーチおばさんは、すべて命令ずくめで、きちょうめんで、くどい長いお説教で、エミイを教育しよう

しましたが、これがまたエミイをすっかり不幸にし、まるでじぶんはくものあみにかかったはえのようだと思いました。

エミイは、まい朝、茶わんをあらい、スプーンや湯わかしを、ぴかぴかに光るまでみがかなくてはなりませんでした。それから、おそうじ、おばさんはちり一つ見のがさないので、なんとまあおそうじはつらかったですでしょう。それから、おおむのポリーに餌をやり、ちんの毛をくしけずり、足のわるいおばさんの用事を、なん度も召使のところへいいにいたり、階段をのぼったりくだったり、それがやとすむと、勉強をさ

せられます。その後の一時間！ そのとき運動か遊びを許されるので、どんなにたのしかったでしょう！

ローリイは、まい日訪ねて来て、エミイの外出を許してもらおうように口説きたて、やっと許されると、二人は散歩したり馬車にのったりして、たのしい時をすごしました。お昼の御飯を食べてから、おばさんに本を読んで聞かせます。おばさんがねむってしまった、じっとしてすわっていないければなりません。おばさんは、はじめの一ページでいねむりをやりだし、たいてい一時間はねむりました。それから、夕方まで、つぎはぎ「#「つぎはぎ」は底本では「つぎはば」仕事な

どをしなければなりません。夕飯までしばらくのあいだ遊びますが、夕飯をすましてからは、マーチおぼさんのわかいときの話やお説教を聞かされたいくつしてしまいます。そして、やっと話がおわると、エミイはねるのですが、つらい身の上を思いきり泣こうと思っても、一二滴の涙しかこぼさないうちに、いつもねむってしまいます。

もしローリイと、エスターばあやがいなかったら、こんなおそろしいまい日を、がまんできないとエミイは思いました。おおむのポーリー「#「ポーリー」は底本では「ローリー」だけでも、エミイを発狂させるほど

でした。ポーリー「#「ポーリー」は底本では「ローリー」はエミイの髪をひっぱったり、そうじしたばかりのかごに、ミルクをひっくりかえしてこまらしたりしました。また、ふとつたむく犬も、エミイの手にかかることばかりやりました。

エスターばあやだけは、エミイをほんとにかわいがってくれました。ばあやはフランス人で、マーチおばさんと長年暮らし、おばさんもこのエスターをいなければならぬ人と思っていました。ばあやは、エミイにフランスにいたころのめずらしいお話を聞かせてたのしませました。また、広い家のなかを勝手に歩きま

わらせて、大きな戸だなや、古風なたんすにしまいこんだものを、自由に見させてくれました。なかでも寶石箱には、真珠の首かざりやダイヤの指輪、そのほか、ピンやロケットなどいくつも、目もまばゆいばかりのものがありました。

「もしおばさんが遺言なされる場合、あなたはどれがほしいと思いますか？」と、そばについて、かぎをおろすエスターが尋ねました。

「あたし、ダイヤモンドが一ばん好き。だけど、ダイヤモンドの首かざりはないから、この首かざり」と、エミイは答えて、金と黒たんのじゅ玉でできて、さき

に十字架のついた首かざりに見とれました。

「あたしも、これが一ばん好きですが、首かざりにはもつたいたない。あたしのような旧教の信者はおじゆずに使います。」

「あなた、お祈りするのたのしそうね。」

「ええ、あなたもお祈りなさるといいですよ。化粧室を礼拝堂につくつてあげましょう。おばさんがいねむりをなさっているあいだに、じつとすわつて、神さまにおねえさんをおまもり下さるように、お祈りあそばせ。」

エミイは、その思いつきが気にいり、礼拝堂をつく

るように頼みました。

「マーチおばさんがおなくなりになったら、この宝石はどうなるのかしら？」

「あなたと、おねえさんたちのところへいくのですよ。遺言状を見ました。あたしは。」

「まあ、うれしい。今、下さればいいのに。」

「今は早すぎます。はじめに結婚なさるかたに真珠、それから、あなたがお帰りになるときには、トルコ玉の指輪、おくさまはあなたが、お行儀がいいといつて、ほめていらつしやいました。」

「ほんと？ あの美しい指輪がいただけるの。まあ、

うれしい。やっぱりおばさん好き。」と、エミイは、うれしそうな顔をして、それをきつと手にいれようと心をきめました。

その日から、エミイは、おとなしく、なんでもいうことを聞いたので、マーチおばさんはじぶんのしつけが成功したと思つて、たいそう満足しました。エスターは、礼拝堂をつくつてくれ、聖母の絵をかいてくれました。エミイは、心をこめてここに祈り、ベスの病気をなおし、じぶんを正しく導いて下さるよう願いました。

エミイは、善良になるために、マーチおばさんのと

ここに遺言状をつくろうと思いました。遊び時間に、エスターから法律上の言葉を教えてもらって、じぶんの所持品を公平にわけることを書きました。

エスターは証人となって署名してくれました。エミイは、ローリイに、第二の証人になってもらうつもりでした。ところで、この部屋には、流行おくれの服がいっぱいあったダンスがあつて、エスターはエミイに、それで自由に遊ばせました。その服を着て、長い姿見の前をいったり来たりして、わざとらしくおじぎをしたり、衣ずれの音をさせたりするのが、おもしろくてたのしみでした。

この日は、そんなことを、あまり夢中でやっていたので、ローリーの鳴らしたベルにも気がつかず、かつたし、そつと来てのぞいたのも知りませんでした。エミイは、青色のドレスと黄色の下着をつけも色のふちなし帽子をかぶり、扇子を使つてすましてねり歩いたのでした。ローリーが、後でジョウに話したところによると、エミイがそうやって氣どつて歩いていくあとから、おおむのポーリーがそのままをして歩き、ときどき立ちどまって、

「きれでしょ、あつちいけ、おばけさん、おだまり、キッスして！ ハッ！ ハッ！」と、どなりましたが、

それはとてもおかしな光景だったということでした。

ローリイは、おかしさのあまり、ふき出しそうになるのを、やっとこらえました。そして、ていねいに迎えられ、これを読んでよと、あの遺言状を見せられました。

遺言状

わたし、エミイ・カーチス・マーチは、正気にて所有物全部を左記の如く分配します。父上には一ばんいい絵、スケッチ、地図、額ぶちづき美術品。

母上には、衣類全部、ただしポケットのある青いエ

プロンはべつ。それから、わたしの肖像画とメダルを
真心こめて。

メグねえさんには、トルコ玉の指輪（もしいただい
たら）鳩のついている緑の箱と、首かざりのためのレー
ス、姉上をかけたスケッチ。これは姉上の愛する妹の
かたみ。

ジヨウねえさんには、一度なおした胸ピンと、青銅
のインクつぼ（ふたはおねえさんがなくした）それか
ら、原稿を焼いたおわびに一ばん大切な石膏のうさぎ。

バス（もしわたしの後まで生きていれば）には、人
形、小さなダンス、扇子、麻のカラー、それから病氣

がよくなり、やせてなければ、新らしいスリッパ、それから、わたしがいつも古ぼけたジョアンナのことをからかったことを、ここで後悔しておきます。

お友だちであり隣人であるローリイには、紙のかばんと、首がないようだとおっしゃったが、粘土細工の馬。つぎに心配のときに親切にして下さったお礼に、わたしの絵のなかで気にいったものさしあげます。ノートルダムが一ばんよくできています。

大恩人ローレンス氏には、ふたに鏡のついた紫の箱、ペンいれによろし。わたしたち一家、ことにベスへの御厚意をありがたく思っていることを思い起させるで

しよう。

なかよしのキティ・ブライアントには、青色のエプロンと、金色のじゅず玉の指輪を、キツスとともにあげる。

ハンナには、ほしがっている紙箱と、つぎはぎの細工を全部、わたしを思い出してもらうためです。

わたしの大切な所有品を全部処分せり、みなみな満足して死者を非難せざるよう望む。わたしはすべての人を許し、最後のラツパの鳴りひびくとき、みな再会することを信ず。アーメン、この遺言状は、千八百六十年十一月二十日、わが手によって認め封印す。

エミイ・カーティス・マーチ

証人 エステル・ベルノア

セオドル・ローレンス

最後の名は鉛筆で書いてありました。エミイはかれにそれをペンで書きなおして、正式に封印してほしいといいました。

「どうしてこんなことを思いついたの？ ベス「#」「ベス」は底本では「ベス」が形見わけでもするということょうなことを、たれから聞いたの？」

エミイは、そのわけを話してから、

「ベスはどうぞですって？」と、訪ねました。

「いいかけたからいうけど、ベスこのあいだ大へんわるくなって、ジヨウにいったの。ピアノはメグに、あなたに小鳥を、かわいいそうな古い人形はジヨウに。ジヨウに人形をかたみとしてかわいがってほしいって。ベスは、あまり人にあげるものないといって悲しがって、ぼくたちには髪を、おじいさんには愛だけをのこすんだって、でもベスは遺言状のことはなんにも考えていなかった。」

ローリーは、そういいながらサインしていると、大きな涙のつぶがおちて来ました。はっとして顔をあげ

ると、エミイの顔には苦痛の色があふれ

「遺言状には、二伸みたいなものをつけていいでしょうか？」

「いいでしょう。追伸というんでしょう。」

「じゃ、書きいれてちょうだい。あたしの髪みんな切ってお友だちに分けるって。へんなかつこうになるけど、そのほうがいいわ。」

ローリイは、エミイの最後の大きな犠牲にほほえみながら書き足し、一時間ほど遊びました。

「ベスは、ほんとに、そんなにわるいの？」

「そうらしいんだ。よくなるように祈ろうねえ、泣い

ちやだめですよ。」

ローリイは、にいさんのように、エミイの肩に手をかけてなぐさめました。ローリイが帰ってしまうと、エミイは小さな礼拝堂にはいり、夕ぐれのあかりのなかにさわって、涙を流しながらベスのために祈りました。もし、このやさしい小さい姉をうしなったら、たとえトルコ玉の指輪が百万もらっても、あきらめられないと思われました。

おかあさんと、娘たちの対面を語る言葉はないよう
です。こういう世にもうるわしい光景は、描写するに
むずかしいものです。そこで、それはいつさい読者の
みなさんの想像にまかせておいて、ただここでは、家
のなかに真に幸福がみちあふれ、メグのやさしい望み
がかなえられて、ベスが永いねむりからさめたとき、
その目にうつった最初のは、小さな白ばらの花と、
おかあさんの顔であったということだけを述べておき
ます。

ベスは、おとろえていたので、まだ氣力がなく、ただにつこりと笑って、おかあさんに身をすりよせましたが、また、ひっそりとねむってしまいました。そのあいだに、ハンナのよろこびでつくった朝のすばらしい御飯を、メグとジヨウがお給仕しながら、おかあさんがあがりました。あがりながらおかあさんは、おとうさんの容態、ブルック氏が後にのこって看病をしてくれること、帰りの汽車が吹雪でおくれたこと、「#」、「」は底本では「。」「ローリイが希望にみちた顔で迎えに出てくれたので、つかれと寒さでくたくたになっただが、口にいえない安心をしたことなどを、ひそひ

そと話しました。

その日はなんといい、ふしぎな気持ちよい日でしたらう。外はまばゆいばかり、雪に日が照っていましたが、家のなかはおちついて、看病といねむりだけで、安息所みたいでした。ローリイは、エミイにおかあさんの帰ったことを知らせにいきましたが、エミイは一刻も早くあいたいの、す早く涙をかわかしてその気持ちを おさえたので、ローリイは一人前の婦人みたいになりっぱな態度だとほめ、マーチおばさんも心から同意しました。そして、エミイは、ローリイに散歩につれていつてほしく思いましたが、たいへん疲れているようなの

で、それもがまんして、ローリイをソファにかけさせて休ませじぶんはおかあさんに手紙を書きました。書きおわってもどつてみると、ローリイはぐうぐうねむってしまい、そばにマーチおばさんが、いつになく親切心をあらわして、じつとすわっていました。

ところが、エミイのよろこぶことが起りました。おかあさんが来て下さったのです。おかあさんのひざにすわって苦しかったことをうち明け、それをなぐさめる微笑と愛撫を得たとき、エミイはこの市で一ばん幸福だったでしょう。二人は礼拝堂であいりましたが、おかあさんは、エミイのこの思いつきをほめました。

「家へ帰ったら、戸だなのおすみに、聖母とあかちゃん
の絵をかいてかざるつもりです。イエスさまの前には
こんな小さいあかちゃんだと思ふと、そんなに遠くは
なれていらつしやるかたではなく、いつもお助け下さ
るような気がします。」

おかあさんは、ほほえんでうなずきました。

「ああそうだ。おばさんが、今日キツスしてこれをゆ
びにはめて下さいました。そして、お前はわたしのほ
こりになるほどいい子だから、そばへおきたいとおつ
しやいました。これはめてても、よろしいでしょう
か？」

「美しいですね、でもまだ小さいんだから、すこし早すぎるように思えますね。」

「虚栄心を起さないようにします。ただ美しいからはめたい」「#「はめたい」は底本では「ほめたい」ではなく、あることを思い出すためですの。」

「マーチおばさんのこと?」

「いいえ、利己主義になつてはいけないということ」「#「いうこと」は底本では「うとこ」。」

おかあさんは、エミイのまじめは顔つきを見て笑うのをやめました。

「あたし、このごろ、じぶんのわるいお荷物のなかで、

利己主義が一ばんいけないと思いました。バスねえさんは利己主義でないから、あんなにかわいがられ、なくなると思うと、みんなはあんなに心配するんですわ。あたしベスのようになりたいんです。それで、これははめてみたらと思うんです。」

「よござんすよ、だけど、戸だなのすみのほうが、もつといいでしょう。よくなるうとまじめに考えたら、半分やりとげたようなものです。では、おかあさんはベスのところへ帰ります。元気でいなさいね。すぐに迎えに来ますからね。」

その晩、メグが安着の知らせる手紙をおとうさんへ

書いているとき、ジヨウは二階のベスの部屋にそっと
いきしましたが、おかあさんを見るとたちどまり、なに
か心配そうなようすで、ゆびで髪をかきました。

「どうしたの？」と、おかあさんが手をさしのべてや
りながら、尋ねました。

「お話したいことがありますのよ。」

「メグのことですか？」

「まあ、おかあさんの察しの早いこと！ そうなんで
す。あたし気になるもので。」

「バスがねむってますから、小さい声でね。あの、ま
さかマフオットが来たのではないでしょうね？」

「あんな人来たら門前ばらくわせてやりますわ。」と、ジヨウはおかあさんの足もとにすわりながらいいました。「この夏ね、メグねえさんがローレンス家へ手袋を忘れて来たんです。片方もどって来ましたが、ローリイが片方をブルツクさんが持っているといってくれるまで、あたしたちそんなことを忘れていたんですの。あの方それをチョッキのかくしにいられていて、それを落したのをローリイが見つけてかかったんです。そうしたら、メグは好きだけど、まだ年はわかいし、じぶんは貧乏だからいい出せないって白状なさったそうです。こと重大ではないでしょうか？」

「メグはあのかたを好いていると思えますか？」

「まあ！ 恋とかなんとか、そんなくだらないこと、あたしわかりませんわ。小説だといろいろ人目にたつ変化があるわけですが、メグにはちっともそんなことはなく、食べたり飲んだり、ふつうの人のように夜もよくねむりますわ。あのかたのこと、あたしがいっても、あたしの顔をまともに見ますし、ローリイが恋人なんかのじょう談をいっても、すこし顔をあかくするだけです。」

「それでは、メグがジョンさんに興味を持っていないとお思いなのね？」

「だれに？」と、ジヨウはびつくりしました。

「ブルツクさんのこと。かあさんはあの人のこと、このごろジヨンさんといってるんです。病院でそんなふうによぶようになったもので。」

「まあ、そう、おかあさんはあの人のこと、味方するでしょう。あの人はおとうさんに親切にしたんだし、もしメグさんが結婚したいといえば、おかあさんはあの人をしりぞけないでしょう。ああ、いやしい！ おとうさんのお世話をして、おかあさんにとりいって、じぶんを好きにさせるなんて。」とジヨウはまたいらだたしそうに髪をかきむしりました。

「まあ、そんなに怒らないでね、どういう事情か話してあげます。ジョンさんは、ローレンスさんに頼まれて、かあさんといっしょにいつて、つききりで看病して下すつたので、あたしたちは好きにならずにはいられませんでした。あのかたはメグについては公正明大で、メグを愛しているが、結婚を求める前にたのしく暮せる家を持てるように稼いでおきたいとおっしゃるんです。あのかたは、メグを愛し、メグのためにはたらくことを許してほしい。そして、もしメグにじぶんを愛させるようになったら、その権利を許してほしいとおっしゃった。あのかたは、りっぱな青年です。か

あさんたちはあのかたのいうことに耳をかたむけずにはいられませんでした。けれど、メグがあんなにわかくて婚約するのは不承知です。」

「もちろんですわ。そんなばかな話。なにかわるいこと起つてると思つてました。これじゃ予想していたよりもつとわるいわ。いつそのこと、あたしがメグと結婚して家庭のなかに安全にしておきたいわ。」

このおかしな考えに、おかあさんはほほえみましました。けれど、またまじめな顔になつて、

「あなたには、うち明けましたが、メグにはいわないで下さい。ジョンが帰つて来て、二人があうように

なったら、メグの気持がもつとはつきりわかると思いますがからね。」

「おねえさんは、とても感じやすいから、あの人の美しい目を見たら、一たまりもありませんわ。すぐに恋におちてしまつて、家の平和もたのしみもおしまいになります。ああ、いやだ。ブルツクさんはお金をかきあつめて、おねえさんをつれていき、家に穴をあけてしまいます。あたしつまらない。なぜあたしたちは、みんな男の子に生れなかつたんでしょう。」

ジヨウは、いかにもおもしろくないというようなよすすをして、言葉をつづけました。

「おかあさん」「#「おかあさん」は底本では「おかあん」も、あんな人おっぱらって、メグには一言もいわないで、今までのようにみんなでおもしろくしましょうよ。」

「ジョウ、あなたがたは、おそかれ」「#「おそかれ」は底本では「おれかれ」早かれ、家庭を持つことが、しぜんな正しいことです。でも、かあさんはできるだけ長く、娘たちを手もとにおきたいから、この話があんまり早く起つたのを悲しく思います。メグは十七になつたばかりだし、おとうさんもあたしも、二十までは約束も結婚もさせないことにしました。もしたがいに愛

し合うなら、それまで待てるでしょうし、待っている
あいだに、その愛がほんものかどうかともわかりません。」

「おかあさん、おねえさんをお金持と結婚させたほう
がいいと思いませんか？」

「かあさんは、娘たちを財産家にしたいとか、上流社
会へ出したいとか、名をあげさせたいとか考えません。
身分やお金があるかたが、真実の愛と美德を持ってい
て、迎えて下さるならよろこんでお受けもしましょう
が、今までの経験からいえば、質素な小さな家に住ん
で、日日のパンをかせぎ、いくらか不足がちの暮しの
ほうが、かすくすくないよろこびをたのしいものにして

くれるものです。かあさんは、メグがじみな道をふみ出すのを満足に思います。メグは、夫の愛情をしつかりとつかんでいける素質があつて、それは財産よりもっといいものです。」

「おかあさん、よくわかりました。あたしはメグをローリイと結婚させて、一生らくにさせてあげようと計画していたんです。」

「ローリイは、メグより年下です。」

「そんなこと」「#」「こと」は底本では「と」「かまうもんですか、あの人は、年よりふけているし、せも高いし、それで、金持で、親切で……」

「だけど、かあさんは、メグにふさわしいほどローリーが大人とは思いません。そんなこと計画するものではありません。」

「では、よします。人間は、頭にアイロンでもものせておけば、大人にならないものならいいけど、つぼみは花になるし、子ねこはおやねこになるし、ああ、つまらない。」

そこへ、書きあげた手紙を持って、メグがそつとはいつてきました。

「アイロンとねこが、どうしたの？」

「つまらない、おしゃべりしてたの。あたし、もう

ねるわ。いらっしやいな。」

おかあさんは、手紙に目をおして、

「けっこうです。きれいに書けました。ジョンによろしくって、かあさんがいつてると、書きそえて下さい。」

「あのかたのこと、ジョンとおよびになりますの？」

と、メグはにこにこして尋ねました。

「そうです。あのかたは、家の息子みたいな気がします。あたしたちは、あのかたが、とても気に入りましたよ。」

「そう聞いて、うれしいと思いますわ。あの人、さびしいかたです。おかあさん、おやすみなさいませ。お

かあさんが家にいて下さると、口でいえないほど安心ですわ。」

おかあさんが、メグにあたえたキツスは、やさしく、メグが出ていくと、つぶやきました。

「まだジョンを愛していないけど、まもなく愛するようになるでしょう。」

あくる日、ジョウはむずかしい顔をしていました。らしい秘密が心の重荷になったのです。メグはわざと尋ねないで、一人でおかあさんの世話をしました。そして、おかあさんは、ジョウに、あなたは永いあいだ家にとじこもっていたから、外へいつて思いきり運動でもしなさいといいました。そこで、ジョウは、ローリーのところへ遊びにいきましたが、このいたずら好きの少年は、ジョウがなにか秘密をもっているのをかぎつけて、本音をはかせようとし、なあにすっかり知っているといったりそんなことは聞きたくないといったり、しつこい努力を重ねたすえに、とうとうその秘密

がメグとブルック氏に関することだということをつし
かめました。そして、ローリイは、じぶんの家庭教師
が、その教え子に秘密をうちあけてくれないのを怒り、
無視されたその侮辱に、なにかしかえしをしようと思
いました。

ところで、メグにかわったようすがありました。メ
グは、話しかけられるとびつくりしたり、人から見ら
れると顔をあかめたり、なやましそうな顔をして裁縫
をしたり、おかあさんが尋ねると、どこもわるくない
と答え、ジョウが尋ねると、ほっておいてちょうだい
と答えました。

「メグねえさんは、あれを空気のなかで感じたんです。あれって恋のことですよ。そして、どんどん進行していくんです。ふきげんで」「#「ふきげんで」は底本では「ふきげんで」、食慾がなく、夜はねむらないし、「小川の声は銀鈴のようにささやく。」とうたっていたし、ねえ、おかあさん、どうしたらいいんでしょう？」

「待っているほかはありません。親切にしてあげて、おとうさんが帰っていらっしやれば、なにもかもかたがつかます。」

そのあくる日、ジョウがれの郵便局にはいつてもものを配達して、

「メグねえさんのところへお手紙よ。ローリイ、なん
だってこんなにかめしく封をしたんでしよう？」

メグは、手紙を読むと、ただならぬ声をあげ、おび
えたような顔をしました。おかあさんもジヨウもおど
ろいてしまいました。

「まあ、ひどい、あなたが書いて、あの不良少年が手
伝ったのでしょ。よくもあなたは、あたしたち二人に、
こんならんぼうな、いやしいまねができたものねえ。」
と、メグは、胸がつぶれでもしたように泣きました。

ジヨウは、おかあさんといっしょに、その手紙を読
みました。

最愛のマーガレットへ、

わたしはもう熱情をおさえることができなくなりました。帰宅する前にじぶんの運命を知りたく思います。まだ御両親には話さないでいますが、わたしたち二人が愛し合っていることがわかれば、御承認下さると思います。ローレンスさまは、必らずわたしを適当なところへお世話下さるでしょう。そのときは、愛する少女よ。わたしを幸福にして下さるでしょう。なお、御家族にはなにごともおもらしなきよう。ただ希望の一言をローリーさんの手をとおしてお送り下さい。あなたにささげたジョンより、

「まあ、まあこのいたずら小僧！　あたしがおかあさんの約束をまもっているしかえしなんだ。いって、うんと怒って、ひきずって来てあやまらせる。」と、ジヨウは、かつとなり、すぐにもとび出しそうにしました。が、おかあさんが、ひきとめきつい顔をしていました。

「ジヨウ、お待ち、まずあなたが、じぶんの証をたてなければなりません。あんたは、これに関係ありませんか？」

「いいえ、おかあさん。けっして。あたし今までにこの手紙見たこともなく、なんにも知りません。もし関

係したのなら、もつとうまく、もつとじょうずに書きます。あたしだつて、ブルツクさんがこんな手紙書かないことわかってますわ。」と、ジョウはいまいます。うに、その手紙を床にたたきつけました。

「あのかたの書いたのと似ています。」と、メグはそれをじぶんの手にあるのと見くらべながら口ごもりしました。

「メグ、まさかあなたは返事は出さなかったでしょうね？」と、おかあさんはせきこんでいうと、メグは、はずかしそうに、

「出しましたわ。」

ジヨウは、

「あたし、あのいたずら小僧をひっぱって来て白状させ、うん「#「うん」は底本では「うふ」としかつてやります。」と、ふたたび走り出そうとしました。

「およし、考えていたよりも、こまったことになりました。メグ、みんなお話しなさい。」

おかあさんは、メグのそばに腰をおろし、ジヨウをしつかりとつかまえました。

「はじめの手紙をローリーイから受取って、おかあさんのうち明けるつもりでしたが、ブルックさんが好きだとおっしゃったこと思い出して、四五日くらい秘密に

しといてもいいと思いましたが。お許し下さい、ばかなまねをしたばつです。二度とあのかたに顔を合すことができません。」

「それで、なんとお返事しましたの？」

「そんなことを考えるのはまだ年がわかしい、それにおかあさんに秘密を持ちたくないから、おとうさんにいつて下さい、御親切はありがたいと思いますが、ただのお友だちとしてつき合いをしていきたいと申しあげましたの。」

おかあさんは、いかにも満足そうにほほえみ、ジヨウは手をたたいて、

「おねえさんは、つつしみ深いわ、メグ、いってちよ
うだい、あの人、なんと行ってよこした？」

「恋文なんて出したおぼえはないし、いたずら好きの
妹さんが、わたしたちの名を勝手に使うのは遺憾だと
書いてありました。親切なお手紙でしたけれど、あた
しはずかしくて。」

メグはしおれておかあさんによりそい、ジヨウは
ローリイをののしりながら部屋を歩きまわりましたが、
ふとたちどまり、二通の手紙をとりあげて見くらべて
いましたが、

「二つともブルックさん見ていないと思うわ。ローリ

イが二つとも書いて、あたしが秘密をいわなかったものだから、おねえさんのをとっておいて、あたしをやりこめようというんだわ。」

「ジョウ、秘密なんか持つてはだめよ。」と、メグがいきました。

「いやだわ、おかあさんから聞いた秘密よ。」

「いいの、ジョウ、かあさんはメグをなぐさめますから、あなたはローリイをつれていらっしやい。すっかりしらべて、こないたずらやめさせます。」

ジョウはかけ出していき、おかあさんはメグに、ブルック氏のほんとの気持を、すっかり話して聞かせま

した。

「それで、あなたの気持はどう？あの人があなたのために家庭がつくれるのを待っていますか？それとも、なにもきめないでおきますか？」

「今度のことで心配させられたので、これからずっと、もしかしたら、いつまでも、恋人なんかのことにかわりたくありません。もしあのかたが、こんなばかげたことを御存知ないなら、いわないで下さい。ジヨウトとローリーにも口どめして下さい。あたし、だまされたり、からかわれたりしたくありません。ほんとに、はじさらしですわ。」

やさしいメグが、いつになく怒っているのを見て、おかあさんは、けっしてしやべらせぬこと、これからもよく注意するといつて、なだめました。

ローリーの足音が聞えると、メグは書斎にかけこみました。ジヨウは、かれが来ないといけないと思つて、なんの用事か告げませんでした。おかあさんの顔を見るとき、すぐに察して帽子をひねくりまわしました。ジヨウは、部屋から出ていくようにといわれ、犯人の逃亡をふせぐために、玄関へ来ていましたから、会見のもようは、メグにもジヨウにもわかりませんでした。話がすんで二人が部屋によびこまれたとき、ローリー

はいかにも後悔しているようでした。メグに、ローリイは謝罪し、ブルック氏がこのいたずらについては、なにも知らぬと保証しました。メグはそれでほっとしました。なお、ローリイは、きつぱりといいました。

「ぼくは死んでもブルック先生に話しません。どうか許して下さい。だけど、一ヶ月くらいあなたから口をきいてもらえなくても、しょうがないと思っっています。」

「許してあげますわ、でも、あまり紳士らしくないやりかたですわ、あなたが、こんな意地わるをなさろうとは思いませんでした。」

ジヨウは、そのあいだも、ひややかな態度で立っていました。非難の気持ちをゆるめないようにつとめました。ローリイは、すっかり感情をそこね、話がすむとおかあさんとメグにあいさつして出ていってしまいました。

ジヨウは、ローリイにもっと寛大にすればよかったと思いました。おかあさんとメグが二階へいつてしまつと、ローリイにあいたくなり、返す本をかかえておとなりへ出かけていきました。女中にむかつて、

「ローリイさん、いらつしやいますか？」と、尋ねると、在宅だがあわないでしようといひます。病気かと

重ねて尋ねると、

「いいえ、じつはおじいさまと口論なさいまして、お怒りになって、お部屋へ閉じこもってしまって、食事の支度ができたので、扉をたたいたのですが御返事ありません、おじいさまもお怒りで、まったく、こまつております。」と、いう返事でした。

「あたしいって、ようす見て来ましょう。二人ともこわくないから。」

ジヨウはあがっていき、ローリーの部屋の扉をたたき、よせといっても、かまわずたたき、扉を開けたとき、さつととびこみました。そして、床にひざまずき、

へりくだった。

「意地わるしてごめんなさい。仲なおりに来たの、仲なおりするまで帰らない。」と、いいました。

ローリイは、すぐに仲なおりして、ジヨウを立たせました。だが、まだぶんぶん怒っています。どうしたのか尋ねると、「きみのおかあさんから、だまっているといわれたことを、しやべらなかつたもので、おじいさんからこづきまわされたのだ。おじいさんは、ほんとのことをいえというが、メグのかかり合いさえなければ、ぼくのやっただけは、いうつもりだったが、それができないから、だまっただけがまんしたんだ。

だけど、しまいにえり首をつかまえたんで、ぼくはかつとなつて、なにをやり出すかわからないので、部屋からとび出したんだ。」

「そうよ」「#」「そうよ」は底本では「そうを」、きつとおじいさんも後悔していらつしやるわ。仲間おりなさい、あたしもいつしよにいつてあげるから。」

「だめだ、わるくないのに、二度もあやまるのはいやだ。だいたい、おじいさんは、ぼくをあかんぼあつかいになさる。かれこれ世話をやいてほしくないということ、おじいさんに知らせてやるんだ。」

「では、あなたこれからどうするの？」

「おじいさんがあやまつて、ぼくが、どんなことがあったのか話せないといったら、信用してくれればいい。」

「それや、むりだわ。あたしでできるだけ説明してあげるわ。あなたも、ここにいつまでもいて、芝居がかったまねをして、なんの役にたつのよ？」

「ぼくは、いつまでも、ここにいてもいいよ。そつと家出して、旅行にいつちやうんだ。おじいさんは、ぼくがいなくて、さびしくなったらわかるだろう。」

「そうかもしれないけど、とび出しておじいさんに心配かけるのわるいわ。」

「お説教はよしてくれ。ぼくはワシントンへ行って、

ブルック先生にあうんだ。あすこはおもしろいよ。いやな目にあつたんだから、うんと遊ぶんだ。」

「いいわね、いっしよにいければ、いいんだけど。」と、ジヨウが忠告者である立場を忘れてそういうと、ローリイは、

「来たまえ、すばらしいぞ、びつくりさせるんだ、お金はぼく持つてるし。」

ジヨウの趣味にかなつた突飛な計画でしたから、いきたかつたのですが、窓からじぶんの家を見ると、首をふつて、

「だめ、あたし男の子だったら、いっしよにいくんだ

けど。」

ローリイは、なおもすすめましたが、もうジヨウはじぶんの立場をまもって、

「おだまんなさい、このうえ、あたしに罪を重ねさせないでちょうだい。それよか、もしおじいさんに、あなたをいじめたお詫びをさせたら、家出をやめる？」

「ああ、だけどそんなこと、きみにできないよ。」

けれど、ジヨウは、やれると思つて、ローレンス老人の部屋へいきました。そして、本を返し、つぎの第二巻を借りるために、梯子にのつて書庫のたなをさがしました。そして、なんといつて話を切り出そうかと

思っていると、老人のほうから、ジヨウがなにかたくらんでいると見てとつたらしく、

「あの子は、なにをしたのかね？ なにかいたずらをしたにちがいないが、一言も返事をせぬからおどしつけたら、じぶんの部屋にはいつてかぎをかけてしまつた。」

「あのかた、わるいことをしたのです。けれどみんなで許してあげました。そのことは、母にとめられていきますから、申せません。ローリイは白状して、ばつを受けました。わたしたちは、ローリイをかばいませぬ。ある人をかばうために、だまっているのです。ですか

ら、おじいさまも、どうかこのことには立ちいらな
いで下さい。かえつて、いけません。」

「だが、あんたがたに親切にしてもらっていながら、
わるいことをしたのなら、わしはこの手でたたきのめ
してやる。」

老人の心は、なかなかとけませんでしたが、ジヨウ
は、そのわるいことが、たいしたことでないように、
事実につれないで、かるく話し、やっとうなずかせま
した。けれど、この際、すこし老人にもじぶんのしう
ちを考えるようにしてあげたいと思つて、

「おじいさまは、ローリイに親切すぎるくらいですけ

ど、ローリーがおじいさまを怒らせたりするときには、すこし気がみじかくはないでしょうか？」と、正直にいいました。

「いや、あなたのいうとおりじゃ、わしはあの子をかあいがっているが、がまんのならぬほどわしをじらすようなこともする。こんなふうだと、どうなるかな。」

「申しあげましょうか？あの人、家出しますわ。」

老人の顔は、さっと青くなり、美しい男の肖像画を見あげました。それは、わかいころ家出して、老人の意にそむいて結婚したローリーの父母でありました。ジヨウは、老人がくるしい過去を思い出しているのを

察し、あんなこといわなければよかったと後悔しました。それで、ジヨウはあわてていいました。

「でも、あの人、よつぽどのことがないと、そんなこととしませんわ。ただ勉強にあきると、そんなことをいっておどかさだけなんです。わたしだって、そんなことしたいと考えます。髪をきってからよけいそうです。だから、二人がいなくなったら、二少年をさがす広告を出して、インドいきの船をおさがし下さい。」

ジヨウは、こういって笑ったので、老人もほつとしたようでした。

「おてんば娘は、とんでもないことをいいなさる。子

供はうるさいが、いなくちやこまる。もうなんでもないといつて、食事にあの子をつれて来て下され。」

ジョウは、わざと、すなおにいうことをきかないで、詫状を書いて形式的にあやまれば、ローリイは、じぶんのばかもわかり、きげんをなおして来ますといつわりました。

「あなたは、なかなかくえない子じゃ。でも、あなたやベスに、いいようにされてもかまわん。さ、書こう。」

老人は、本式の詫状を書きました。ジョウは、それを持ってローリイの部屋にいき、扉の下からそれをなかへいれ、きげんをなおして、おりて来るようにいい

ました。ローリイは、すぐおりて来ました。階段のところで、

「きみは、えらいな。しかられなかった？」

「よく、わかって下すったわ。さ、新らしい出発よ。御飯を食べれば気もはれる。」

ジョウは、さつさと帰り、ローリイはおじいさんにあやまり、おじいさんもすつかりきげんをなおし、この事件はすつかり片づき「#「片づき」は底本では「片すぎ」しました。

けれど、メグは、この事件のために、ブルツク氏へ近づいたのでした。あるとき、ジョウは、切手をさが

すために、メグの机のひき出しをさがすと「ジョン・ブルック夫人」という落書のある紙片がありました。ジョウは、悲しそうなうめき声とともに、その紙片を火になげこみ、ローリーのいたずらが、じぶんとつての、不幸な日を、早めたことをしみじみと感じました。

第二十二 たのしい野辺

その後の数週間は、あらしが吹き去った後、日光がさしたようでした。おとうさんは、新年になれば帰宅するといつて来ました。ベスは、書斎「#「書斎」」は底本では「書斎」のソファまでいつて横になることができようになる、子ねこと遊んだり、人形の服をぬったりしました。ジョウは、まい日ベスを散歩につれ出し、メグはおいしい料理に腕をふるいました。エミイは、ねえさんたちに、できるだけのたからものをあげ、その帰宅を祝福されました。

クリスマスが近づくにつれ、いろんな計画がはじめられました。ジョウは、このいつもとちがうおめでた

いクリスマスを祝うために、とてつもない、ばかげた
お祭りを提案して、みんなを大笑いさせました。ロー
リイも、とつぴな計画をたて、勝手にさせておけば、
花火でも凱旋門でも、こしらえかねないいきおいでし
た。

ただ者でないジョウとローリイは、妖精のように夜
中に起きてはたらき、ベスのために、とてつもないも
のを庭先につくりあげました。それは、雪姫でひいら
ぎの冠をいただき、片手には花や果物をいれたバス
ケットをさげ、片手には新らしい譜本を持ち、肩に赤
い毛布をまきつけ、口からクリスマススの祝歌を書いた

吹流しを出していました。ベスは窓ぎわまでかつがれていき、この雪姫を見てどんなに笑ったでしょう。

祝歌というのは、こうです。

ユングフラウからベスへ、

ベス女王さま おめでとう

ちつともくよくよなさらずに

たのしく平和にすこやかに

お祝いなされよクリスマス

はたらき蜂さん果物食べて

お花のにおいをかきなさい

譜本はピアノをひくため「#」「ひくため」は底本では「くためひ」で

毛布はおみ足つつむため

ジョアナの肖像は

ラファエル第二世がねっしんに

きれいで、よくにるように

かきあげたもの、いいでしょう。

あかいリボンもあげましょう

ねこの夫人の尾のかざり

アイスクリームはペグの作

桶にもりあがるモン・ブラン山

アルプス娘のこのわたし

つくったローリイとジヨウ

雪の胸にひそませた

あつい情をお受け下さい

雪姫の贈りものを、ローリイがはこび、ジヨウがそれを贈るために、こっけいな演説をしました。ベスは、雪姫の贈りもののおいしいぶどうを食べて、

「あたし幸福でいっぱい、これでおとうさんがいらしたら、もうどうしようもないわ。」と、いいました。

「あたしも幸福」と、ジヨウも、前からほしがって、

やっと手に入れた二冊の本アンデインとシントラムのはいつているかくしをたたきながらいいました。

「あたしだって、そうよ。」と、エミイはおかあさんからいただいたマドンナとその子の版画をながめながらいいました。

「もちろん、あたしも。」と、メグは生れてはじめて手にした絹のドレスにさわりながらいいました。それはローレンス氏が、くれるといつてきかなかつたのです。「かあさんだって、そうですよ。」と、おかあさんも満足そうにいつて、今しがた娘たちが胸にとめてくれたブローチをなでました。

ところが、それから三十分の後に、まるで小説にでもありそうな思いがけないうれしいことが起りました。それは、ローリイが興奮して客間をのぞき、

「さあ、マーチ家へまたクリスマス・プレゼントがとどきましたよ。」と、いつて、すぐに、すがたをかけたことからはじまりました。みんなは、はじかれたように、なにごとかと、ローリイの言葉にかくされたものを考えていると、首まきをしたせの高い人がもう一人のせの高い人の腕によりかかりながらあらわれました。あつと、みんなはさけんでおしよせ、たちまちとりかこみ、すがりつき、よろこびのうずが家のなかにまき

かえりました。ああ、その人はおとうさんでした。そして、つづく笑い声、あんまりうれしいので、みんながいろんな、らちもないしくじりをしたのが、よけいおかしく思われました。やっと笑い声がしずまると、ブルツク氏はローリイをうながして帰り、おとうさんとベス、二人の病人はしずかにソファにかけました。

おとうさんは、上天気になったので、医者が帰宅を許してくれたこと、それで、わざとふいうちに帰って来たこと、ブルツク氏がよく世話をしてつれて来てくれたことなどを話しました。

ところで、その日のごちそうは、マーチ家では、は

じめてのすばらしいクリスマスのごちそうで、七面鳥のむし焼き、ほしぶどういりのプディングゼリイなど、ハンナができるかぎり腕をふるいました。そして、お客はローレンス老人、ローリイ、それからブルツク氏で、健康を祝して乾杯し、語りあい、歌を合唱しあつて、ごちそうを食べ、心ゆくばかりたのしいときをすごしました。

食事をおわってから、家族は炉のまわりに集りました。娘たちは、今年の思い出話をしましたが、じつと耳をかたむけていたおとうさんは、満足そうにいいました。

「小さい巡礼さんたちの旅としては、今年のあと半分はくるしい旅だったね。だけど、みんな勇ましく歩いて来たし、めいめいの重荷も、うまいぐあいにころげおちそうだね。」

「どうしておわかりですか？ おかあさんからお聞きになりました？」と、ジヨウが尋ねました。

「まだ、そんなに聞いてはいないが、わらの動きかたで風向きがわかるね。それで、おとうさんは、今日いろいろなものを発見した。まず、これが一つ。」と、おとうさんは、そばにすわっているメグの手をとって、「あれた手だね。やけどもある、まめもある。だが、む

かし美しかったときよりも、今のほうが美しいね。この手は家庭を幸福にしていく、勤勉な手だ。」

おとうさんは、にっこり笑って、むかいがわにすわっているジヨウをながめて、

「髪をきつたが、一年前の息子のジヨウではなくなつた。身じまいもきちんとして、すっかり女の子になつた。今は看病と心配のつかれで青い顔をしているが、ずっとおだやかな顔つきになつた。むかしのおてんば娘がいなくなつて、すこしさびしいが、そのかわり頼もしい心のやさしい娘があらわれた。」

「こんどはベスね。」と、エミイはじぶんの番の来るの

を待ちどおしく思いました。

「ベスは、病気でこんなに小さくなったから、うつかりしやべつっているあいだに、どこかへ消えてしまいうだね、まあ、前ほどはにかまなくなったようだが。」と、おとうさんは、もうすこしでこの子を失うところだと思い、しつかりとだきしめ、「ベス、どうかいつまでもじょうぶでいてほしいね。」

みんなだまって、それぞれなにか考えていました。と、おとうさんは、足もとのエミイの髪をなでながら、「エミイは、食事のとき、いつもとちがって、鳥の足の肉をとったし、またお昼からはお使いをしたし、し

んぼうづよく、みんなのお給仕もしたね、おしやれもしなくなつたし、指にはめているきれいな指輪のことも口に出さなかつたね。これでおとうさんには、エミイがじぶんのことより、他人のことをよけい考えるようになったことがわかつてうれしい。」

おとうさんの話がすむと、ジョウがベスにむかつて尋ねました。

「ベス、あなたなにを考えているの？」

「あたし、今日、天路歷程のなかで、クリスチャンとホープフルが、いろいろくるしい旅をつづけたあげく、年中ゆりの花のさいていてたのしい緑の野辺について、

ちようど今のあたしたちのように、目的地にむかって、また出発する前に、そこでたのしく一休みするところを読みました。」と、ベスはいつて、おとうさんのそばをはなれてピアノの前にいきました。

「お歌の時間でしょう。おとうさんのお好きな、巡礼の聞いた羊飼いの少年の歌、あたし作曲しましたの。」
そういつて、ベスはピアノをひき、二度ともう聞けないかと思つた美しい声で、ベスにふさわしい古風な讃美歌をうたいました。

へりくだるものにおそれなく
ひくきにあるものにほこりなし

まずしきものは、とこしえに
神のみちびきえらるべし

われもつものにことたれり
たとえおおくもすくなくも

ああ、そのたるをしるころ
主のころにかなうべし

おもにはかたにおもくとも、
じゅんれいのたびをつづけつつ
このよのさちはうすくとも

主のしゆくふくをうけるならん。

第二十三 マーチおばさん

はたらき蜂が、女王蜂のまわりにむらがるように、
おかあさんと娘たちは、そのあくる日、ベスのそばの
大きなイスに身体をうずめたおとうさんのまわりにた
かり、あらゆる親切なお世話をしました。ただ一人、
ふしぎなかわりかたはメグで、そわそわしたり、気が

ぬけたようになってしまいました。

午後、ローリーが、窓ぎわのメグを見て、雪のなかに片ひぎをつき、胸をうって髪をかきむしり、哀願するのように、りよう手を組み合せて、拝むようになかったうをしました。メグが、ばかなまねはおよしなさいという、ハンカチで空涙をふいていってしまいました。

「おばかさん、なんのつもりかしら？」と、メグがいうと、ジヨウが

「あなたのジョンが、こうなるという実演なのよ。あわれでしょう。」と、せせら笑っていました。

メグは、顔をしかめ、わたしをこまらせないで、今

までどおりみんなで遊んでいればいいといひますと、
ジヨウは、

「そうはいかないわ、おかあさんにもあたしにも、よくわかるけど、おねえさんはちつともおねえさんらしくなくなつたわ。遠いところへいっておしまいになつたみたい。あたしおねえさんみたいに、ぐずぐずしてるのきらい。だから、そうする気ならさつさときめる」といひのよ。」

「あたしのほうからいい出せるものではないし、おとうさんはあのかたに、あたしのことわかすぎるとおっしゃつたんですもの、あのかたもいい出せないわ。」

ジヨウは、メグが気がよわいから

「あの人にいい出されたら、なんていっていいかわからなくなり、泣き出すか顔をあかくするか、ノウがいないで、あの人の思うようになってしまう。」と、いますと、メグは

「あなたの思うほど、あたしばかりでもよわ虫でもないわ。あたしにだって、いうことはいえるわ。」とやりかえました。

それから、恋愛についていろいろ話したあげく、メグは、もしいい出されたら、

「あたしすっかりおちついていうわ。ありがとうござ

います。ブルツクさま、けれど、まだ年がわかすぎますので、今のところ婚約などできませんの。父もおなじ意見でありますの。どうかにもおっしやらずに、今までどおりお友だちとしておつき合い下さいませ。」

「ほう、いえるかしら。あのかたの感情を害することを気にして、きつと敗けてしまうわ。」

「いいえ敗けるものですか、つんとすまして部屋を出ていくわ。」

そのとき、だれか扉をたたきました。開けると、それはジョンでした。

「こんにちは、こうもりがさをとりに来ました。あの

う、おとうさんの御容態、今日はどうかと思ひまして。」

ジョンは、メグとジョウの、意味ありげな顔を見て、ややあわてながらいいました。

「たいそう元気でいますわ。かさたてにいますからつれて来ます。それから、あなたのお見えになったことも知らせて来ます。」と、ジョウは、かさとおとうさんを、ごつちやにした答えをしながら、メグに例の口上をいわせ、つんとすまして部屋を出ていかせるために、じぶんは部屋を出ました。メグは、ジョウのすがたが見えなくなると、すぐに、

「おかあさんが、お目にかかりたがっていますわ。」

どうぞおかけになって、すぐよんで来ますから。」

ジョンは、メグにむかつて、

「お逃げにならなくてもいいでしょう。ぼくがこわいんですか？」と、ひどく、感情を害したような顔つきでしたので、メグはびっくりして、

「父にあんなに親切にして下さったのに、どうしてこわがりましたよ。どうしてお礼を申しあげたらいいかと思っていますのよ。」

「どうしてお礼をしていただくか、いつてあげましようか？」と、ジョンは、メグの手を握りしめ、愛情をこめて見るので、メグは

「いいえ、いいえ、どうぞおつしやらないで。」と、やはりこわそうに手をひっこめようと思いました。

「ごめいわくはかけません。すこしでもぼくに好意を持って下さるかどうか知りたいだけです。ぼくは心からあなたを愛しています。」

さあ、今こそおちついて、例の文句をいうべきでしたが、すべて忘れ、うなだれて、わかりませんわと答えただけで、それもあまりにひくかったので、ジョンは聞きとるために身をかめなければなりませんでした。そして、ジョンは、すこしぐらいめいわくをかけたもいと思っただけで、満足そうに、

「ぼく、いつか報いられるかどうか、うかがいたいの
です。そうでないと仕事もできません。」と、いいまし
た。

「でも、わたしまだわかすぎますから。」

「ぼくは待っています。そのうちに、ぼくを好きにな
るようになって下さい。ぼくは教えてあげたいのです。
これはドイツ語よりやさしいのです。」

ジョンは、懇願するようでしたが、一面、なんとなく、
たのしそうで、成功をうたがわぬというような満
足そうなほほえみさえうかべていました。メグは、ア
ンニー・マフオットのことを思いうかべ処女の優越感

から気まぐれな気持にかられ、

「わたし、そんな気持になれませんわ。どうぞお帰り下さい。」と、いつてしまいました。それを聞いたジョンは、メグのそのふきげんにおどろき、

「本気でそうおっしゃるのですか？」と、部屋から立ち去ろうとするメグを追って、心配そうに尋ねました。

「ええ、あたし、そんなことで気をもみたくありませんわ。父も気にかけないようにといたしました。早すぎますし、そんな気になれませんわ。」

「あなたのお気持がかわって来てほしいものです。ぼくは待っています。ぼくをからかわないで下さい。」

「あたしのことなんか考えないで下さい。そのほうが、あたし、けっこうなのです。」

メグは、恋人の忍耐とじぶんの力を試そうとする気味のわるい満足を味わいながらいきました。ジョンは、青い顔になり、いかにもなやましそうでした。この興味ふかい場面に、マーチおばさんが、びっこをひきながらはいつて来なかつたら、そのつきにはどんなことが起つたでしょう？

マーチおばさんは、ローリーからマーチ氏が帰宅したことを聞くと、すぐさま甥にあいに馬車をのりつけました。びつくりさせるために案内も乞わずにはいっ

て来ましたが、たしかにメグとジョンはおどろき、メグはとびあがり、ジョンは書斎へ逃げこもうとしました。

「おや、まあ、これはいつたい、なにごとですかい？」と、老婦人は杖で床をたたき、二人がそこにいたのをあやしみました。

「あの、おとうさんのお友だちですの。」

「その男が、お前さんの顔をなぜあかくさせたかね？
なにかまずいことでもあったね。」

「ただお話ししただけです。ブルツクさんは、こうもりがさをとりいらしたのです。」

「ほう、ブルック、あの子の家庭教師がね？　ああ、わかりました。ジヨウがおとうさんのことづけをいいに来たとき、まちがえて口をすべらしたのを聞いた。お前さんは、承知しはしないだろうね？」

「しっ！　聞えますわ、おかあさんをよんでまいりましょうか？」

「まだいい。お前にいうことがあります。お前がその男と結婚する気なら、わたしはびた一文もあげないからね、よくおぼえておき、そして、りこうにおなりよ。」

老婦人は、どんなにやさしい人にも反抗心を起させる人で、今もメグは、強制的にそういわれると愛情と

片意地で、ジョンを好きになろうと思ひ、いつになく強気で、

「あたしは、好きな人と結婚します、お金はあなたの好きな方にかけて下さいませ。」

「なんですって！ そんな口のききかたをして、今に貧乏人との恋にあきて後悔しますよ。」

「お金持と、愛のない結婚するよりましですわ。」と、メグはゆずっていません。

老婦人は、メグがこんなことをいい出したのでおどろき、今度はやわらかに説き伏せるつもりで、

「わたしは親切からいふんです。お前さんはりっぱな

結婚をして家の者を助けなければならぬのです。」

「いいえ。両親ともそんなこと考えません。両親ともジョンが好きです。貧乏ですけれど。」

「お前さんの両親は、世間知らずのねんねだからね。そのブルツクとやらは、貧乏で、金持の親類もないそうだね。」

「でも、親切な友だちがたくさんいますわ。」

「友だちがなんの力になるものか」「#「ものか」は底本では「ものが」、それに、その男には職業もないんでしよ
う?」

「まだ、ありません。ローレンスさまがお世話して下

「さいます。」

「あんな変物が頼みになるものかね。とにかくお前はもうすこしりこうだと思っていたが。」

「ブルツクさんは、りっぱなかたです。かしこいし、才能もありますし、勇気もおありになります。わたしのこと思っ下さるのを、わたしは誇りにしていません。」

「あの男は、お前に金持の親類があるから、それでお前を好きになつたんだよ。」

「まあ、どうしてそんなことおっしゃるんですか？わたしは、どうしても、あのかたと結婚します。」

メグは、そこまでいって、もしかジヨンに聞かれたらと思つて、はつとして言葉をきりましたが、マーチおばさんはたいそう怒つて、

「よろしい、強情だね、あたしは、もうお前のおとうさんにあう気力もない。結婚したからつて、あたしからなにかもらうなんて考えたつてだめです。永久におさらばだよ。」と、おそろしい顔つきで帰つていききました。のこつたメグが、ぼんやりつつ立っていると、ジヨンが来て、

「メグ、ぼくのこと弁護して下さいありがとうございます。それから、おばさんにはあなたがわずかにしろぼくのこ

と愛して下さることを証明して下さい。お礼をいいますよ。」

「お婆さんが、あなたのわる口をいい出すまでは、どんなにあなたを思っていたか、わたしにもわかりませんでしたわ。」

「では、ぼく帰らないで、ここにいて幸福になれますね、え？」と、ジョンがいましたが、ここでもつんとすまして立ち去るわけでしたが、メグは、ええとやさしくささやいて、ジョンの胸に顔をうずめ、ジョウの手前、永久に頭のあがらぬことになってしまいました。

十五分ほどして、ジヨウが二階からおりて来て、予期しなかった変化におどろき、まるで息の根がとまるほどでした。しかも、ジヨンは、ぼくたちを祝つて下さいというではありませんか。ジヨウは悲痛なさげびとともにとび出し二階へかけあがり、

「ああ、たれか早く階下へいつて下さい。ジヨンがおかしなまねをして、おねえさんがよろこんでいるわよ！」

おとうさんと、おかあさんは、いそいで階下へいきました。ジヨウは、ベスとエミイにおそろしいニュースを聞かせながら、ののしりわめきました。二人と

もむしろそれをうれしいニュースと考えていたので、
ジョウはじぶんの屋根部屋へいき、そのなやみをねず
みたちにうち明けました。

その日の午後、客間でなにがあつたか、だれも知り
ませんでした。けれど、いろいろの話がかわされ、お
となしいジョンが、じぶんの望みや計画を非常な熱心
さで話したことは、たしかでありました。

夕飯のベルが鳴り、みんなが食卓についたとき、ジョ
ンとメグは、この上もなくたのしそうに見えたので、
もうジョウも、さつぱりと、じぶんの感情を流し、二
人を祝福する気持になりました。むろん、エミイもベ

スも、心からよろこび、エミイは二人をスケッチしようと思いたちました。この古ぼけた部屋にこの一家の最初のロマンスが、まばゆいばかりかがやき出し、たいしたごちそうはありませんでしたが、それはそれほどの楽しい食事でありました。

おかあさんがいいました。

「今年は悲しみをおいかけないように、よろこびがやつて来る年らしいですが、その変化がはじまったようです。でも、すべてうまくいきそうで、けっこうです。」

「来年は、もつといい年になればいいと思います。」と、ジヨウにはメグをうばわれたことは、いい年とは思え

ませんでした。

「ぼくは、さ来年が、もっといい年になってほしいと思います。ぼくの計画が進んでいけば、きつとそうなります。」と、ジョンがメグにほほえみかけながら、そういうと、結婚の日が早く来ればいいと待ち遠しく思っているエミイが尋ねました。

「待ち遠しくありません？」

「勉強することがありますから、みじかいくらいですわ。」と、メグが答えました。

「あなたは、ただ待っていて下さればいいんです。はたらくのはぼくがやります。」と、いって、かれは仕事

の手はじめとして、メグのナプキンをひろってやりました。

それを見てジョウは、氣にくわなかつたのですが、そのとき、玄関の扉がぱたんと開いたので、

「ローリーだわ、これでやつと氣のきいた話ができそうだわ。」と考えましたが、ローリーが来たときすつかりあてがはずれたことがわかりました。というのは、この事件のすべてがじぶんの考えで成立したというような、あやまった考えを起して、ジョン・ブルツク夫人のために、結婚式用の大きな花束をかかえて来たからです。

「ぼくは、ブルック先生が、じぶんの考えどおりにな
さることがわかっていました。いつだって、そうなん
です。やりとげようと決心なさると、空がおちて来よ
うと、やりとげておしまいになります。」とローリイは、
花束とお祝いの言葉とをささげながらいきました。

「おほめにあずかって恐れいります。ぼくはそれを未
来のよい前ぶれとしてお受けいたします。そして、ぼ
くたちの結婚式には、あなたを招待することをきめま
しょう。」

「地球の果てからでもまいます。そのときのジョウ
の顔を見るだけでも、大旅行して来るねうちがありま

す。きみは、うれしそうな顔をしていませんね。どうしたの？」と、客間のすみのほうへいくジヨウの後についていきました。みんなは、ローレンス氏を迎えるために、そこへ集っていきました。

「あたし、この結婚に不賛成だけど、がまんすることにしたら、一言も反対はいわない。だけど、メグをやってしまうの、どんなにつらいか、あなたにはわからないわ。」と、いったジヨウの声はかすかにふるえていました。

「やってしまうんじゃない。半分だけのこることになる。」

「ううん、もとのとおりにはない、あたしは一ぱん大切な友だちをなくしたのよ。」

「だけど、ぼくがいる。たいしてやくにたたないけど、一生きみの味方をする！」

「それや、わかってるわ。ありがたいと思うわ。ローリー、あなた、いつだって、あたしをなくさめてくれたわね。」と、ジヨウは感謝をこめてローリーの手をにぎりました。

「さあ、いい子だから、うかぬ顔をするのおよし。メグさんは幸福になるし、ブルック先生は就職なさるし、おじいさまはよくめんどうを見てあげる、メグがいつ

ちまつたら、ぼくも大学を卒業するしそしたら、いつしよに外国を漫遊するか、どこかへすてきな旅行をしよう。なぐさめになるよ。」

「そりや、いいなぐさめねえ、でも、三年のあいだに、どうなるかわからないわ。」

「そりやそうだが、きみは未来をのぞいて、ぼくたちがどうなるか見たかない？」

「あたし、見たくないわ、なにか悲しいことが見えるかもしれないもの。今はみんな幸福だけど、これ以上、幸福になれると思わないわ。」

ジョウは、そういつて部屋を見まわしましたが、か

がやくばかりにたのしそうなありさまに、ジヨウの目もかがやきました。

おとうさんとおかあさんは、二十年前にはじめられたじぶんたちのロマンスの第一章を、心しずかによみがえらしてすわっていました。エミイは、二人の恋人がみんなからはなれて、じぶんたちだけの美しい世界にすわっているすがたを写生していました。ベスは、ソファに横になって、ローレンス老人とたのしそうに語っていました。老人は、ベスの手をにぎりしめ、その小さい手がじぶんを、彼女の歩いて来た平和な道にみちびいてくれるような気がしていました。

ジョウは、彼女らしい、きりつとしたしずかな表情で、ひくいイスによりかかり、ローリイはそのイスのせにもたれ、あごを彼女のちぢれ毛の頭とならべ、二人をうつしている長い鏡のなかの彼女にほほえんでうなずいていました。

こうして、メグとジョウとベスとエミイが、たのしくしているところへ幕はおりました。この幕がふたたびあげられるかどうか、それは、この「愛の姉妹」とよばれる家庭劇の第一幕が、いかにお客さまがたに、迎えられるかによるのであります。

おわり。

底本…「若草物語」 京屋出版社

1948（昭和23）年6月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「勝ち↓がち　かも知れ↓かもしれ　給↓たま　（て）
見↓（て）み」

また、底本では一部連濁の「づ」が「ず」になっていますが、「づ」に統一しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区

点番号(5-86)を、大振りにつくっています。

入力..大久保ゆう

校正..秋鹿

2006年10月16日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。